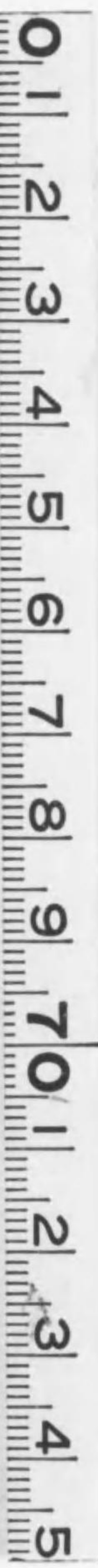


350-421



\*1200601311097\*

西歌  
廂劇象



始



西廂歌劇



350

421



I種

W



\*1200601311097\*

序

支那文學多般古來概行於我國惟戲曲一類能之解者  
迄今寥寥予素憾焉前年予僑居燕京嘗將聖歎批西廂  
之驚艷借廂二章譯成東文載之於燕塵雜誌後以譯文  
不甚妥當自覺索然姑絕續稿去冬 恩師櫻楓齋先生  
告曰如譯西廂聖歎本之多改竄之迹莫如眉公本之近  
乎原作且慙憑予再試翻譯予恐千古傳神文章枉爲劣  
手俗了乃請 先生鼎助幸獲俯諾爾來俗務之間執筆  
半稔而始譯就此書譯筆鄙淺罪應歸予不才然均經

序

序

先生精密刪潤庶幾足以略窺原作之妙趣乎。

大正三年八月上浣

宮原民平識

2

### 西廂記梗概

本劇はもと、元の王實甫第十六齣までを作り、關漢卿之を續ぎて第二十齣までを加へ、以て完全ならしめたるものといふ。本劇に於ける登場人物は、故崔相國の女崔鶯々、其母鄭夫人、其侍女紅娘、其の弟歡郎、故禮部尙書の遺孤張珙、其從者琴童、普救寺の長老法本和尙、其弟子法聰及惠明と張珙が舊友杜將軍、確賊將孫飛虎及鄭夫人の内姪鄭恒の十二人なり。今左に本劇の梗概を述べん。

唐朝徳宗帝の世に張珙字は君瑞と呼べる一青年ありけり。才貌人に優れ、殊に學問に秀でたりけるが、不幸にして早く父母を失ひ、具に螢雪の苦を嘗め、貞元十七年春の初、文官の試験に應ぜんと、故郷西洛を立ち出で、皇都長安に向ふ途すがら、

西廂記梗概

1

ある日黄河の畔なる今の山西省蒲州といへる城に到り着き、此地にきこえたる名利普救寺に参詣しぬ。この時恰も普救寺には故宰相崔珙の遺族等、故人の柩を奉じて假住居したりけるが、張珙不圖崔家の姫鶯々が傾國の容姿を見てより情思禁じがたく、萬一のたよりにもとて、寺僧に請ひて己も寺内に寓居することとなりけり。されど容易く心中をあかすこと得べきにあらねば、ある時は詩を以て姫が情を誘ひ、ある時は法會にことよせ、其の艶貌にあこがれしが、陌頭楊柳の枝已に春風に吹かる、姫豈落花流水の情なからんや。時ふるまゝに張珙が誠は漸く姫が心を動かすに到りぬ。

この頃孫飛虎と云へる者ありて、天下の擾亂に乗じ、五千人の部下を率ゐて蒲東の人民を劫掠し居たりけるが、鶯々の國色あるをき、彼女を得て手活けの花と眺めんものと、つひに普

救寺をうち圍みけるに、寺中の僧俗ひたすらに恐れ惑ふのみにて、宜き手段も無かりける折から、張珙は、賊を破りなば鶯々が婿にならんと約束にて、一策を案じ、快僧惠明を使とし、此處より程遠からぬ蒲關に在る盟友、白馬將軍杜確に一書を飛ばし、其の救をもとめ、遂に賊兵を破ることを得たり。しかるに、崔家の夫人は、賊すでに壊滅せるより俄に前言を食み、鶯々は先夫の在せし時、夫人の甥鄭恒といへる者に許嫁したるを口實として、張珙との婚姻を肯ぜず、かたばかりの小宴を開きて張珙が勞を謝し、鶯々とはたゞ兄妹の禮を爲さしめければ、張珙は心の中憤怒やる方なかりき。しかも鶯々を思ふ心はますます切にして、憂悶のあまり病を得るに至りしが、鶯々もまた張珙を慕ひて日夜小さき胸をいたためけり。鶯々が侍女紅娘は年少けれど、其性さかしく、才子佳人の間を周旋し、様々

の心づくしの後、つひに二人を月下に契らしめたるが、日數多く経るまゝに、二人が往來も繁くなり、やがて夫人にそれと覺らるゝに至りぬ。されど此の罪の原因は夫人が違約より出でしものなれば、いたく罰すべきに非ずとて、こゝに張珙が婚姻をゆるしかつ張珙に早く京に上り試験に應じ、官を得て歸らんことを勧めぬ。

秋の暮つ方、張珙は崔家の人々、寺の長老たちと、十里の長亭に分袂し、童僕一人伴ひて、風寒き旅路につきしが、日も夜も忘れかねたるは、鶯々がうへのみなりけり。かくて幾日か閲して京にいたり、翌年試験に應じて首尾よく第三番探花郎に及第しければ、此の趣を鶯々に報じけるに、鶯々よりも返書に添へて種々の贈物をおこしぬ。

夫人の甥鄭恒は都にありて、夫人より速に來れとの書信に接

せしが、家事にまつはられて延引し、此の頃やうやく都をたち出で、蒲東に到り着き、こゝにはじめて鶯々を張珙にめあはせし由聞きて、大に妬心を燃やし、張珙は京にて已に衛尙書が家の婿になりぬとあざむき、自身鶯々と速かに婚せんことを企みしが、恰も張珙が河中府尹の官を授けられて還り來れるに會ひ、遂に其の偽露顯し、折から杜將軍も來あはせていたく鄭恒を辱めければ、鄭恒居た、まらずして逃げゆき、終に自殺して此の世を果つるに至りぬ。

張珙は積日の憂苦一朝に霽れ、杜將軍の媒酌にて鶯々と妹脊の杯をかはし、こゝに才子と佳人はめでたく偕老の誓をかためたりとなん。

## 凡例

- 一、本書は今坊間頗る得易き陳眉公本を底本として、天樵山人執筆し櫻楓齋主人之を潤飾したるものなり。
- 一、陳眉公本中、摺入の蹟著き者は、之を削除したれども、其他の互唱合唱等、純然たる南戯の形式に變じある所は、尙其まゝ、になしおきたり。但し賓白は其要を摘みて地の文に改めたる處多し。
- 一、語句の意義に就きて、古來より其解區々なるものは、大抵王伯良本に據りて之を定めたり。
- 一、元劇五宮七調其各曲牌の譜數總計三百三十五種、今本書を成すに當り、我國普通の五七調又は七五調のみにては、餘りに平板に過ぐるを恐れ、四々、四六、六七、四八等種々の排句法

を試みたり。されど五七調が中途にて七五調に變じ居るなど、嚴格なる意味の排句法に成り居らざるは、原文に忠實ならんことを務めたる、已を得ざる結果なり。

一、么の曲は、すべて前曲の譜を繰返すものなれば、之を翻するに當りては、前曲を七五にしたらば、么も同じ七五にすべき筈なれども、本書は此例に據らず。

一、本書は意義の通達を旨として、極めて平易なる辭句を用ゐ、時に一二現代の新語をすら用ゐたり。悠然自得の貌を「をさまりぬ」としたる如し。

一、一曲章中にも意義の上より區劃を要する所は、行をあけて之を表せり。されば曲章の終毎に句點を施すを例としたれども、其意は仍次の曲章に連絡することありと知るべし。

### 西廂歌劇目次

第一齣	佛殿奇逢(引子夫人唱、么鶯々唱、張生唱)	一
第二齣	僧房假寓(張生唱)	二〇
第三齣	墻角吟詩(張生唱)	四六
第四齣	齋壇鬧會(張生唱、鶯々紅娘參唱)	六三
第五齣	白馬解圍(鶯々唱、惠明唱)	七七
第六齣	紅娘請宴(紅娘唱、張生參唱)	一五
第七齣	夫人停婚(鶯々唱、張生紅娘參唱)	三二
第八齣	鶯々聽琴(鶯々唱)	五三
第九齣	錦字傳情(紅娘唱)	六八



目次

第十齣 妝臺窺簡(紅娘唱)……………一八七

第十一齣 乘夜踰牆(紅娘唱)……………二一〇

第十二齣 倩紅問病(紅娘唱張生參唱)……………二三八

第十三齣 月下佳期(張生唱紅娘參唱)……………二四四

第十四齣 堂前巧辯(紅娘唱)……………二六三

第十五齣 長亭送別(鶯々唱)……………二七八

第十六齣 草橋驚夢(張生唱鶯々參唱)……………三〇〇

第十七齣 泥金報捷(鶯々唱張生紅娘參唱)……………三三八

第十八齣 尺素緘愁(張生唱)……………三三六

第十九齣 鄭恒求配(紅娘唱)……………三五四

第二十齣 衣錦還鄉(張生唱鶯々紅娘參唱合唱)……………三六九

附錄

- 一、元曲源流  
 聲律の由來—南北曲  
 體製の沿革  
 附元劇の要素
- 二、元劇に於ける西廂の地位
- 三、西廂の文辭と語法
- 四、西廂の諸本

目次

目次

目次終

西廂歌劇

金井保三  
宮原民平 共譯

第一齣 佛殿奇逢

(夫人、鶯々、紅娘、歡郎登場す)

夫人はもと鄭家の女にして崔相國に嫁ぎけるが、此頃相國病を獲て不幸黄泉に旅立ちければ、家族を伴ひ故人の柩を奉じ、博陵の墳塋に遷らんとて河中府まで抵りけるに、はからず旅路に故障ありしかば、遂に此地なる普救寺に、少時逗留すること、なりぬ。故相國の遺れがたみの鶯々は、世にも稀なる才色にして、花ならば今を盛りの十九

第一齣 佛殿奇逢

西廂歌劇

歳豫て従兄にあたれる鄭尙書の長子鄭恒字を伯常と呼べる者に許嫁せる身なり。紅娘は兒飼の侍女にして心さかしき婢なり。また歡郎は後に崔家の嗣たるべき小童なり。

普救寺は昔則天武后敕願の香火院にして、崔相國さきに此佛寺を修造し、現長老法本和尙は、かつて崔相國の剃度したる縁故あれば、夫人は此寺の別院に靈柩を遷し、京なる鄭恒を招き寄せ、再び共に博陵へ柩を送り行かんとす。世に時めきし宰相が一家の變りはてたる佗しさぞ哀れなる。

「夫人」唱「七五」

夫は都に世を果て、

やもめの母と孤女と

旅路さすらふ此ひつぎ

梵王宮を假のやど

道はるかなる博陵の

舊塚いつかゆきつかむ

涙ぞ落つるはらくと

山ほと、ぎす血を濺ぐ

つ、じの花の紅としも

涙ぞ落つるはらくと。

「鶯々唱」七五

心いたむる春のくれ

蒲東のみ寺寂しくも

とざして世をば阻つれど

水くれなゐに花散りて

ちゞに亂る、我こゝろ

さそふ東風こそ怨なれ

夫人は紅娘に命じて、佛殿に人無ければ鶯々とともに憂晴しのそゞろあるさせよといふ。二人は即ち連れ立ちて庭前に出づ。

〔夫人、鶯々、紅娘、歡郎下場し、引き換りて張生は琴童を随へて登場す〕

張生は名を珙字を君瑞と呼び西洛の人にして、其父はもと禮部尙書なりけるが、五十路にて病逝し、後一年にして、母もまた身まかりしかば、今は孤兒の身の上なり。貞元十七年如月の初つ方科擧に應ぜんとして都に上る途すがら、河中府を過ぎけるが、先に兄弟の契を結べる杜確字は君實といふ者、武擧狀元に登第し征西大元帥に任ぜられ、十

萬の軍兵を統率して、蒲關に鎮守せる由を聞き、彼を訪づれんため此地に來れり。螢窓雪案の苦學を積み滿腹の文章を懐いて、徒に湖海に飄零せるは、これぞ萬金の寶劍秋水を藏し、滿馬の春愁繡鞍を壓するもの。

〔張生唱〕五七

うらぶれて彷徨ふ我や

風に舞ふよもぎの枯葉

眼をあげて天を仰げば

日はちかく長安とほし。

〔同〕同調

蠶魚のごと書籍にかくれて

西廂歌劇

ひたすらに學びのみちの  
奥ふかくたれこめをれば  
すゞりさへ穴を穿ちぬ  
こゝろざす鵬程九萬  
雪のまどほたるのひかり  
いつしかに十年は過ぎぬ  
才たかく俗機と合はず  
時そむき望えとげず  
いたづらにつとむる業わざか  
はかなしや斷簡殘篇

「同」  
「七五」

黄河の流すさまじと

いへるはいづく此處やこれ  
齊梁にそひ秦晋を  
わかつこの河幽燕は  
かなたにせきて目もはるに  
空うつ浪の雲や水  
水や雲なるあまのがは  
竹索によるうきはしは  
蒼龍水に臥すごとし  
東西たへに貫く九州の地  
南北たへに入れくる百の川  
心もとなき歸りぶね

第一齣 佛殿奇逢

弦を離れし箭の身にて。

〔同〕七七

淵のみなもと雲遙なり

銀河空より落ちかゝりけむ

東海さして流るゝ水の

洛陽のほとり道さりあへず

いろくゝに咲く花うるほはし

幾千町田の梁園ひたす

われいつしかも桴を浮けて

月日の國に溯り見む。

張生早くも城中に着きければ、狀元店と呼ぶ旅籠屋に宿をさだめ、日

もまだ高ければ、世にきこえたる普教寺に遊ばんものと、琴童を宿に留めて、ひとり立ち出でぬ。普教寺にては長老法本和尚在方の供養に赴きて寺にあらす、弟子法聰といふもの留守したりけるが、たまたま張生來りければ、長老の歸るを待ちたまへとて厚くもてなし、且つ寺院の内を案内し看まはりぬ。

〔張生唱〕四四

かみての佛殿

隨喜しをはりて

はやくも來かゝる

しもての僧院

厨をとほりて

西廂歌劇

西へとあゆめば

北には法堂

むかひは鐘樓

あそぶや洞房

のぼるや寶塔

廻廊あまねく

めぐりてわたりて

羅漢もかぞへつ

菩薩もまうでつ

ひじりもほとけも

をろがみまつりて

張生はしなく鶯々が花の枝を手にして紅娘と並び歩めるをみとめ  
たり。  
や、や、

こはそも五百年

待ち得しうどん華

にくしやねたしや。

同「七五」

うるはしき人千萬に

あまりて見しも此のごとく

ゆかしき姿なかりけり

眼はくらみ口こはく

第一齣 佛殿奇逢

西廂歌劇

心もそらになりにつゝ

清きこゝろは世も知らで  
人のすさびにまかすらん  
やさしき肩のなよびかに  
花いろふ手に笑あふる。

「同」同調

これぞまさしく兜率宮  
思ひななしそ離恨天

あはれ

こゝに神女にあはんとは

誰かはたもひ設くべき  
やさしきおもて唄いかりにも  
笑にもみな似あはしく  
翠花のかざりはたよけん。

「同」五五

ほそ眉の御殿ぶり  
横たはる三日月は  
鬢の雲をかしつゝ

鶯々いふ紅娘見よや人訪はぬ御寺の塔は苔つめたく花ちりしける  
を。張生いふをとめ我を殺さんとす。

羞らひて黙もだしゝが

第一齣 佛殿奇逢



西廂歌劇

やうやくにさ、やけく  
あかき口ほころびて  
たまなす齒ほの見えぬ。

「同」七五

いみじき聲はうぐひすの  
なくにも似たり花の外に  
はこぶあゆみのたびくくに  
危きさまもいちらしや  
舞知りげなる足腰の  
嬌姿千態なよくと  
晩風にたつ柳かも。

張生が見入りし時、鶯々もまた張生を認めたりしが、直に紅娘とともにあなたに去りぬ。張生法聰に、いかなる観音の現じたるにかと問へば、法聰は、あらず、こは故崔相國の姫君なりと答ふ。張生しきりに其容色を賞讃し、をとめが一雙の小脚にも尙千萬金の價ありといふ。法聰の曰く、彼方此方の距離隔り且つ長き裳裙を着けたるに、いかで足の小きを知らん。

「張生唱」七五

もししからずばいかでかは  
落花ちりしく芳徑の  
軟き土のかのごとく  
浅き痕をやとむべき

西廂歌劇

なさけこもれるまなじりは  
言あげせじよこのあとに  
深き情意はつたへるを

したにやおもふ木戸の前  
さりがてにしてひとあしを  
とほのくきはのかへりみに  
目と目まともにあひぬれば  
張解元はうつ、なし

神女はかへる天の宮

むなしく残る楊柳の  
烟の中にすゞめ鳴く、

「同」  
「同調」

戸さしおほひぬ梨の花  
白壁たかし天のごと  
天はつれなしやるせなき  
おもひに我をつなぎつ、

ひめよ

みだれそめにし君ゆるるに。

法聰いふ事起したまふな、崔家の姫は遠く去りしを。張生いふまだ  
遠からず。

「張生唱」七五

蘭麝のかをりなを残り  
珮環のこゑとほざかる

青柳のいと風になびき  
桃の花びらかざろひて  
珠簾たまだにのうち人ゆかし

河中開府のとのの家

君しかいへどこれこそは  
南海水月くわんせ音。

十年識らず君王の面始めて信ず婢妍解語の人―張生は遂に上京の  
志を罷め此寺内に一室を借りて經史を溫習せんとの望を起しけり。

「張生唱」七七

壁も穿てとかなたを見つめ  
涎よだりを嚙のみてむなく立つよ  
戀知りそめて骨身にしみぬ  
たちさりがたのその流ながしめ眄  
わればかりかは

鏡石の人また思ひつかむ

みどりの柳くれなるの花

西廂歌劇

軒端にちかく色をあらそひ  
中空の日は塔のかけさへ  
まるくうつして庭の面おもてに  
春の光はさながらなれど  
只如何にせん玉人見えず  
寺と見えしはさてさにあらで  
疑ふらくはこれ武陵源。

第二齣 僧房假寓

20

夫人は紅娘を法本の許に遣し、豫てたのみおきたる亡夫追善の日取  
を尋ねさせぬ。

(法本法聰登場す)

法聰は法本に向ひ、昨日西洛より來れる一人の秀才師に見えんこと  
を求めたれど、師は村里に赴きて今は在まらずと告げしに、又訪ふべ  
しといひ、残して歸り去りきと語る。法本さらば又來らば會ふべし  
といふ。

(張生登場す)

張生は昨日驚々を見てしより終夜睡りもあへず、今日は寺の一室を  
借り住まんものと再び寺に訪ね來りぬ。

「張生唱」七五

わがため手段てだてつくさずは

第二齣 僧房假寓

21

西廂歌劇

なんぢ法聰のろふべし

我すみかにと僧房の

心にくき人住ふてふ

門にむかへる所をば

一間をさきて貸しねかし。

よし香偷み玉竊む

幸は得ずとも折ふしは

空ゆく雲に憧憬る、

眼の人にふれずやは。

同「七七」

白きを顔に眉すみ妻に

恥ぢてぞき、し偽とまで

うましき處女われみてしより

心の底は痒くしびれて

はらわたくるひ眼は昏み

落つく暇もなき胸の中。

張生法聰に出會ひけるに、法聰は吾師久しく先生を待てりと告げ、張生を導きて法本に紹介ける。

「張生唱」七五

かしらの雪や鬢の霜

修養うちに積みたれば

第二齣 僧房假寓

西廂歌劇

老いはしたれど童顔の  
姿いみじくこゑきよし  
頭上圓光なきばかり  
たふとき佛にさも似たり。

昨日は寺に在らずして、いたく先生に禮を缺きぬ、まづ方丈に入り給へとて法本張生を導けば、われ久しく師の名を仰ぎ、今日始めて見ゆるを得しは眞に三生の幸なりと答ふ。かくて張生は我家の事より旅中のことゞも法本の間にまかせて答へけり。

「張生唱」七五

太師つぶさに言とへば  
みづから語る胸のうち

吾ふるさとは西洛よ  
官遊ところさだめなく  
しばし留まる咸陽に  
禮部尙書の名もしるく  
人のた、へしわが父は  
五十路を一期悲しくも  
病のところに身まかりぬ。

法本いふ、父君逝き給ひても遺産少からざるべし。

直なる道をひとすぢに  
かたより知らぬ清廉の  
かたみはあはれ一空囊

第二齣 僧房假寓

法本いふ、父君官に在ませし時は世渡りの術も心得たまひしならんに。

「張生唱」五五

世のちりに何しまん  
ひたすらにすみし月

法本いふ、先生はさだめて京に上り試に應ずる人ならん。

つかさびとのぞみなし  
のりの道きかせてよ

張生いふ、旅路のこと、て思ふにまかせず、師に饋るべき物なきを許されよ。

貧生の禮物は

半枚の紙ときく

いかでわれ金銀の  
良否よしなしを知るべけむ

とやかくの品さだめ

そは人の好むまゝ。

いさ、かなれど笑納あれとて張生銀一兩を差出す。法本いふ、先生何とてかく心費ひしたまふぞ。

「張生唱」七五

師にまみえつる寸志なり

心おきなく納めてよ

法本決して受けずといふ。張生いふ、僅なれども御茶の料となり。

たきぎの代にえあたらす

御齋みとぎの料にえ足らはず

茶わかめにあてんためなるを

張生法聰をかへり見つ、窃に云ふ、一兩の銀何ぞ厚き禮物ならむ。

魚ご、ろきみもしあらば

くはしをとめに我をとけ

みなさけ永く忘れじを。

法本は張生に其訪ね來れる由を問ひけるに、張生は、旅店の内繁冗にして書讀むに便あしければ、御寺のうち一間を借りて法の教も聞き、たし、宿料はお望に任せんといふ。法本いふ、此寺空房少からず、心のまゝに擇びたまへ。

「張生唱」七五

御寺のくりや枯木堂

我は要せずよろしきは

南の軒を遠ざかり

東の牆かきをへだ、りて

西廂に靠かかり渡どの、邊

袖屋を過ぎしところ皆

法本いふ、拙僧と榻を同うして起臥せんは如何に。張生笑つていふ、汝を要して何かせん。

方丈とばしのたまふな。

紅娘登場し法本にまみえて一禮し、亡公の追善の日どりを問ふ。張



生これを見て佳きをとめよと獨語す。

「張生唱」七七

貴人がたはしとやかにして  
くるはしき様露ばかり無し  
太師のもとに禮あつくして  
のぶることの葉いとただしかり。

「同」七五

うれしき處女化粧あはく  
藤ごろもきて佇める  
敏きまなざし尋常ならず  
此張郎をたえまなく

見てはそらしつ又も見る。

「同」七五

もしかのいとし姫君と  
鴛鴦のとばりの幸得なば  
汝にいかでか侍女の  
いやしき業をなさしめむ  
姫母ざみに乞ひねがひ  
許さゞりせば我手より  
解きて得させん身の固め。

法本は二月十五日を期し老相公の供養を營まんと答へけるに、紅娘は佛殿の様子をも見ておかんとて二人つれだち坐を立たんとする

時、張生も亦法本にたのみて、それが後に随ひ行く。張生法本にいふ、師よわが言を聴きたまへ。

「張生唱」〔七七〕

崔家の侍女の艶なるすがた

君老僧に見せんためかも

さらずばいかで頭かうべのひかり

目も放たずに打うまもるらん

打う扮たをさへなまめけるらん

法本いふ、先生何のたまふ、きこえなばあしかりなんに。

〔紅娘佛殿に入る〕

「張生唱」〔五五〕

わたどのをすぎていま

洞房にみちびくよ

降り來ぬる幸にこそ

張生いふ、其入口を守らん、師よ内に入り給へ。法本怒りていふ、此は聖人の書を読める人の言とも覺えず、拙僧かく老いてまた何の妄念かあらん。

強こつくりないかりそ

妄念なくばそれまでながら、

大智識三藏も

煩惱を起さんに

わが疑ふはこれ、

かゝる家いかでかは  
つかひ男あらざらん

女よせ言とはす

そのこゝろいぶかしな

法本いふかの夫人家を治むること厳しく、内外ともに男子の出入はかなはぬなり。張生傍に向きてつぶやく、この坊主うまくぬかすぞ。

我まへをことさらに

頭つきいで口こはし。

法本紅娘に向ひて月の十五日供養の法會を營むべしと告ぐ。張生問ひて崔家の姫が三年の喪の忌明の祭なるを知り、一小女尙此のごとき孝心あり、我も亡き父母の冥福を祈らんとため錢五千文を喜捨すべければ、法會の當日よろしく我家の佛をも併せて供養し給はるべ

しといへば、法本は法聰に命じてこれを分擔せしめぬ。張生は窃に法聰に向ひ明日かの姫來べきかと問ふ。法聰答へて亡き父の供養にいかでか來らざらんといへば張生は五千文空しからずと歡ぶ。

「張生唱」七五

いづくなりとも鶯々を

見るはまさされり法の場

柔き肌あた、かき

呼吸の香はいつまでも

寄りそはんこと難しとも

君が光に觸れ得なば

身の災障みな消えはてん

茶のまんとて法本の導くま、方丈に到りしが、張生はわざと小用にとて先に出で、紅娘が法本の前を辭して出で來るを呼びとゞめ、御身は崔家の姫が侍女ならずやと問ひぬ。紅娘、さなり、何事のおはすにかといふ。張生いふ、某姓名は張珙字は君瑞本貫は西洛にして今年二十三歳、正月十七日子の時の生なるが未だ妻を娶らず。紅娘いふ、そは我知ることならず。張生いふ、ぶしつけながら姫は常に出で來ますや。紅娘腹立ちていふ、先生は書讀む人に似もやらず禮なき人かな、妾が家の夫人は家を治むること殊に嚴しく、小童といへども呼ばざる者は猥に座敷に入り難し、さきつ頃姫君が夫人の許なくして室を出でまし、時だに、いたく責めたまへる程なり、先生の此言妾なればこそよけれ、若し夫人に聞えなばたゞ事にては濟むまじ、以後かゝること問ひたまふなといひ了りて下場す。張生此戀むづかしと

て悲しむ。

「張生唱」五七

こときけばいよ、いぶせし

一日のうれひのくもり

眉のうへに皆あつまりぬ

氷霜のみさを正しく

あだ人はかたく拒むと

あはれその嚴しき母に

恐怖つ、つかふる人の

姫よ、

いかにして家に入る時

西廂歌劇

ふりかへり我をば見たる

いやましに振捨てかねて

ひし／＼と思ひしみつ、

いとゞしく心ひかる、

此世にてうれしき人の

あはざらば斷頭香を

先の世に焚きし報應よ

人のもし我手に入らば

たなぞこに強く握らん

むねのうち深く懐かん  
飽かず我眺め暮さん。

同「七五」

うれしき巫山當初も

天雲はるか隔てしを

人言きけば更にまた

そのまた彼方あなたにありといふ

業ごよふかき身は廻廊に

立てりといへど魂の

早くも人のもとにゆきて

第二齣 僧房假寓

もゆる思を人しれず  
傳へんかまへあるらめど  
春の光のひまもりて  
母ぎみ知らばわろからん  
雙なまびもつる、蝶々や  
友よびかはすうぐひすの  
樂しき様にこゝろおきて  
ねよげに見ゆる若草の  
時めきそめば如何にとて

母たる人はうれふらん。

同「五七」

姫はまだ年少うして  
心ばへすくよかなれば  
我たとひ近よりぬとも  
一度はもごきやすらん  
邂逅わかれあはにちぎりこめてば  
しかすがに樂たのしみ知らぬ  
ものながら見ても見まくの  
欲しくして妹脊うれしみ  
其母のいさめものかは。

「同」五七

夫人おとよ思おもひなすぎそ  
われいかであだに思おもはん  
相應あはしき妹あなと脊せなるを

うばざくら眉まゆ淡あくして  
張ちやう敞ちやうをおもふはおそし  
春はるの色いろ落ち散ちりがたに  
阮えん郎らうにあはんもあだよ  
かゝりとて我われいたづらに  
ひゝらかす口くちはもたぬを

そなたには婦おんなたる道  
こなたには男おとこたる徳  
備ありて似にあはしとのみ。

「同」五七

眉まゆうすくひきなしにける  
顔かほ容ようのほのかの妝あぶらり  
玉たまのえり白しろ粉こなかをる  
繡ういのすそ金きん蓮れんしるき  
紅ももの袖そで玉たま笛ふえながき  
かの姿すがた忘わすられめやも

風韻を君捨て去らば

思はじな否そら言よ

おのづから我は拾はん

千萬のおもひの種を。

張生法本の許に到り借房の事如何にと問へば、法本いふ、塔院の傍なる西廂に瀟洒たる一間あり、先生そこに住み給へ、今片附けたれば何時にても来たまへ。張生、さらば旅店に歸りて行李を運び來らんとて法本の齋をす、むるにも、行李を持ち來りて後にせんといふ。

(法本下場す)

張生いふ、旅店の中騒しとはいへ、尙心中の憂を散するに宜し、寺内に移りなば此凄凉に耐へざらん。

張生唱「七七」

家奥ふかみ枕涼たく

一燈孤影幌にゆらぐ

此世の望よし遂げんとも

長き今宵はいかにか経なん

睡りもあへすこい轉びつ、

長吁短歎よろづ度して

枕を翻すまた幾千たび。

同「七五」

にほひこぼれて艶に

羞らふ花の語を解し

肌あた、かくやはらかき



西廂歌劇

玉おのづからかき香あり  
けふ見し人の匂やかさ  
心にとまりつくさねば  
まほろし幻にもとおもかけを  
寝つかれぬま、顔おさへ  
碎けて千々におもふかな。

第三齣 墻角吟詩

(鶯々紅娘登場す)

紅娘は鶯々に向ひて亡公の供養は二月十五日と定められたるを告  
げ、また張生が云ひけるたはけたる事どもを具にも語りけるに、鶯  
々は其の言かならず母上に告ぐる勿れと堅く口止めしつ、日も暮れ  
方になりければ、香を焚かんとて二人うちつれて花園の方へ赴きぬ。

(鶯々紅娘下場し張生登場す)

張生は寺に遷り来て、始めてかの處女が夜ごとに花園にいたり香焚  
く由を聞き知り、一夕その出で来る頃をはからひて花園の墻のこな  
たより處女の姿をほしいま、に見んものと、庭石のほとりに身をひ  
そめて待ちぬ。いまや兩廊の僧衆みな眠り、夜深うして人靜かに、月  
朗かにして風清し。一閑つれづれにしては丈室の高僧を尋ねて語り、悶おもひびては  
西廂の皓月に對して吟す。

第三齣 墻角吟詩

張生唱「七五」

玉宇塵無くすみわたり  
銀河のながれ影さえぬ  
月はみ空によこたはり  
庭にあふるゝ花のかげ  
羅袂そゞろに寒うして  
時來ぬとしもさとるらん  
音もやすると耳かたげ  
一步ごとにしのびより  
息をこらしてひそみ待つ。

同「四五」

けだかくとゝのへる  
かよわくなよやかの  
わがよき鶯々よ

初更は過ぎつらん  
萬籟音たえぬ  
若したゝ庭指して  
廻廊つたひ行き  
はたりと恨めしの  
をとめに出で遇はば

西廂歌劇

ひし／＼かき抱き  
逢ふこと稀にして  
影ありかたち無き  
日ごろのつれなさを  
陳べんかまのあたり。

(鶯々登場す)

鶯々は紅娘に角門を開き香案を運び出だせよと吩咐けぬ。

「張生唱」七七

きいとひと聲とぼそはひらけ  
風ゆくところ花香こまやか  
足つま立ててつく／＼見れば

はじめに勝る處女が風情。

鶯々は紅娘をして庭石の邊に香案を搬ばしめぬ。

張生感にうたれて一人云ふ想ふに春の女神が拘束を厭ひてかりに  
廣寒宮を脱け出でしものか横さまに向きて容は一臉を分ち體は半  
衿を露はし香袖ゆるやかにして言無く湘裙しづかに垂れて動かざ  
るは恰も湘陵の妃子が斜に舜廟の朱扉に倚れるが如く、また月殿の  
嫦娥が微かに蟾宮の素影を現するに似たり、あゝ佳きをんな哉。

「張生唱」五七

こゝに見るなよびかをとめ  
月の宮かぐや姫とて  
かくばかりいみじかるまじ  
そろ／＼とちひさき足は

第三齣 墻角吟詩

西廂歌劇

芳徑を歩むになやみ

その面に百媚生じて

うばひ去る人の魂。

牆のあなたに張生が潜めりとも知らぬ鶯々は、佛を禱り香を焚けり。初めの一炷に火を點じて先人の冥福を願ひ、次の一炷には慈母の長壽を祈りしが、さて第三の香は何といのりて焚くべきか。このとき紅娘かたはらより姫君に代りて祈りまゐらせんとて、願はくはわが姫君はやく佳き婚君に嫁ぎたまひて、妾をもそなたにゐてゆき給へと云へば鶯々もまた香を添へて、心中無限のうれへ盡く此の兩拜のうちに含まるゝよとてうち拜み太息す。張生早くも鶯々が心を看たりけり。

「張生唱」七五

52

香靄庭に散るところ

夜はいや深くなりまさり

み簾吹く東風も静かなり

香焚きをはり曲檻に

斜に倚りてたわやめは

ためいきふかく物思ふ

月はまどかに空たかく

鏡とばかり懸りつゝ

薄ぐもさざりあらくなくに

第三齣 牆角吟詩

53

香の烟と人の氣の

凝りてや色もおぼろなる。

張生思ふやう、われよし古の司馬相如に及ばざればとて、彼の處女いかでか卓文君の意あらざらん、いでや一首を賦し彼の應を待たんと、高らかに吟じて云ふ。

月色溶々夜 花陰寂々春

如何臨皓魄 不見月中人

鶯々これをき、ていぶかしみ、紅娘に墻ごしに詩吟む人は誰ぞと問ふ。紅娘すなはち二十三歳にて未だ妻無しといへるたはけ男の吟するなりと答へけるに、かくと聽ける鶯々、直に返して云ふ。

蘭閨久寂寞 無事度芳春

料得行吟者 應憐久歎人

張生は好き應酬を得て喜べり。

「張生唱」七六

身にしめて見しうましをとめ

姿のみかはいとしをとめ

心にかくす聰明機智

よどまず返すかへし詩の

ひとふしごとに吟み出でし

深き情緒はあはれあはれ

「同」七七

ことばみやびて聲と、のへり

鶯々の名にまこと負かず

西廂歌劇

君もしあかすば墻かきをへだて、  
曉かけてぞ詩よみあはせん  
いしくも會ひけりこゝろ知る人。

張生は處女の前に跳り出で度く思へり。

「張生唱」七四

羅衫寄らんと拽ひきなば

鶯々張生を見る。

處女は笑みて迎へん

たゞかの侍女のつれなく

夫人の命にことよせ

さまたげんとす恨めし。

紅娘は鶯々にすゝめ誰か居るらしきにとく歸らずば夫人の叱りを

蒙らんとて、共に下場す。

「張生唱」五七五

ゆくりなく

人驚かす音やなに

はたくと

鳥はねぐらを飛び立ちぬ

さらくと

梢こすゑの花の影ゆれぬ

ほろくと

落花小みちに散りしけり。

張生獨ごちて云ふ。あゝ、處女は去りにけり、われをいかにせよと

第三齣 墻角吟詩

にや。

「張生唱」七六

みどりの苔に露つめたく  
あかき月かげ花は篩ふ  
日ねもす病めるこゝろの闇  
今宵はるけて光見たり。

「同」五七

帳垂れて戸ははやかたし  
今しわれひそかに問はゞ  
人もまた應へけらしも  
風きよく月はほがらに

夜はたけて恰も二更  
つれなきは世の運命さだめかも  
君無縁われは薄命。

「同」七五

たどるわが家の歸りみち  
むなしき庭に佇めば  
竹の梢を風わたり  
斗柄に雲の横たはる

今宵はかくてさびしきも  
心に獲たるたのしみの

西廂歌劇

忘れられぬやも人のもし  
つれなかりせば如何せまし

君とわれとは口にこそ  
語らざりしか思ひある  
深き情ははしなくも  
眉の間に讀まれしを。

張生家に入りて曰く、いかなる睡魔も今夜は我を誘ふこと能はじ。

「張生唱」五七

短檠の燈火あをざめ  
舊びたる幃屏さびしく

光くらく夢また成らず  
ひいくと外に吹く風の  
樞より入りくる寒さ  
はたくと破紙ひやく  
静寂の孤枕のふしど  
鐵石の人の心も  
しかすがに動かざらめや。

「同」七五

こゝろみだれておちつかず  
後來ん一日花わらひ  
柳みどりの春の夜に

第三齣 牆角吟詩



西廂歌劇

霧のとばりに雲の屏  
更闌け人も静まりて  
かはらぬ心千代かけて  
よろづ代かけてちかふとき  
前途めでたくかゝやきて  
われ等が晝堂おのづから  
のどけき春を生すらむ。

同「七五」

わが幸今宵さだまりぬ  
君が詩こそ證なれ  
いまさら君をひたすらに

夢路の上になづねんや  
實らんこともありぬべき  
碧桃花樹の下かげに  
君を見んまで待たんのみ。

(張生下場す)

第四齣 齋壇開會

(法本法聰張生登場す)

今日はかねて供養の日と定めたる二月の十五日なれば法本は衆僧

第四齣 齋壇開會

に命じて佛具をと、のへ夫人と姫の焼香に先だち張生に焼香せしめんとす。

「張生唱」〔八七〕

梵王宮殿月輪たかく

琉璃なす碧瓦に瑞烟こめて

雲なす香煙のきばに迷ふ

潮の沸くごとと經誦す聲や

幡影ひらくゆらめくところ

檀家のもろ人みなあつまれり。

「同」〔五七〕

如月の春かみなりか

殿角にとゞろくと

鳴りわたる法鼓金橈

中ぞらにあらしや起る

松が枝は颯々として

音すなり鐘聲佛號

老僧の訪ふも許さぬ

君が宅紗窗のあなた

紅娘は時來ませりと

そが主におとなふならん

程もなく君は來まさん

戀なやむわが此のまなこ

いでや見んこゝろゆくまで。

法本張生に向ひ先生まづ焼香したまへ、若し夫人來りて何人ぞと問は、老僧が親眷と答ふべきにと云ふ。張生すなはち焼香す。

「張生唱」五七

齡なが、れ生ける人

天に幸あれ逝きし人

父祖の御靈の安かれと

ぬかづき拜む三寶の

み前に香を焚きくべて

さてひそやかに祈るらく

侍女戀をさまたげす

夫人あなぐりいらだ、ず

犬兒氣まゝにふるまはず

あゝみ佛よ

みそかごとはや就れよかし。

夫人鶯々紅娘うちつれて焼香せんとて出で來るとき、張生は鶯々を見つけ、法聰にむかひ御身が心づくしにて神仙の來降に會ひぬとて喜べば、法聰は此人はすでに二度も見給ひぬといふ。

「張生唱」七七

天降りたる玉の仙女か

ゆかしき人の靈まつりする

病と愁まつはるわが身

うしろめたしや國をも城をも  
傾けんする色香めでんは。

「同」五十一

櫻桃の

くれなるにほふ其の口

白粉の

つや、かに瓊瑤なす鼻

梨の花

その淡しろの面ざし

たをやかに

なまめかしき柳腰

あでやかさ

湛ふる顔のかゝやき

一團ひとつにて

艶はますく艶なり。

法本夫人に云ひけるは、貧僧が親戚に一人の學問すぐれたる秀才あり、そが父母すでに亡りて未だ追薦のことを行はざりしに因り、こゝに其の父母のため一分の齋とぎを供へて追薦せんことを求めたれば、貧僧しばらく之を肯ひぬ、願はくは夫人ゆるさせ給へ、夫人云ふ、長老のみうち人ならばさまたけなし、妾相見えんとて張生と會ひ、衆人もまた挨拶す。鶯々羞らふ。

「張生唱」四四

老ばれ和尚も

西廂歌劇

法座の上より  
眼をはなたず  
首座なる役僧  
つくづく見惚れて  
心はうつせみ  
法聰が頭を  
金磬ポカ〜。

「同」五七

押しまじる老幼貴賤  
正月の元宵げんせうの夜の  
にぎはひに勝るにぎはひ

うまし人あたりはゞかり  
此方見るなみだの眼もて。

「同」七七

戀のやみちに心みだれて  
たへがたきまで我まどはすよ

よ、と音に哭く君たとふれば  
喬木たかきの森のうぐひすにして  
涙の珠は恰も似たり  
花の梢に露したゝるに  
動ける心穗に出ださじと

第四齣 齋壇開會

西廂歌劇

強ひてよそほふ僧家の慈顔  
太師のさまの學びがたしや  
磬撃つ頭陀は懊惱生じ  
香焚く行者おもひ焦る、  
燭のかげは風にゆらめき  
香の煙は雲とたゞよふ  
君に心をみな寄するとき  
たちまち香絶え燭火消えぬ。

燈火風に消えければ張生みづから燈を點じ香を焚く鶯々紅娘に云  
ふ、かの青年の忙がしさよ。

「鶯々唱」七五

72

みやび男や打見には  
わかき齡にありながら  
性情は聰明く今の世の  
才と學とに秀でたる  
かの青年はさまざまに  
とりまかなひてわが前を  
心ありげに往きつ來つ  
さかしらだちて見するかな。

紅娘云ふ、思ふにかの男は、

「紅娘唱」七四

うすくらがりの此のとき

第四齣 齋壇開會

73

西廂歌劇

あかるきひるの彼るとき  
どよめきて過ぐ窓の外  
日くれて書幃に入るとき  
ねむりもやらで歎息  
いかで夜さは過さん。

張生云ふかの處女よく我を願るかな。

「張生唱」五六

眉じりにあふれいでし  
わが情なれこそ知れ  
むねのうちとざしひそむ  
汝がうれひわれぞさとする

うとましやあな懊惱まし  
たうくと雲板鳴り  
行者沙彌こゑさゝめく  
ねがはくは此のよき時  
いましばしさまたげざれ。

衆僧佛をいのり法器をとり、鈴うちふりつ、疏を宣し紙を焼き了れば法本云ふ夜は明けたり、夫人も姫も館に歸り給へ。

(夫人鶯々紅娘下場す。)

張生云ふ、いましばらく法會をつゞけても宜かるべきにあ、われ如何にせん。

「張生唱」七七

無心のものは有心にまさる  
有情のわれは無情になやむ

一夜のさわぎ後はしづかに  
月はしづみぬ鐘はひゞきぬ  
くだかけ高く唱ふをきけば  
玉人かへる何ぞすみやか  
法會をとづる何ぞいそげる

道場畢りもろ人散じ

わが家をさして暗きをたどる  
夜はほのくくとあけ方にして。

第五齣 白馬解圍

こゝに孫彪字は飛虎と呼べる者あり、唐の徳宗帝位に即き天下擾亂  
せしとき、主將丁文雅の失政に因り、五千の兵馬を統べ率る河橋に鎮  
守しけるが、近ごろ故相國崔珪の女鶯々として稀世の佳人ありて河中  
府なる普救寺にかり住ひせる由をき、ひそかにおもへらく、今兵馬  
の世に在りて主將の行なほ正しからざるに、いかでわれのみ廉潔に



安んずべきいでや我が力もて崔鶯々をうばひて妻とし、豫ねての望を遂げばやと、大小三軍に號令し、人は枚を銜み馬は口を勒し、夜を日につぎて河中府にぞ攻めいたりける。

法本は俄かに孫飛虎が鶯々を擄らんとて兵を催し銅鑼大鼓の音すさまじく寺をかこみたるを見て、大に驚き、走りて夫人に斯くと告げたるに、夫人もいたく仰天し、ともに手段を議らんとて、鶯々が室に赴けり。

(鶯々紅娘登場す)

暮春の景物、さらぬだに人をなやますものなるに、鶯々張生を見てしより、情思止みがたくして、魂も身にそはず、朝な夕なの飲食さへ減りゆきて、早くも人に別るゝの傷みを覚えけり。一好句情あり、夜月を憐み、落花語なくして東風を怨む。

「鶯々唱」〔五六〕

思ひわびこゝろ傷み  
ほそりゆく我が身かなし  
まして今ゆく春の日  
羅衣肩をすべらんとす  
いく夜をか斯くて活きん

風ゆるくめぐる煙  
み簾たれてひとりさびし  
春雨の梨花をうつに  
かど閉してふかくこもり

西廂歌劇

言葉なく倚る欄杆おほしき  
ながめやるそら行く雲。

「同」七六五五

落紅たまりて風に起り

人まさしに愁あり

池塘のゆめのあかつき方

欄杆おほしきゆ春去りぬ

蝶粉かろくぬれ濕ほひ

絮雪の飛ぶごとし

つばめのふくむ泥香どろに滲み

花なごりいとふかし

春をつなげる情みじかく

青やぎの糸ながし

花陰へだつる人は遠く

ひさかたの空近し

はでに飾れる閨のとばり

金粉の香も失せて

くれゆく春に精神こころまでも

はかなしや衰へぬ。

紅娘云ふ姫君御心やいため給ひし、妾いまみ衾のうちに香焚きこめ  
たれば寐ねたまへ。

「鶯々唱」七五

翠被繡裯寒かれど

蘭麝な焚きそいたづらに

たとひ香焚き盡くすとも

ひとりつめたきわが思ひ

すぎにし宵は佳き歌に

晴れて心をひかれしか

今日は凜々しき御すがたの

近よりかぬるうれたさよ

睡るも夢はなりがたく

起きて心はやすからず  
高き見晴し何かせむ  
そゞろありきももの憂しや  
うつら／＼に日は過ぎぬ。

「同」五七

紅娘よ

われむしろ枕にふして

まどろまんわが聞の中

かげのごと出でんとすれば

寄りそひてはなれぬものを。

紅娘云ふ、こは妾が爲すにはあらず、みな夫人が姫君の御身を看守れ

よとて吩咐け給へる爲なり。鶯々云ふ、あぢきな<sup>あぢき</sup>の我が母上よ。

「鶯々唱」五七

この日ごろたゞひたぶるに

あだ人をふせぎへだて、

小婢<sup>せいな</sup>はかしづきつとめ

たらちねは看守りきびし

かくしては女<sup>むすめ</sup>がいのち

あやふしとおぼし知らずや。

紅娘は未曾<sup>むそ</sup>て姫がつれなき言いひしをば聴かざりしが、彼の青年を見てしより、其の心かはり初めたるをいぶかしみぬ。

「鶯々唱」四四

むかしは一人の

男に會ふだに

厭ひき羞ぢにき

かの人見しより

この方さすがに

親しみおぼえぬ

思へば返しの

詩<sup>うた</sup>ぶりいしくも

よみたり清らに。

「同」五五

誦<sup>うた</sup>しいで、あやまらず

西廂歌劇

ふしぐの匂やかに  
月のうた佳かりしを  
いにしへの回文に  
織りなせる歌よりも  
いとゞなほ身に切めて  
ねがはくは我がために  
針となり糸ひきて  
よしみをば東鄰に  
通すべき人もがな。

「同」七七

偉大なるかな文學の人  
顔は清秀すがたはみやび  
あた、かき性やさしき心  
人は見惚れて思はずしらす  
口につぶやき心に印す  
君がまなべる文章のみち  
み空の星とかゝやき出んを  
十年苦學の書窗の下に  
何かうれへん世にきこえずと。

夫人法本等鶯々が室にいたり、只今孫飛虎汝を擲り妻にせんとて五  
千の賊兵をひきつれ寺を圍めり、いかにせば宜しからんと云ふ。

「鶯々唱」八五

言き、魂ぬけいでぬ  
まがつみまともに身を攻むと  
涙は袂に押ふれど  
さてしもわが身をこれいかに  
進退のがる、すべをなみ  
いづくの人にか頼るべけむ  
やもめとみなしごたよりなく  
心すべくこそ失せし人  
とゞろく金鼓に天あまどよみ  
再々なびける雲のはた

紛々うづまく塵のあめ。

「同」七五

言けがらはしたはけ男の

『眉黛青鬢春生じ

楊妃さながら傾國の

人をし敢てわたさずば

五千の兵馬こゑあげて

三百の僧ことくく

利刃にむかふ草のごと

また、くひまに薙ぎすてん

莖ばかりかは根こめてと』

西廂歌劇

おのれ心を満たすべく  
國にも家にも忠信の  
心なくして良民を  
只おのがじ、おびやかす  
たはけ奴はいにしへの  
臥龍が故智の博望坡  
天つ宮居にたぐふべき  
御寺むなしく一片の  
煙となすもいとほじよ。

夫人は、われは老の身、たとひ今死ねばとて残惜しとは思はねど、未だ嫁入りもせぬ女むすめこそ哀れなれとうちなけ、ば鶯々は云ふ、一家の命

を全うせんため、むしろわが身を賊に遣はしたまへ。夫人なけきて、わが家むかしより罪を犯せる男なく、再び嫁ぎし女なし、いま汝を賊に遣はさば家系のけがれ此の上なし。法本云ふ、われ等法堂にいたり、兩郎の僧俗をあつめて問はゞ、良き策もやあらん。

(一同法堂に到る)

夫人云ふ、あ、女よいかにせん。鶯々云ふ、寧ろ我が身を賊に遣はしたまへ、さすれば五つの便宜あらんなり。

「鶯々唱」五七

たらちねの命を救ひ  
殿堂も煙とならず  
出家たち其身をたもち  
亡き人は柩やすらに

西廂歌劇

歡郎はをさなき童

歡郎云ふわがこと心にかくる勿れ。

さな云ひそ崔家の世つぎ

わらは若しわが身惜しみて

亂軍に身をまかせずば

衆僧は刃の血のり

大伽藍焔にやかれ

み柩はくだけで微塵

断えぬべしおとうとの愛

すたれなんたらちねの恩

「同」九四

一粒の種子だにとゞめで

わがいへのすべては亡びん

さらばわれ身をもて與へん

これも家門の辱あゝさて

むしろくびれ死にて屍を

たはけ男にさゝげんしか爲<sup>せ</sup>ば

此の身のそこなひも無からむ。

「同」五七

わが身をばまたくせんとて

母ぎみは氣づかひたまふ

鶯々の身をな惜しみそ



西廂歌劇

妾に一つの計うかびぬ。

誰にまれ賊をしりぞけ

妖氛を掃ひ蕩げ

いさほしを建てたる人に

わが身をば許したまはれ

納采の手数はぶきて

さらばわれその英雄と

秦晉のちぎりむすばむ。

この計いと妙なりたとひ家門のふさはざる人なりとて、賊人の手に陥らんより勝れりとて、夫人は法本にたのみ、此の禍をはらはん人あらば、此方より房奩をもたせて鴛々を嫁入らすべしと諸人につたへたるに、張生手を拍ちて進み來り、我に賊を走らすの策ありと呼び

夫人の前に出で、策もし成らば必ず姫を申し受けんと堅く約し、かくなる上は我が妻をおびえぬ様臥戸に入らせ給へと云ふ。夫人即ち鴛々紅娘をして歸らしむ。鴛々は窃に張生が好意をよろこべり。

「鴛々唱」八七

衆僧おびえて命を惜しみ

家眷のものだに來て慰めず

さるとき此の人識るべならぬに

われからす、みて力をいたす

言のみたくみの書生にあらで

玉石焚くるをみづから防ぐ

よしや婚事にか、はりなくも

われ等があやふきいのち憐み  
とかくは力のかぎりをつくせ  
出師の表はた嚇蠻ふみの書  
するどき筆もて五千の人を  
なぎたて拂へよ君ねがはくは、

(鶯々紅娘下場す)

張生先づ法本をたのみて孫飛虎に言はしむる様、夫人もとより姫を  
將軍に獻するの意あり、しかるに今亡父の喪に會ひ心しづめるとき  
なれば、銅鑼大鼓をうちた、かば、いたづらに姫を驚死せしむるのみ  
ならん、將軍もし婚たることを願はゞ、宜しく甲を按じ兵を束ねて、十  
丁ばかりひきしりぞき、三日の間待ち給ふ可し、このひまに姫はしづ  
かに追薦のこと畢へて、喪衣を脱ぎ吉衣に換へ、此方より房奩を持參

して將軍のもとへ興入れせん、かくてこそ互の幸福とは存するなれ。  
飛虎之を肯ひ且つ曰く、若し三日を経て、尙女むすめを出ださゞらば汝等を  
みなごろしにすべし、また夫人に我がごと善心の婚はあらじと告げ  
よ。斯く云ひて、飛虎は兵を率ゐて退きぬ。張生また法本に向ひ云  
ひけるは、いま十萬の大軍を統率して蒲關を鎮守せる白馬將軍杜確  
は我が舊き友なり、されば一封の書信を送りて彼に救をもとめんと  
す、蒲關は此處を距つること四十五里、誰か使ひすべき人を出したま  
へ。法本よろこび白馬將軍來らば、何ぞ孫飛虎を怕れんや、わが納所  
に惠明とて酒飲みの弟子あり、言を以て激せしむるときは、何事をも  
辭せざる男なれば、彼こそよからめとて、誰かす、むで杜將軍に書信  
を送りとゞくる者やある、と聲高に呼ば、れば、惠明は、われ行かんわ  
れ行かんとして走り來りぬ。

「惠明唱」五五七五

法華經も讀みはせず

梁皇懺も目はくれず

僧伽帽かなぐりて

袈裟も法衣も脱ぎすて、

た、かひにはやりたつ

英雄の膽斗のごとし

もろ手には鋼尾かぶちの

大棍棒をつかみつ、。

「同」八六

いたづらにさし出てせんわざかも

佛につかふる道しらねば

明けき方を踏みならして

ひたつきに入らむ虎窟龍潭、

何貪るべき何敢てせん

此日ごろ食ふ菜饅頭

味淡きにすぎ心みたず

五千のやつばら煮炊たきは要いらじ

咽喉えぶえ扶たりて熱血とり

しばらく渴きをうるはしてむ

胸むねかき剖さいて生肝いきぎまとり

しばらく餓をばしのがんのみ

いづくにけがれのあるべきかは。

「同」七七

汁はだぶく素麪わづか

粉米ざらく臭くさにらかて、

あされ豆腐の精進料理

これ等はすべて淡きにすぎぬ

麥粉萬斤色わろくとも

五千の奴等一つに固め

わが饅頭の餡とはなさん

如才はあらし厨の衆よ

残りの肉は鹽からにして。

法本云ふ張秀才汝をたのみて蒲關に書を寄せんとす敢て行くべきか。

「惠明唱」五五七

行くやはた行かずやと

問ふなかれ師よ

用ゐるや用ゐずや

先づ問はんわれ

飛虎が名は隈もなく

聞えわたれど

かの奴やつこ淫慾に

貪婪にして

西廂歌劇

そのまゝに置かるべき  
ものならぬに。

張生云ふ、おん身出家に似もやらで、佛を拜まず、經誦せず、何とて斯く  
鬪を好めるや。

「惠明唱」七五

經文はわれ談り得ず  
參禪もかつ好まずよ  
たゞそれ近く鍛はせし  
鋼はがねするどき戒刀と  
塵半點のくもり無き  
鐵棒一把われにあり

天宮の美を盡したる  
伽藍も灰となりぬべき  
禍わざはひふせぐ術すべしらす  
僧俗男女ひたすらに  
みな齋ときに飽き僧房に  
ひそむのみなりあなうたて  
此の善文とかの能武  
かけはしもなき困厄を  
すくはんとする一封は  
かゝりてわれの肩にあり  
腕だてといふも何慙ぢん。

張生恵明に向ひ、賊兵途をさへぎらば如何にすべきかと問へば、先生  
安んぜよと答ふ。

「恵明唱」五五、五七

小坊士三五人

幢幡と寶蓋さ、せ

手ごはき行者には

棍棒と鏝さすまたもたせ

陣しきて人々を

慰めよ君こゝに居て

忍びかに賊兵を

さぐり見むわれあなたにて。

「同」六五

遠き者は跳とびこみて

鐵の棒を振り下ろし

近き者は手順てういでに

戒刀にてうちはたし

ちひさき奴はひつ握つかみ

足さきにて蹴くとばさん

大きなるはひきよせて

頭かぶをもてあて身せん。

「同」六、五九

うちにらめば

西廂歌劇

とうとうと海波はひるがへり  
をたけびには  
ゆらゆらと山巖うちふるひ  
足踏みには  
どろどろと地軸どよみわたり  
手ぐりよれば  
ぐらぐらと天關ゆりうごく。

「同」七五

われかたくなに愚にて  
おそろしきもの世に知らず  
生れながらの雄心は

しひてきたへし勇ならず  
剛情我慢一すぢに  
鐵をも截たん心から  
草と花とを摘みまどふ  
女々しき者ぞあさましき  
いまわれ命うちすて、  
大刀とりはきて立ち出なば  
馬進まぬをうれへんや

「同」七七

苦きを食ひ甘きを甜めず  
弱きいたはり強きをくじく

西廂歌劇

むかしこの方これわが心

君な思ひそわがはたらきは  
君が婚事のためのみなりと

白馬將軍賊を討たずば

張解元が思はあだぞ

君にまごゝろもしあらずんば  
われもそら言もてたはむれむ  
消息ぶりの宜べしさ失せて  
婚事はおろか大恥かゝん。

同「五七」

わがために神威を藉りて

鼓をば打てよや打てや

わがために佛力に仗り

吶の聲あげよやあげよ

ひるがへる綉旗の下に

遙か見ん大丈夫われ

半萬のしれものどもの

あら膽をひしぎてくれん。

かくて恵明去りにければ張生はもはや我等の救はれんこと疑なし。  
夫人長老みな安堵し給へと述べ。



## (二) 同下場し、杜將軍衆卒を率ゐて登場す)

林下衣を曬して日の淡きを嫌ひ、池中足を濯ぎて魚の腥きを恨む。花根本艶公卿の子、虎體鴛班將相の孫。さても征西將軍管軍元帥杜君實は十萬の兵を統領して蒲關の鎮守をなしけるが、盟弟張君瑞が普救寺に在るを傳へ聞き、人を以て招きしかど遂に來らざるをいぶかしみ居たりき。近頃丁文雅政を失ひ國法を守らず、黎民を剽掠する由聞えければ、今日しも斥候の兵を出して賊情を探らしめける折しも、惠明は張生の書信を携へて軍門に到りぬ。君實すなはち之を引見し、つぶさに急迫の狀を詢ひ尋ねたる後、張生が書信を開いて讀み下せり。

珠頓首して、大元帥將軍契兄の森下に再拜す、伏惟ふに洛中尊顏に拜別してより、寒暑屢隔て、積んで幾歲月と相成候處、仰徳の私心銘

刻忘れ難く、昔日聯床の風雨を憶ひて、今日彼此天涯なるを嘆じ候。旅情復た肺腑に生じ、離愁羈懷を慰むる無きに、貧しく十年の藜藿に處り、走りて他郷に困するを念へば、百萬の貔貅を威統して、坐して邊境を安んぜらるゝは羨ましく候。虎體天祿を食み、天表を瞻、大德常に勝り、賤子をして臺顔を慕はしめ、臺翰を仰がしむること、存じ、寸心爲めに慰み候。さて小弟家を辭し、帳下に詣り、以て數載間潤の情を叙べんと存じ居り候處、奈何にせん河中府普救寺に至りしに、忽ち探薪の憂に値ひ、參上致しかねをりしに、期らずも賊將孫飛虎といふもの、兵半萬を率ゐ、故崔相國の女を劫略せんと欲し、實に迫切狼狽仕り候。小弟の命も亦旦夕に迫り候間、將軍倘し舊交の情を棄てずんば、一旅の師を興し、上は以て天子の恩に報じ、下は以て蒼生の急を救はれ度、左候へば、故相國九原に在りと雖、亦將軍

西廂歌劇

の徳を泯さるべしと存じ候。何卒此書御披見の上は早速御來施  
を仰がしめられ度希望に堪へず。突然か、る事申上慚愧の至に候。  
伏して臺照を乞ふ。不宣張珙再拜。二月十六日書。  
杜將軍之を讀み了りて云ふ。さらばわれ行きて救はん。和尚先づ行き  
ねかし。惠明云ふ。速かに來りたまへ。

「惠明唱」五、七五

かの奴やつこ

庶民をかすめ、徳うすし

將軍は

邊地を鎮め機略あり

かの奴

天地に容れぬ罪ふかし

將軍よ

乞ふ横行にまかせざれ。

「同」八、十

君もし坐視せば帝王みかど瞞くものぞ

妖氛はらは百姓ひやくせいひた歡び

大功完らば頌歌あまねく満ちて

金鑾殿上名はかゝやきわたらん。

(惠明下場す)

杜將軍は―若し萬丈深潭の計無くば、怎いかでか一龍項下の珠を得ん―  
と吟じつ、直に命を下し五千の兵馬を發し普救寺に至り孫飛虎を  
縛しぬ。普救寺にては張生書信を發してより、はや二日を過ぎ、消息

いかにと氣遣ふ折しも、杜將軍五千の兵馬を整へて山門前にいたり、喊聲一舉また、く暇に賊兵をうち敗り、飛虎をも擄となしたれば、諸人の歡喜譬へん様なし。飛虎等が擾亂もと丁文雅の失政にもとづけるものなれば、寛大にはかりて、首將は杖一百に處し、其餘の者は各々故郷に回らしめぬ。張生、夫人、長老等各々厚く將軍の勞を謝す。杜將軍は張生、鶯々の喜事あるをき、先づ慶賀の詞を述べ、軍事控惚の際なれば後日を約して立ちかへりぬ。一馬は普救を離れて金錠を敲き、人は蒲東を望みて凱歌を唱ふ。夫人は張生の恩を謝し、書院をうち清めて張生に移り住まんことを請ひ、また明日は小宴をひらきて張生を招かんとす。張生これを肯ひ、婚事の迫れるを歡びぬ。

第六齣 紅娘請宴

(張生登場す)

今日は夫人の宴を催す日なれば、書院なる張生、まだきより起き出でて衣冠を整へ、紅娘の來るをば、今や遅しと待ち居けり。

(紅娘登場す)

夫人の命により張生を招かんとす、我家今日あるは張生の御蔭なり。

「紅娘唱」「八六」

五千の賊兵たなびく雲

みる間にはらひて吾家の人

死の手を逃れて命得たり

仙佛のみ靈まへにかざり

西廂歌劇

山海の珍珠うちと、のへ  
張君瑞を禮拜せん  
そのかみ叶はぬ彼がおもひ  
今ゆくりなくもひとつの書信  
媒なかだちとなりて契りあはん。

〔同〕七七

東閣ひらく玳瑁うたげの筵ひしろ  
西廂てらす待宵の月  
これこそまされ影は何せん  
薄き衾あだにひとつの枕  
温あためん人ありと思へば

何さむからんいやさむからじ  
寶鼎かまど香こまやかに薫じ  
繡簾風はさやかにおとなひ  
みどりの窗は人静なり。

紅娘は書院に至りぬ。

〔同〕五五

幽僻の庭のうち  
人行かで苔蒼あをく  
おく露のいとさむし  
窗へだてしはぶきす

紅娘戸をたたく。張生誰ぞと問へば、妾なりと答ふ。

第六齣 紅娘請宴

あかきくちほころばし  
いそがしく答へする。

張生出で、紅娘に一揖す。

「紅娘唱」七四

手こまぬきつ、禮もて  
迎へ請するいそしさ  
われまた君を拜せん  
黒き紗帽はかゝやき  
白き襦袍は淨らに  
角の帶黃に目をひく

「同」七五

衣冠と、のひかたちよし  
あ、此すがた吾が姫の  
心うごくもうべしこそ  
この才貌に魅せられて  
かたかりし我なかなかに  
思はず胸のさわぐかな。

紅娘は張生に、夫人招宴の由をつたへぬ。張生これを諾ひてかの處  
女また宴の筵につらなるやと問ひぬ。

「紅娘唱」五七

來ませてふ言云はぬ先き  
行きなんと早くも答ふ

とく已までに心はかしこ

姫君のこと問はませば

ことくにかしこまらまし

いざいざといそぐ言の葉

將軍の嚴令のごと

き、なしつ五臟の神に (五臟神は食欲をいふ)

したがひて鎧のあとに

鞭をとり馳せ出んものか。

張生、今日の宴は何の爲めに開くぞと問ひぬ。

「紅娘唱」五七

一つには騒さわの見舞

二つには報恩のため

衆僧も親しき人も

禮物もみなしりぞけて

たゞ君と吾姫君と

ならばしめ開く宴うたげぞ

張生云ふ、されば吾はなはだ嬉し。

うれしさに人はえ耐へず

夫人より傳ふるまゝに。

張生云ふ、われ衣冠を正さんとすれど旅の身なれば鏡を有たず、御身

我容貌見てたもれ。

「紅娘唱」四八

後前見廻はす面影

書生氣くるへるごとし

ひたひはいたくみがきたて

いつしか蠅も滑りなん

油に人の眼はくらみ

なまめきぞつと齒を浮かす

張生云ふ、宴席の用意は如何にや。

研ぎなす白米幾升

青菜は數鉢にゆであげ

いまはや用意と、のへり。

張生云ふ、われ寺の中にて一度處女を見てしが、はからずも今日妹脊を契るに至れるは、まことに前生の約束にてやあらん。紅娘云ふ、妹脊のことは神のみぞ知る、人力の能する所には非ず。

「張生唱」八七

ひと事よければ百事よけん

一事成らずばも、こと成らじ

草木に情の無しとはいへど。

張生云ふ、地より連理の枝生ひ、水にも竝頭の蓮咲く例あり。

「紅娘唱」同調

肩あひならべて生ひ出るものを。

「同」七五

年紀わかきため此の君の  
 戀わづらふとゆめいはじ  
 生れつきたる才貌に  
 打扮いでたもきよくけだかきが  
 一人寝る夜の夜はさぞな  
 多情の才子ゆくりなく  
 思ひつきたる吾姫の  
 もし幸うすくあはざらば  
 命いのちむなしくなりやせむ。

張生云ふかのをとめ信實ありや。

「紅娘唱」同調

如何で信まことの無かるべき  
 如何で誠まこと缺くべけん  
 二人したしく今宵しも  
 心の底をさだめなん。

紅娘云ふ妾君に望むことのあり。

「紅娘唱」八四

今宵のめでたきまぐはひ  
 はじめて知るらん姫が身  
 よくいたはりてよよわきに  
 頸うなじを交ふる鴛鴦



燈下に飽かずも見入りね

いとしさのつくる時なく。

張生云ふわれ書帙をとりかたづけて行く可ければ御身先つ回られよ、してまたかしこの景色はいかにぞや。

「紅娘唱」七五

落紅の庭胭脂冷え

いまだ眺めはうるはしき

夫人妾を遣はして

夙く來たまへといはしめぬ

良きをりよきことそむかざれ

かしこの設備鴛鴦の

夜月に眠る鎖金帳

雙の翼に春風を

はらむ孔雀の軟玉屏

鳳簫象板しめやかに

錦瑟鸞笙音ゆるく

合歡令を奏でなん。

張生云ふ吾にいかなる禮物も無し、これいかゞすべき。

「紅娘唱」七四

禮物などて求めん

事はや成りて今しも

燕爾の支度と、のふ

鳳にまたがり戀に乗る  
まれびと君とさだまる  
今宵ねてみん彦星  
たなばたつ女のあふせを  
めづらし君がわづかの  
紅あかき糸だに用ゐず  
妹せのちぎりとげんは。

「同」「七五」

將軍を擧げ寇あだを討つ  
二つの功結納いさをゆひなふよ  
姫が御心なびきしは

文才いよ、ゆたかなる  
君が伎倆に困りてなり  
珠圍翠繞のよろこびも  
青燈の下黄卷の  
いそしみよりぞおこりける。

張生別に客ありやと問ふ。

「紅娘唱」「同調」

うるさきを避けしめやかに  
我が家の人と君とのみ。

「同」「七七」

恩義を受けし君のみ招き

何にもならぬ出家は召さず

夫人の言ことば君なそむきそ

妾とともにとく行きたまへ。

張生云ふ御身先づ行かれよ、われ後より行かん。

「紅娘唱」七六

夫人ひたすら君を待てば

しりごみあまりなしたまひそ

人のことば聴くはやがて

恭敬うやまつふ道と世に云ふめり

再び妾むねを來しめざれや。

紅娘先づ歸り去るや、張生はうれしさに耐へやらず、宴完りてのち姫

と妹脊をかたらふことの歡樂など様々に心に畫き、果は狂ひたるが如くほくそ笑み、やがて夫人の室に向ひぬ。

第七齣 夫人停婚

(夫人紅娘張生鶯々登場す)

張生は紅娘の去りし後、直に夫人の宅にいたりしに、夫人大に喜びて前つ日の恩に酬いんため、聊か小宴を催して先生を煩はせりと述べ、先づ盞をすゝめぬ。張生之を飲み、二言三言夫人と語かたふ時、紅娘は別室に在りける鶯々を伴ひて出で來れり。

「鶯々唱」七七

君幸に識る人多し  
君おはさすばいづくの者か  
賊の軍をしりぞけ得べき

酒肴ならべて笙歌を奏し  
香烟ほそく花香かすかに  
東風み簾にしがらみみちぬ

仇去りわが家救ひし人ぞ  
うやまはでやは歡待さでやは。

「同」四五

碧紗の窗の下  
ほそ眉ゑがきしが  
たちては羅衣のそで  
しみつく白粉を  
さらりと打ちはらひ  
指さきやさしくも  
鉦さはりみる

若し人醒まさずば  
繡衾うちかぶり

西廂歌劇

いま猶寝ねつらん。

紅娘云ふ、あつばれ美はしの吾が姫君よ、張生こそ幸なれ。

「鶯々唱」七五

わが似合はしの梳妝を

あつばれ等とそゝり居る

たはこと好む小婢かな

紅娘云ふ、姫君の御姿まことに生れながらの夫人なり。

汝いふ言をつゝしみて

口すべらすなかの君が

身のさちいかに妾のみは

ならんとならば人婦に

なり得らるべき身なれども。

紅娘云ふ、先つ日は互に思ひ煩ひしを、今日は早くも喜べり。

「鶯々唱」五六

先つ日は人は妾に

妾は人にむねのみ知る

片戀のもゆるおもひ

今日よりはやゝはれなん

報ゆべき人のなさけ

すべからくむくゆべきを

我母のこゝろもとなき。

第七齣 夫人停婚

紅娘云ふ、今日は姫君の慶事ある時なるに何とて大筵を開かで、かくも小酌を催すや、鶯々云ふ、母君の御心を知らずや。

「鶯々唱」七五

二つの事をひとつにて  
すまさんものと母ぎみは  
益無きものは女子との  
世の諺をき、にけん

將擧げ賊を退けて  
わが家安きを得たるなれ  
もの何程か費して

夫婦のちぎりはなすべきを  
あ、やみなんか世にうとき  
母のこ、ろのすぎたりな  
氣づかはしさのこのうたげ。

張生小用にとて立つ折しも鶯々はこなたに來れり。

「張生唱」六六

部屋の戸くち簾すだれの前  
小さき足はこびいづる  
見こす目もとすゞしくして  
さときこ、ろそれとさとる  
見られしわれおもはゆくて

心をどり居た、まらず。

夫人は鶯々をして張生を兄たる人として拜せしむ。鶯々張生紅娘  
たち、いづれも夫人のふるまひが案に違へるを驚きぬ。

「張生唱」五七

おどろきて動きもえせず

かたくなりいふすべしらず

みだれては答へかねつ、

おどくと立ち居に迷ふ。

「同」七七

世にふるびたる媼憎らし

汝は妹兄を拜せと

思ひかけざる事にもあるかな

水はあふる、藍橋の下

火は燃えおこる祇廟の上

わだつみあらび波にもまれて

遠くわかる、比目魚は悲し

あわたしきは何故かそも

夫人の言聞くだにつらし。

左右の眉毛をひたとよせつ、。

夫人は、紅娘に酒を持ち來らしめ、かつ鶯々にむかひ兄上に酒をす、

めよと云ふ。

「鶯々唱」七四

ま白の頸うなだれ

おのづと鬢ひそむ細眉

やさしきおもひすべなし

もの云ふだにもうれたし

いまはた何を言はんや

つぶらの眼めさへおぼろに

やさしき口にためいき

心のもだええ耐へず

この筵むしろなほ鳥の

つどひては散る心地す。

張生は鶯々に斟つがれたる酒少し飲めり。

「鶯々唱」六七六

人はまこと

玉液金波のどに入らず

うつ、なしや

月下西廂のこんの夢

うかぶ涙

人知らぬ間に香羅濕める



西廂歌劇

あなたの君

まなこ倦んじて風痺病めり

こなたのわれ

手さへ擡げかね肩こはばる

ふかき病

身に染みいりて活きがたかり

人ころさむ

わがたらちねは何なるらん。

夫人、張生に更に一盞をかさねんことをす、めしが張生辭してうけず。紅娘ひそかに鶯々に向ひ、なにとてなやみ給へるやと云ふ。

「鶯々唱」七七、七五、互

今のなやみは猶しのお可し

後の思をいかにせん

心の底を言はんとすれど

かたへに母の居たまへば

ひとりすげなく心かくして

咫尺の間はるかなり。

「同」七四

やけのみの酒苦しく

首をたれてもだしつ

たゞものうげの居すまひ

醉顔ことにあかみて

大なる玻璃のさかづき

とりがてなるも吾がため

色に出る酒よけれど。

夫人は鶯々に聞に入りて臥せよと吩咐け、れば鶯々は心の中に母の言の信なきをなけきつ、張生の前を辭しぬ。

「鶯々唱」〔六七〕

かはり易き御母のこゝろ

定むべきを定めもやらず

謎のことは如何に解かんや

それとなしに言の葉かざり

人をいつはり和げんとし

招ける客こゝろよからず。

紅娘云ふ、姫君別人な怨みそ。

「紅娘唱」〔七六〕

(此處に紅娘唱とあるは鶯々唱の誤なるべし)

昔よりつゆ變りなきは

佳きたをやめの運つたなく

ふみ讀む男しりごみして

成るべきちざり遂に成らず

父逝きまして遺れるわれ

柁緒絶えたる船の如し

君はいかでわが母上に約を履まんことを争ひたまはぬ。  
行へも知らぬたよりなき身。

「同」五七五

笑ひての

後は涙のあと多し

一封の

書信よく賊を破らすば

いかにして

活きながらへんわが母子

姻縁を

想ひつめたる人あはれ

くやしくも

今や望はたえはてぬ

そらごとも

長々しやな母が舌

成る成らぬ

すべては母の上に在るを。

「同」七五

今より後の我が顔容

さびしさたぐふ梨の花

胭脂は淡し櫻桃顆

西廂歌劇

そも何日遂げんわが戀ぞ

そこひも知らぬ黒海くろうみに  
まさりて深きわが思ひ  
見はてもつかぬ大陸に  
まさりて厚きわが思ひ  
かの極みなき碧空に  
似ていとひろきわが思ひ  
大行の山高かるを  
仰ぐが如く思ひしが  
東海の水深かるを

のぞむが如くこがれしが  
破れてあはれ戀衣

あ、母上よ。

目もあやに咲く雙頭花  
無残やこゝにむしられぬ  
匂ひゆかしき同心帯  
あはれやこゝにちぎられぬ  
枝さしかはす連理の樹  
かなしやこゝにくじかれぬ  
白頭の母うけひかで  
青春の女をあやまりぬ

にしきに飾るわが幸は  
ふみにじられぬ束の間に

言葉たくみに母上は  
人をば捨てつわれをしも  
むなしき名にて賺しけり。

(鶯々下場す)

張生夫人に向ひて某酔ひたれば暇申したきが、たゞ一言聞え上げ度  
き事の候、前つ日の約束は姫君を某に婚すにありて姫君を某が妹と  
するにはあらざりき、願はくは夫人の答を得んと述べければ、夫人の

云ふやう、前つ日の約束は眞に先生の言の如し、いかにせん姫は已に  
先相國の在ませるとき妾が甥鄭恒に許嫁しあり、この頃彼を呼び寄  
せんとて都に書を送りたれば、日ならずして此處に來りぬ可し、姫を  
先生に遣はし難きは此の因故なり、ねがはくはこれを思ひあきらめ  
てよ、われ多くの金帛をもて先生に報ゆべければ、別に豪家をもとめ  
縁をむすび給へ。

(夫人下場す)

張生心に怒りつ、席を辭し、紅娘に扶けられて戸外に出で、紅娘に云  
ひけるは、われ處女を見しより日ねもす夜すがら夢に現に思はぬ日  
とて無かりき、さるに今日こそわが思を遂ぐる時なれと期したるに、  
はからずも夫人の心がはりにて我望も泡の如く消え失せたり、御身  
わが此思を姫につたへよ、生きて詮なきわが身は今日を限りとして

世を去りなんとぞ思ふ。紅娘これをき、て云ふ、はやまり給ふな先生、われによき手段あり、そは今宵わが姫君花園に出でまし香焚くとき、先生書齋に在りて琴を奏で給へ、わが姫君もとより琴をこのみ給へば、必ず何事かのたまふことあらん、われ明日其の言を先生に傳ふ可し。張生これに従ひぬ。

(紅娘下場す)

待ち遠かりし黄昏となりければ、張生紅娘の言の如く一張の琴を出だし、これを限りと秘曲を奏しぬ。

第八齣 鶯々聽琴

紅娘登場して云ふ、月影うるはし、姫君よ出で、香焚きたまへ。

(鶯々登場す)

わが思ふことの成らぬに香焚きて如何ほどの功德やあらん、月よ月よ汝のみ獨り圓かにて我身一つはそも。

「鶯々唱」七四

雲歛まりて晴空

氷輪ひかり湧き出で

かせ残紅をはらひて

花びらとびちる階

離恨閑愁こもぐ

西廂歌劇

千々にあざなふ胸かな

始あれどもをはりは

なきがあまたの世の中

影の戀人君にて

晝ける愛人妻かも。

「同」  
「五五」

口のうち君がみ名

くりかへし胸のうち

面影をしのびつ、

夢路をば頼みてき

母きのふ宴うたげには

山海の美をつくす

優待もてなしはよしなくも

妾われをして翠袖に

玉杯をさ、げさす

みなさけはあるべきに

おもひきやおやご、ろ

兄妹あにいもとさだめては

水と魚はなれけり。

第八齣 鶯々聽琴

西廂歌劇

紅娘云ふ、月暈つきがきあらはれぬ、明日は風吹かん。鶯々云ふ、風月は天邊にあれど、人間には好よき事無し。

「鶯々唱」八七

この世にありてもかほよき人は  
錦のとばりに深くかくれて  
うとましき人の見るだに厭ふ  
雲井をゆきかふ伴とも無し月の  
あるじときこえしそのかぐや姫  
裴航の仙夢むすぶよしなく  
天つ宮居またうらめしきかな

廣寒宮殿仙女嫦娥の

あだめく心をわしとゞめんと  
圍つきがきめる月暈つきがきわが羅うすものの  
幃とほりいく重にも張りしに似たり。

紅娘が合圖の咳嗽にて張生琴を調べ初めぬ。

「鶯々唱」六八

歩みにつれ緑なす髪の  
かざしの玉さゆらぎ鳴れるか  
もすそ拖ひきて環珮ひびくひびくか  
のき端はのかせ鐵馬狂へるか  
ちりりんりと戸口のみ簾すの



金の鈎手つってすれて音するか。

紅娘云ふ姫君よ、さにあらず。

「鶯々唱」八八

御寺の鐘のひゞくやこうこう

おばしまの笹葉しめやかにさやぐ

象牙の尺鈇ものさしはさみあたる音か

銅壺にしたゝる水時計の聲

身をひそめて聴くついちの東邊ひかしへ

これこそかしこに琴弾く音なれや。

「同」七五、八七互調

鐵騎刀鎗かけひきの

聲にもまさりていさましきかな

深山かくれの花おちて

ちり浮く水より幽かすけきその音ね

月さえわたり風清く

雲井にまふ鶴たかく鳴くごと

小まどのあたりしめやかに

小女ものがたるさゝめきに似て。

「同」五六

かぎりなき君が思ひ

わがむねにとく知れるを

雛風と嬌鸞とは  
あはれけふ離れく

奏づるを飽かずきゝて  
いやましに人のこひし  
燕つばめにし伯勞みさこひがし  
いかにせんこのかなしみ  
言に出でていひかねつゝ。

この時紅娘夫人の様子を窺ひ來んとて、鶯々を庭にのこして彼方に  
いたる。張生は鶯々が花園にあるを知りければ、昔相如が文君の心

を誘ひきといふ鳳求凰の曲を彈す。鶯々窗の下近く寄りす、み涙  
をうかべて悲愴の曲に耳かたむく。

「鶯々唱」「六六」

人の耳を傾けしめ  
おのがおもひつげんとてか  
音だに知らば心なきも  
うごくべしよこのことうた  
もの思へる人のむねは  
やるせをなみ深くかなし。

「同」「七六」

はじめに變る糸のしらべ

清夜聞鐘それに非ず  
黃鶴醉翁それに非ず  
泣鳳悲麟それに非ず

清夜聞鐘  
黃鶴醉翁  
泣鳳悲麟  
みな古の琴曲の名なり

同「五七七」

節々に

ひとりぬる夜の刻漏長く

こゑくくに

身はけづられて衣帯はゆるむ

さまくの

つらきわかれを一曲ひとつに組みて

あ、君よ

人はいよく君めづらしむ。

張生獨語して云ふ、夫人は恩を忘れしが、姫までも我をたばかりか。  
鶯々こなたにて獨語して云ふ、君われを誤りうらめり。

鶯々唱「六七」

これこそみな母がたくみよ

われみづか自ら避けしに非ず

こゝろのまゝふるまひ得なば

我より乞ひちぎりこめんを

西廂歌劇

母のまもり夜晝わかす  
女工をんなわざにいそしますれば  
ひとり出で、かたらひかねつ

ぬけてゆかむひまだにあらば

あ、君よ

いかで君を人無きところ  
よるのころもかへしねせめや。

「同」四六

そよかせ疎簾ふきて  
幽室ともし青し

れんじの窗はあらく  
紅紙べにかみ一重にこそ  
巫山いくそのみね  
隔つにあらぬものを  
いかでか人の消息たより  
傳ふるつかひもがな  
よしそれ十二の峯  
このなか阻へだてんとも  
高唐楚王の夢  
必ず君や來くらん。

紅娘來りて云ふ、夫人嬖君を尋ねませば、とく歸り給へ。

「鶯々唱」五七

氣せはしく人呼びたて、  
うらめしき別れさすかも  
妾わらわこ、に動かでありしを  
せきたつるはしためのこゑ  
ひかんとすはしためのうで  
うたてくてもどかんものか

母上につげくちなさば

このおもひむなしくならめ。

紅娘は鶯々に向ひ我姫琴に聴きとれて如何にかし給ふ張生は此の

宅を出でんとする由を言傳てぬと云ふ。鶯々云ふ汝かの先生に暫し留らんことを乞へよ。紅娘いふ外には何か。

「鶯々唱」七七

何かにかくと母はいへれど  
のぞみ必ずむなしからじよ

くちまことなくつれなき母は  
君ねがはくはとふことなかれ  
まご、ろふかく思ひ入りたる  
我こそは居れ放ちはやらじ。

第九齣 錦字傳情

(鶯々紅娘登場す)

鶯々は張生が病に臥せる由をき、て私かに紅娘を遣りて、張生の病を問はしめんとしたるに、紅娘はじめは鶯々の心をなぶり、わざと肯はざりしが、鶯々ひたすらにたのみたれば、紅娘は命を領して出でゆきぬ。只だ午夜琴を調ぶる手に因つて、引いて春閨月を愛する心を起さしむ。

「紅娘唱」五九

姫や今裁縫たぢなひいそしませ

脂粉さへ香失せしまゝにして

物思ふ様は眉根に見ゆ

靈犀のひかりひらめきなば

此の病やすくと癒えなん

(鶯々下場し張生登場す)

張生鶯々を慕ふの餘り、遂に病に陥りければ、長老をたのみて己が病重き由を崔家に傳へ、誰か病床を訪ふ人もやあらんと、首をのべて待ち居けり。紅娘は鶯々の命により張生が許に至らんとて來れり。その心の中には張生が再生の恩人なるを今更の如く感ずるなりき。

「紅娘唱」四四

相國おとこのみ柩

しばらく留むる

西廂歌劇

み寺のわざはひ  
をさなき姉弟  
あはやと危ふく  
見えたる亂軍。

同「三五」

人の心のうれしくも  
一封の書師を興し  
文字の力あらはして  
光明正大いさ、かも  
私ごと、ろ無かりけり

若し半萬の賊の

はびこる根づる打ちおかば

一家あやふく絶えたらむ

ひと度ゆるす妹と脊の

姫と人とは夫人の

信を缺けるかこつけに

樂しき望水の泡

たゞ兄妹と名のらしむ

ゆかしき事のうちやぶれ

かなたの一人いたづらに

胸にた、める錦繡の

西廂歌劇

文字もじならべしに過ぎざりき  
こなたの一人むなしくも  
頬の胭脂にながれよる  
涙あるのみかなしやな。

「同」五八七

いぢらしや

形衰へし潘郎の髪

いとしやな

むかしのおもかげ杜韋娘に無き

かの人や

身もほそりゆきて帯いや長く

この人や

うつら／＼臥し經史けいしも手にせず

かの人や

思ひつおもひつのりきて糸針いとはりうとみ

この人や

離恨りこんのなげきを琴にぞ寄する

かの人や

書きてはまた消す斷腸たんじやうの詩

かの人や

心のひめごと筆にあらはし



この人や

切なる思を絃につたへて  
とやかくと

二人はひとしく戀にぞなやむ。

同「七五」

才子と佳人めぐりあひ

さすがに戀もうるはしや

思ひ遂げずて泣くときも

尙しとやかにふるまへる

妾もしかゝるいたみ得ば

心に餘裕つゆあらじ

ひたすら戀ひて戀ひ死なん。

紅娘は書院にいたり、唾もて窗紙をうちやぶり、張生の様子を窺ひ見ぬ。

「紅娘唱」五七

まど紙をしめし破りて

しのびかに人うかゝへば

衣のまゝ、寝起きやすらん

身にまとふその羅衫の

前襟の皺のみにして

枕邊に人の侍らぬ

ひとり臥のさびしき夜や  
はれやらでふさげる氣色  
かすかなる息のみかよひ  
蒼白の面やつれたり

張生よ

病み死なすば戀にぞ死なめ。

「同」七六

かざし抜きとり扉た、く

張生内より誰ぞと問ふ。

思ひの種を播きつけゆく

疫神の使者われ紅娘

月ほがらかに風きよらの  
よべ忘れかねわが姫きみ  
君やいかにと訪はしむ

張生いふさるからには必何かいふことあらん。

今までかつて身じまひせず

たゞ一すちに君を念す。

張生云ふ姫すでに我を憐む上は、われ御身に托して一封の書信を贈らん。  
紅娘云ふ書信を贈らばかへつて姫君の怒にや觸れん。

「紅娘唱」七七

此の詩を見れば此の詞見ば

西廂歌劇

姫はかへりてくれまどひなん

姫君御聲あら、けて、汝誰が書をもて來しぞと叱り給はん。

こ、な小婢こをんないかでさるわざ

見よやと計りひき破りつ、

紙きれくに捨てたまひなん。

張生云ふ御身わが願を聽かば後に多くの禮物を贈らん。

「紅娘唱」四八

君しもあまりに聞えぬ

たのみて物得させんとや

財貨のあるを知れよとや

妾が此處に來れるは

むくいを得んが爲ならず

君よしわれに賜ふとも

黄金を愛めづるわれならず。

「同」五六

春されば折るにまかす

墻かきの外の桃李の枝

門に倚り媚賣る人の

いやしきになたぐひそよ

はしたには妾あれども

氣慨豈あらざらめや

第九齣 錦字傳情

ひたすらにやもめぐらし  
あはれめといふものならば  
かゝりなば

われも亦思ふふしあり。

張生言をあらためて、紅娘に書信をとゞけんことを頼みければ、紅娘も肯ひぬ。其の書に曰く

謹啓尊顔に拜別して以來、鴻麟の道絶え悲愴の感に勝へず候ところ、料らず御母堂恩に報ゆるに怨を以てし、遂に約束を違へさせられ候ことかへすく、残念の至りに候。小生徒に牆東を望み翼なくして粧臺の左右に至り得ざるを恨み、思極まりて命も久しかるまじと存じ候。今紅娘の來りしを幸に、一筆寸心を表し候。御憐情により、好音を示下せらるゝを得ば、尙殘喘を保つを得んか。造次亂筆御

容赦祈上候、尙左記拙作御笑覽に供し候。

相思恨轉添 謾把瑤琴弄

樂事又逢春 芳心爾亦動

此情不可遲 虛譽何須奉

莫負月華明 且憐花影重

「紅娘唱」〔六六〕

下書すとおもひしものを

筆そめつゝ、たじろきせず

起臥問ふ後につゞけ

よみ出でたる一首の詩

また、く間に花箋の上

つらねし文字目もあやにて  
た、み方もいとなつかし

みやび男思にとみ

さかしくして際ことなり

いつはりにもよしあらばあれ

大方人のなし得べしや。

「同」  
「七七」

封じ目にかく鴛鴦の二字

思ひあまりてつひさかさまに

むねに秘めたる心ほに出づ

氣ぶりよく見てこれ取り出さん

こゝろ安かれ書讀む人よ

いづれよりぞと姫問ひまさば

昨夜きこえし琴の主より

方さままゐる書信と云はまし。

紅娘云ふ、書信はたしかに姫に手渡しまるらせん、先生氣を落さず學  
の道をいそしみ給へ。

「紅娘唱」  
「六七」

姫が袖を曳かんず手もて

月の桂し折るべきなり

西廂歌劇

たふとき文字みだりに用ゐ  
いやしき詞綴ことばるをやめよ

蓮はらすの糸鷓鴣つなぎ

鶯の音鴻鵠おさふ

とばり深き人戀ひわびず

文のはやし伐りなびけよや。

張生云ふ、さらば御身にたのみたり、必ず忘る可からず。紅娘云ふ、先  
生心やすく居ませ。

「紅娘唱」五七五

沉約は

病ひがちにて衰へぬ

宋玉の

愁ひも二なきやせ見えき

思ひわび

ほそりゆく人かげあはし

忘れずよ

見る目ゆかしき思ふどち

何しかも

われなほざりに人や見む

沾うらんかな

美しき玉こゝにあり

人のため

第九齣 錦字傳情

西廂歌劇

好き音信きこづねの文いたし

わが口に

まかせて説かん君が戀

つらねたる

心のたけのふみそへて

かの姫も

さすれば來たり相見んぞ。

(紅娘下場す)

張生は此の一封の書信必ず徒事にあらずと思ひぬ。心下の恨を消さんと欲せば、須く好音の來るを要すべし。

第十齣 妝臺窺簡

(鶯々紅娘登場す)

此の朝鶯々は尙臥床の上に在りて紅娘の還り來るを待ちけるが、紅娘は夫人の用務ありて暫し來らざりければ、待ちあぐみてうつ、なく睡り居し折しも紅娘は來りぬ。

「紅娘唱」八五

み簾ふきゆるがす風もなく

窗より洩れくる麝蘭香

丹ぬりの扉をそと推せば

門環ふるひて響あり

も、色燭臺ほそ長く

第十齣 妝臺窺簡

金色こがねしたる小火皿に

ともし火眞白にかゝやくよ

内なる垂幕ひらかんと

紅梅色なすうすぎぬの

とばり先づか、げ儷み見る。

「同」六六

釵かざしゆるみ玉かたぶき

鬢かみゆがみて雲とみだる

日はたかきも尙なほめさめす

ものうき態さまいみじく宜し

やをらのばす腰と腕と

さて耳搔く三たび四たび

つく呼吸こそ深かりけれ。

紅娘は張生の書信をたゞちに姫にわたしなば、却りて姫のとかくに  
言ひまぎらはさんを恐れ、ひそかに其を化粧匳の中に納めて、姫が如  
何するならんかと、ものかけより窺ひぬ。

「紅娘唱」九八

よべのよそほひ見ゆ

黒かみのほつれ

白粉の香のこり



みだれ毛かきあげ

鏡臺に肘つき

書信をば取り上げ

封じめ打ひらきて

つくく見入りつ

くり返し念じて

胸の中さわぐ

鶯々怒りて紅娘を呼ぶ。

様おだやかならず

眉皺よせたり

鶯々云ふ、「あなたは婢とく來よ。」

白き頸垂れて

何か思ひ入り

さとあからむかほに

怒あらはしぬ。

鶯々は、此のみだりがましき書信もたらしたる紅娘をいたく詰り、母君にも告げて罪を責めんと云ひけるに、紅娘は妾は其の書信になに書けるか知らねど、姫君妾を行かしめたるに、かの先生妾にもたらさしめたるにこそと云ふ。

「紅娘唱」五七

こは姫が過なるを

由なきに妾を窘め

傍人<sup>はたびと</sup>にむねわるくさす

姫知らで誰かは知らん。

紅娘鶯々にむかひてよしさらばわれ此の書信を携へ夫人の前へ出で、事の始末をかたらんと云ひけるに鶯々おどろき俄に紅娘をひき留め、やさしく和めて張生の病情を問ふ。

「紅娘唱」七五

かの君いまは面やせて

やつれすがたのいとほしさ

動かす食はず明暮<sup>あけくれ</sup>に

うれしき一日<sup>ひ</sup>待ちわびて

ひるよる分かず涙にて

こなたをのみぞながめ居る

鶯々云ふ誰か良醫をまねきて療治せば如何に。紅娘云ふ此病は藥にて癒えがたからん。

風流の汗そを除けて

このいたつきは愈えざらめ。

「同」五五

かの人の僻事<sup>ひがこと</sup>は

いつしかに夫人<sup>おとど</sup>に

知られんをなどて今

その人の安危など

尋ねゐる暇あらん

竿の上へのぼらしめ

梯子除け見るぞよき。

鶯々は、此事若し母上に聞えなば、母上いよく、張生を疎じ給はんを恐れ、紅娘を嗜めつゝ、一通の返信を認め紅娘に渡し、御身此書をもて先生の許に到り、鶯々は妹として兄たる君が病を問ふなれば、此の後は必ず此度の如き書信を賜ふこと勿れと告げよと云ひて、わざと腹立たしげに書信をとりて擲けつけたれば、紅娘そを拾ひて色をなし、

「紅娘唱」七七

をさなき人の心のまゝに

ものうち言ひて人くるしむる  
わが姫かくも性急ならば  
人をゆかすと慕ふを止めよ  
あで入らしくふるまひ給へ。

「同」五三

夢にては二人  
醒むる時一人  
寢食も忘る  
羅衣は耐へず  
あかつきの寒さ  
限りなき愁

さめくくと涙。

「同」四、五、六

辰勾の星のかげ

見るはまれよ

佳き宵いつかはと

むなしく待つ

かよひちその門を

かたく閉さじ

二人は安らかに

夫妻となりね

めでたきむしろの上

ならべすゑて

妾はしも口なしの

結縁のかみ。

張生は自己の書信に對して必ず佳き返事あらんとて、紅娘の來るを待てり。紅娘は心の中姫がことさらに怒りし意を推し知り、いま返信を携へて張生が許に來りぬ。

「紅娘唱」四、八、八、八

いつぞや

杏花散る頃のよるの粧みじまひに

着る衣きぬうすしと寒がりし人の

よべはも

つゆ月に光りうらさむき春を  
琴の音き、いり物みな忘れつ  
はぢよや

きまぐれ男を墻ごしにしたひ  
あはやならんとすまつら佐夜姫。

「同」七六

姬わがま、にふるまへども  
われこ、ろよく書信は寄せん

身の行はかへり見ずて  
人の罪のみあなぐりとふ

艾焙しのばん此の一度  
姫やあまりに人のわろし

たゞ兄妹の禮を爲すとは言をかし。

ことば巧みに表面かざり

蔭にて愁眉なみだの雨。

張生紅娘を見て、かなたの吉左右を問ふ。紅娘すなはち先生の書信  
おだやかならずと告げ、るに、張生は紅娘が力を盡すこと薄きに由  
るならんと疑ひぬ。

「同」七八

こはこれ君が幸うすき故ぞ  
つゆ紅娘の手落ならなくに

君が書信こそ口供書なれ  
姫が白洲しろすに身つみ人として  
立つを憐み許されざりせば  
あだし人ゆる危くまきぞへ。

同「五七」

けふよりは會ふこと稀に  
西廂は月くらからん  
鳳おほとりは秦樓を去り  
雲は消ゆ巫山のたかね  
誰もかも別れ別れよ

請ふ君よ怨み給はで  
ゆかん方とくたづねませ。

紅娘は夫人の自己を尋ねんことを慮り直ちに張生が前を辭せんとしけるに、張生は今振捨てられては更に心を語るべきもの無ければ是非に一工夫して救ひ給へと、跪き固く紅娘の袖をとりて放たず。

「紅娘唱」「五八」

ねこかぶりたくみな用ゐそ  
ひたぶるに戀遂げんとせば  
わが骨は粉とくだけ散らん  
夫人おぐだは杖とりさすりて  
いつかはと見はり居給ふに

麻繩は針の目とほらじ  
よわき身の打ちひしがれんも  
くちびるは縫ひつけられんも  
なか／＼にかけはしせよとや  
姫君の性のけはしければ。

前に懲りふた、びはえせじ

張生ひたすらに紅娘に哀訴す。

すてがての君が頼たのみかな

いかにせん此方によければ

しかすがに彼方にわろくて。

紅娘は茲に始めて鶯々が返書を取り出し張生にわたせば、張生よろ

こび限りなく直に開き見けるに一首の詩あり。

待月西廂下 迎風戸半開

隔牆花影動 疑是玉人來

張生は此の詩の意を紅娘に解き聽かせ、今夜月落ちぬるころほひ、牆を越えて花園の中に來よとの謎なりと云ふ。紅娘は姫のいつはり多きにおどろけり。

「紅娘唱」七七

まさかにそれと知る由もなき

たくみを伏せし書信ふみなりけるか

若き心の測りかねつる

西廂歌劇

西廂の月闌けぬる夜半に  
墻をどり起え君たづね來よ  
戀は思案の外とかきたる

此の詩こそはうしみつ時に  
しのびませとの言をかくし  
此の文こそは人を取りこの  
つはものどもをかくしにけりな

人うらめしやきはどくはかり  
闇をよそにをさまりかへる

妾は文使戀の中だち  
忙しき中に暇こそぬすめ。

同「四八」

しら紙つや、かに光り  
字々みな麝蘭の香を噴く  
滲むは春の汗ならず  
思にかきくれしなみだ  
一絨の紅なほ濕めり  
あふる、すきご、ろうたて  
滿紙の墨まだ乾かずて



西廂歌劇

やすかれわが張先生  
姫ごみ君が思ふまゝ。

〔同〕四、五六

かなたは

親しみのいとふかきに

こなたは

なほざりによそほひ見す

ましてや

孟光が梁鴻にと

かしづく

おもひなしひたふるにて

君には

いとやさしき言葉かはし

ま冬も

なか／＼に暖かきを

妾には

にくらしき口ひゞらかし

ま夏も

いとゞしくひや、かなり

いで妾

まもり見んひめ情女が

こがる、

潘安をいかにすらん、

張生云ふいかでか墻を跳び越ゆべき。

「紅娘唱」〔六八〕

墻のあなた花の枝ひく、  
風を迎へ戸は半ひらく  
しのぶ手段いま考ふるに  
龍門なほ登るべき人の  
墻の高さ恐れて何せん  
月の桂手折るべき人の  
花のしげみ恐れて何せん  
何の懸念何のはかりぞ

君行かずば顔くもりて

涙みたん秋水の眼もと

いや覺まむ春山の眉根。

張生は過ぎにし夜花園に至りしこと二度あれど、めでたき事に出で  
會はざりき、さればたとひ今宵また花園にいたればとて、宜き事もあ  
らじと云ふ。紅娘云ふ、こたびは書信の行きかひありての上なれば  
必ず過ぎし夜とは同じからざらん。

「紅娘唱」〔五五〕

前つ日の二たびと

こたびとは異れり

墻ごしの歌よみも

一時のすさびぐさ

事成るはたしかなり

今回こそ書信あれば。

張生今日は日輪のめぐること遅きをうらみ、心の中に今宵のあり様など想ひ浮べ、ひたすらに夜の至らんことを待ち居たり。

第十一齣 乘夜踰牆

(紅娘鶯々登場す)

紅娘はすでに鶯々が張生に返したる詩に由りて、その心中を知りぬ。

今宵また二人は香を焚かんとて花園に出でけるが鶯々が晩妝のすがたは常に比べて一入に美しかりき―花香重疊して和風細かに、庭院人無くして淡月明かなり。

「紅娘唱」七五

身にしむ夜風まどに入り

金鈎さびし垂れしみ簾す

門をばおほふ暮の靄ちや

樓角つゝむ夕がすみ

鏡に向ふ夜化粧の

と、のふころの樓よ。

「同」七六九

若葉しづけき池のつゝみ

鴨のねぶり深く

色なつかしき楊柳のかげ

鴉の巢ごもれる

牡丹の芽ばえ踏みあやめて

蓮歩そゞろに行き

茶蘼這ふ棚の下あゆめば

玉簪枝からむ

夜は冷えくゞに小徑の苔

いと滑かにして

露の白玉足にこぼれ

凌波の足袋濕める

あゝ張生は夜を待ちかねてあらん

「紅娘唱」八八

日出づる曉はや月を待ちて

一刻の暇は一夏の思ひ

柳にかたむく夕日は遅々たり

見まもる神たち鞭うち急がせ

わが姫きみよ

「紅娘唱」七四

いとふさはしき妝

西廂歌劇

人と事ある備いそぎか

燕侶鶯儔いさよそのため

意馬心猿はさわぐよ

姫君は人を思ひて食物も咽を通らぬ程なるに、

すがたとこ、ろいづれか

まことなるらん我ひめ

心はつひに制さりかね

けふこそは穂に出でつ、

みだれそめにしはかなさ。

紅娘ひそかに花園の角門をひらき窺ひ見し時に張生こそくと彼方より來りぬ。

「紅娘唱」七五

槐えんじゆの枝に風の來て

夜がらす寒くふるふごと

君が紗帽の見えがくれ

かたふきひそむ曲欄と

そがひに立てる庭石と

うとくへだて、ものいへず

張生は、紅娘がこなたに歩み寄るを鶯々なりと見ちがへて、わが愛する姫よと、云ひも果たさず抱きつけば、紅娘わらは妾なりと云ふ。張生氣づきて手を放てば紅娘云ふ、これ妾なりしは倖なり、誤りて夫人なりしならばいかにや。

誤りあわて抱きたる

心もそらの君が眼は

戀の暗路にくらみけん。

紅娘問ふ、姫君はたして先生に來よと告げしか。張生云ふ、かの謎の意をもて確かに知りぬ。紅娘云ふ、先生若し門より入らば妾が先生を招きやしつると疑はれん、願はくは牆を越えて來たまへ、今宵こそ望は遂げられぬ。

「紅娘唱」七六

見よ雲淡く月を籠めて

紅行燈のかゝるに似たる

花梢柳枝は垂れたるみ簾

「同」五五

みどりの芝生刺繡のしとね。

しんくゝと夜は更けて

ひろ庭のしづけさに

花の枝重げなり

み心をなごませて

思ふこと語りあひ

うちとけてあひたまへ

すがれたる柳の枝

さきのこる花の房

なたぐひそつぼみの姫。

「同」七八

瑕無き玉のしたゝる愛嬌

鳥羽の髪やさしき面ざし

物えんとてのたくみならんやは

一人ねのとこ夜着うちかづきて

ときめくきざみをゆびやつかれん

なげきのみせしむかしのいたづき

くりかへさずして悲うれひは

はらひすてつ、うちとくべくこそ。

張生牆を越えて入りしに意外にも驚々これをとがめて大に怒りけ

れば張生すこぶる驚きぬ。

「紅娘唱」四四六

媒人氣が、り

いかでなけむ

親しき妹脊の

なに無くとも

あしぶみひそかに

耳かたぶく

をかしや女は

いかれるさま

男はひたすら

羞ぢ入るさま。

「同」四六

張生物もいはず

あはれ、

鶯々心がはり

一人はしめやかにて

一人は物つぶやく

さすがの隋何陸賈

手を組み身をちゝめて

耳なくくちなきごと。

前の言にも似ざる人の弱さかな進みて抱きしむればよきを役所に  
訴へらるゝとも女こそはぢなれ男の何はづかしからん。

「紅娘唱」五七

かげにてはよく物言ひし

かげにてはよく謀りにし

君よもや庭石の邊

西廂のほとり忘れじ

花木瓜の味なき果

をとめ子は碎きにけりな。

鶯々は紅娘をうちまねきかゝる無禮なる男は母君に告げて責め懲



らさんと云ふ。紅娘さへぎりて、妾によき術あればまかせ給へと云ひ、張生をして跪かしめ、さて曰く、經けいを讀み禮を知れる者夜中此處に何しに來れる。

「紅娘唱」四八

われ等は判官ならねど

ひと言ことありのまゝ、告げん

文學海なす深きは

知れ、ど色このみの膽

夫それより大なるはさても。

紅娘云ふ、先生罪を知れりや。張生云ふ、罪を知らず。

「紅娘唱」七五

ふけし夜に入る人の庭

賊にあらねばしのびかも

桂折るべき人にして

花ぬすびと、ならんとし

龍門越えんこと忘れ

墻と跳ぶうまを學ぶとは

紅娘ひたすらに張生をゆるさんことを請ひければ、鶯々は其願を容れたり。

妾めいにめんじてゆるされし

姫がさばきぞうれしかる

たきての庭にもし出ば

専ら書を読む可き人にして深夜人の庭に入るは姦か盗なりとて。

膚は鞭にたゞれなん。

鶯々云ふ、先生は妾等が再生の恩人なれば、恩は恩として報ゆべきに  
兄たる者が妹に向ひ、あるまじき所業は止めたまへ、この後はかまへ  
て愚なること爲したまふな。

(鶯々下場す)

張生は彼女より我を招けるものを、こは解しがたき處女よとて、一人  
なやめるを見て、紅娘しきりに嘲りぬ。

「紅娘唱」五五、八

云ふなかれ春の宵

一刻千金

寒窓に書讀みて

十年寡をまもれ

詩の謎よく解くと

ほこりける人よ

風入れんよすがにと

見たるはひがめよ

花ゆる、隔墻は

山のごとく妨げ

月を待つ西廂は

惨としてくらし

よろこびを求めんと

西廂歌劇

何郎かろうのわしろひ

姫いかでたのむべき

張敞ちやうのまゆ

あ、戀に狂ひたる

秀才しやうさいいたまし

ぬれあはんそののぞみ

日いで、消えうせ

玉をとり香偷かうとまむ

あだ心悔こころがへし

翠帳すいぢやうや紅閨べにまや

のぞみ皆たえぬ

張生云ふ、われ再び一通の書信を認めんに、御身わがために使せよ

淫みだらなることの葉は

とくく止やむ可し

簡帖かんてつもまた今よりは

ゆめなかはしそ

あまりにもこひのみち

さとらであるかな

かへり見て罪悔いよ

わが卓文君

こ、去りて業はげめ

きみ司馬相如。

(紅娘下場す)

張生は其の望遂にはづれければ、無限の愁に泣きつ、わが書齋にもどりぬ。―桂子閑中の客、槐花を病裏に見る。

## 第十二齣 倩紅問病

夫人は、張生の病態軽からざる由聞きにければ、名醫を招き張生の病を診しめんものとして、長老に議りけるに、長老も之を贊し夫人の爲めに一名の醫を請じ來たり、張生が病床を訪れて治療せんことを求め

ぬ。夫人はまた紅娘に張生が病を慰め來よと吩咐けたれば、紅娘は命のまゝに張生が書齋に到らんとするとき、驚々ひそかに紅娘を呼び、われに一通の處方箋あり、御身これを先生につたへよとて封書をわたしければ、紅娘これを携へて書齋を指して行きぬ。―異郷離愁の病を得易く、妙藥腸斷の人を醫し難し。

「紅娘唱」〔六七〕

筆もあやに情こもれる

詩は人のいたづき起し

寝ねもやらず食をも忘れ

腰は疼よび髪さへしろく

恨ふかく沈めるかなし

顔あからめたしなめし昨夜  
くちしづかにこと、はん今日  
昨夜こそさばかり人をたしなめしを。

「紅娘唱」七五

庭木戸に倚り月を待ち  
韻に和せて詩つらね  
耳そばだて、琴き、し  
人としもなき姫がわざ

彼を見れば言葉かざりて、張生よ御身とは兄妹の禮を行ふに過ぎず  
と云ひながら。

怒れるときは秀才の  
耐へ得ぬ程に言ひ懲らし  
うれしきときは使女に

よきわが紅娘よ、わが爲め先生を訪ねよと云ひて。

強ひて人をば煩はす  
あ、耐へがたやわれ一人  
はりをはなれぬ糸のごと  
今より後はかまはじよ

これまた我夫人の罪なり。

恩義てふものはるかなる  
海と山とのものにして。

紅娘張生に見えて病を問ふ。張生云ふ、我もし焦れ死にて閻王の前に引き出ださるゝことあらば御身また干連かゝりあひを免れじ。紅娘云ふ、世の中に戀を病める人はありとも、先生の如くたはけたる人はあらずな

「紅娘唱」三七五

心まなびのみちを

いそしまず

夢は柳影花陰

さまよひて

戀の甘きかをりを

追ひ追へど

何等得たる所も

なかりけり

海棠咲きし時より

空かみたもひ。

紅娘病の原因いはれを問ふ。張生云ふ、わが病はみな御身たちの僞より起れり、人を救ひて却つて害を受けしを思へば恨に耐へず、古より一筋に思ひつむるは女にて男心は秋の空といへど今日は之をうらがへして見るよ。

「張生唱」五七

このやまひ邪淫の爲よ

骨とがり何とも知れず

秀才を千々になやます

片おもひ忍びがたかり  
功名はまだとげなくに

婚姻の卦また悪しくて。

紅娘は夫人が張生を慰むるの言を傳へ、また鶯々が寄せたる一處方箋あればそを交附すべし、其につけても藥には用方極量あり、いま先生のためにかたるべしとて、

「紅娘唱」七四

桂花(藥名)ゆらめく深き夜

當歸(藥名)の酸味しみこむ

張生云ふ、桂花は溫和なる藥、また當歸は血を回らす藥なるに、などて之を戒むるぞ。

庭石のかけ罅あなぐら

そこなる藥あぶなし

一二服にてかく病む

張生云ふ、忌むは何ぞ。

知母(藥名)の寝ざるを忌むべし

すげなき紅娘(藥名)いとへよ

若しこの藥用ゐば

いたつく君子(藥名)ただしく

人參(藥名)なくていえなん。

張生は鶯々が書信を受取り、悦禁じがたく病さへ頓とみに輕きを覺えぬ。紅娘はこの書信また糠よろこびに了らんと云ふ。

「紅娘唱」九六

胸をしづめよ君

いつはりすな

氣ぬけしたる學者

をかしいかな

こと問ふよすが無く

書信のみ待ち

紙片かみきれ一つ得て

心しらひ

綿にて包みたる

針のごとし

若し天女を見なば

いかになごまん

しかるに妾がひめは

恩をわすれ

強いたくも人をこそ

うらましむれ。

紅娘云ふ書信に記せるは何事ぞや。

休將閑事苦縈懷 取次摧殘天賦才

不意當時完妾行 豈防今日作君災

仰圖厚德難從禮 謹奉新詩可當媒

寄與高唐休詠賦 明宵端的雲雨來



張生云ふこの詩は前書の比にあらず、姫かならず來るべし。紅娘云ふ、姫君來まさばいかに。

「紅娘唱」五六

一枚の木綿のふすま  
三尺の琴のまくら  
姫來ともとも寝かたし  
寒くして身體ふるひ  
味氣なくすぎもやせん。

「同」七七

二人が心かよへるならば  
きのふ夜ふけのさびしき庭の

花もおぼろに月くもりゐて  
又なき時のありつるものを  
思ふどちにて詩は何せん。

張生云ふわれに少しの銀子あり、御身夜具あらば我に一組を貸したまへ。

「紅娘唱」六七

夫婦まくら翡翠の衾

ありと云へどにくらし君に  
貸さんものかたゞそのまゝに  
帯も解かでかたりあかすも  
一人寝ねてかりそめごとに

西廂歌劇

氣をはらすにまさらずてやは  
思ひとげばそれこそ大幸。

張生云ふわれ人のために斯くの如く瘦せぬ人もわがために瘦せたるべし。

「紅娘唱」九七

遠山のみどりを

ひける眉すみ

秋水すみわたる

目もとすゞしく

白乳凝り成せる

ゆたかなる肌

青柳かせけふる

なよびかの腰

かんばせ愛らしく

心はたよし

身のこなしただしく

性うちしづむ

法灸神鍼は

施し得ねど

功德はなほ勝る

観音菩薩。

張生云ふ今夜事ならばわれ恩を忘れじ。

「紅娘唱」七四

口につぶやく人の名  
夢にあとおふおもかげ  
ふりにしことはかひなし  
たゞかたらしまし今をば

こよひの逢ふせかならず  
なかだちにたぶ白たま  
黄金も我は何せん  
首かうべに花のきらゝに  
錦地にしきに拖ひく衣きぬこそ

われなかうどはのぞむよ。

張生云ふたゞ恐るゝは夫人が姫を庭に出だすまじきことなり。紅  
娘云ふ、姫きみ果して先生に會はんとならば、

「紅娘唱」五四七

朝よひに夫人かみだ

門をまもるとも

このねがひ必ず

われかなへてん

張生云ふ、昨夜のごとくすけなうする勿れ。紅娘云ふ、先生さばかり  
思ひ給ふな。

姫のきてうべなひ

いかゞ知らねど

逢ひてのちしたしみ

君が身にあり。

第十三齣 月下佳期

鶯々が信書を以て張生に會はんと約したる夜は來りぬ。紅娘は鶯々に向ひ共に張生が書齋に行かんと勸めたるに、鶯々は故らに之を肯はず。さらば書信とりかはし、始末を夫人に申出でんとなぶれば、鶯々せんかたなげに庭の方へ出で立ちぬ。しかも歩みは速かなり。

(鶯々紅娘登場す)

「紅娘唱」〔六七〕

花のすがた玉のこゝろに

よるも晝もたえせぬ思ひ

そのまごゝろ僞に勝ち

晝閣を出で書齋に向ふ

白雲いま楚岫をはなれ

雨もとめて指すや高唐

楚の襄王陽臺に待つ。

張生は今宵こそ必ず姫に逢はるべしとて、早くより首さしのべて待ちけるが、此の時すでに初更を過ぎぬ。

「張生唱」五七

きざはしに佇む宵や  
香靄のたなびく寺院  
うちしめる書齋の空氣  
いら／＼し主人のこゝろ。

同七五

彩雲いづこ見えなくに  
樓臺月を浴びて立つ  
禪室僧居しづかにて  
槐にさわぐむら鴉

風にさやげる竹の葉は  
金珮ひゞく音かそも  
月うつりゆく花かげは  
ころもかゝげて君や來る

待つ身はつらしいらだ、し  
心も魂もおちつかで  
夢みるごとく門に倚る  
門に倚れどもたよりなし  
いたづらにきく犬のこゑ。

終日思はぬひまなきわが心を姫の知れりや。

張生唱「七五、六四」

思入るとき目を開けて  
物見るだにうるさく  
枕ひとつの夢かなし  
たましひ飛ぶ陽臺

かくと知りせば初より  
なよび姿見ざるに  
おろかなりけり過ちて  
改むるにはゝかる

賢を賢とし色に易ふ  
そのいましめかひなし  
制んとすれどあやにくに  
かの係おもかけうかびて。

同「五五」

門に倚り腮おさへ  
はかりかぬくる來ざる

恐らくは母親の  
かたはらを離さぬか

西廂歌劇

わが眼待ちつかれ  
わが思いとせめて  
ま、ならぬ戀人を  
思ひやり待ちくらす。

まだ姫の見えざるは、又かの書信もいつはりか。

「張生唱」七七

來るものならば夙く家出でよ  
來なば書齋に春たゞよはん  
彼若し來ずばわだつみの底  
沈める石はうかぶせ無けむ

窗によりそひ歩數はかる  
さても遅しやいざことよせん、

「同」七四

かの悪さげの罵  
心にとめでひたすら  
みづからこゝろとりなし  
あけくれ面やはらげ  
待つ身はつらし半載。

若し姫來らざらんには。

「張生唱」八八

戀に惱める身死ぬより外なし

異郷のつれづれ強ひて茶に消せど

かの可憎才の腸を沸らす

まご、ろちからに我は生きてあれ

天文みる人はかりこ、ろみば

半年のうれひ十幾車ぞ。

紅娘鶯々を誘ひて書齋の前に至り、かろく門をた、けば、張生直ちに扉をひらきて内に請じ入れ、紅娘にも厚く禮をのべ、跪いて戀人の來臨を謝し、夢かうつ、かとして喜ぶこと限なし。紅娘は戶外に在りて待たんとて室を出で去りぬ。

「張生唱」七四

心にくしやこひ人

わが病の原因

あひ見て病癒えぬる

責になげきし間もなく

思はず今宵のよろこび

こゝろづくしは今知る

われはひれふし拜まん

かの宋玉のおもかげ

かの潘安のかほばせ

さては子建の才學



西廂歌劇

われに無けれど旅なる  
さびしき男あはれめ。

「同」<sub>四七</sub>

繡鞋すこしくひらき  
柳腰なびきてほそし

はぢらひ頭<sup>かしら</sup>擡げず

枕にひとりちかづく

くろかみ金釵墜ちなん

たかまげゆがみもやせん。

「同」<sub>五八</sub>

は、は、

なにいとひ此<sup>こちら</sup>方向かざる。

「同」<sub>八六</sub>

軟玉温香わがふところ

天臺に入りたる劉か阮か

わが住む浮世に春は來けり

色なまめかしき花下かけ

西廂歌劇

勻をあらそふ心とけて  
露のしたゝりに牡丹ひらく。

「同」<sub>六六</sub>

つやくしくぬれまされる  
色すてかねた、すむをり  
嫩き葢かきの甘きかをり  
ほしいまゝに蝶は吸へり  
頭ふれど拒むならず  
行くと見えて又たづね來  
よれもつる、蝶と花と。

張生鶯々こゝに千代かけて固くちぎりぬ。

「張生唱」<sub>七七</sub>

ま白の薄ぎぬくれなる匂ふ

鶯々云ふはづかしや見て何したまふ。

燈火ともしびのもと肌いぶかしみ  
つくづく見入る身のさはりなく  
春の色香いろかはいづくより來し

愚なるみなし兒さすらひのわれ  
君見てしより亂れそめにし  
思はいとゞかれくにして  
はるけん方もなかりしものを

西廂歌劇

深きなさけに忘るうれしさ。

「同」七五

わが心とも君をみん  
敢て操はきずつけじ  
うつゝに夢に戀ごろも  
身にしめてこそまとひしか  
つゝめるまことあらはれて  
よろこび得たりあゝうれし。

「同」四七

こよひは歡愛なりて  
たましひ雲外に飛ぶ

こゝにて君見てしより  
紵釋と瘦せたるわが身  
たのしき此の一ときや  
香埃つゆに濕りて  
閑階かせは動かす  
月光書齋を照し  
陽臺くも鎖せるは  
問ひても知らるべけれど  
もしまたよべ見し夢の  
はかなきあふせなりせば

西廂歌劇

あ、われいかにかせまし。

鶯々辭して歸らんとす。張生送り出づ。

「張生唱」五七

ゆたかなる色よにはひよ

はじめ見て我わづらひぬ

見ざるとき心さわぎぬ

相見てはいとも愛惜し

今宵この碧紗のとばり

立ち出で、何日また入らん。

紅娘は張生ををかしげに見やりつ、鶯々に随ひて去りぬ。

「張生唱」四五七五

はる風むねに湧き

あでやかまさる眉の色

しらたまくはし帛

世の常のものたくひかね

み空のきよき月

光はなちててらすなり

かんばせあざやかに

うすくれなるをみなぎらし

した、る嬌艶の

花のすがたのやさしさよ

きざはしおり立ちて

西廂歌劇

苔ふむ足もものうげに  
くつ尖ちひさくて

其いちらしさいやまさる

かなしき吾不才

いつか謝し得んこのなさけ

姫よわれをば永久に見すて給ふな。

あすの夜暇ぬすみ

夙くまた來れかならずよ。

第十四齣 堂前巧辯

張生鶯々相會ひてより月日多く經にけるが、此の日頃夫人は、鶯々の素振りのいたく前つ日と變れるを見て不審にたへざりしが、歡郎が前つ夜姉君は紅娘と花園に出で久しく室に歸り來ざりし由告げれば、夫人さてはと感づき紅娘を呼べり。紅娘夫人の召せるをき、先づ鶯々にかの事露顯しつらんと語れば、鶯々はたゞ御身よく妾を庇へよとたのみぬ。あゝ月にむら雲花には風の世なりけり。

(夫人鶯々紅娘登場す)

「紅娘唱」七八

夜はおそくゆき戻るは曉

かくて通は、歡樂盡きじを

第十四齣 堂前巧辯

西廂歌劇

姫があふせは妾が物思ひ  
たゞとく歸り遅くゆくべきを  
誰いくよさをあらはに寢させし  
夫人こゝろ疑ふかきに  
わが口いかで有るをば無しとて  
言たくみに云ひつくりろふべき。

「同」五七

夫人はかく疑はん  
貧書生みそか男ぞ  
姫君はかくし妻なれ  
婢女われ戀のなかだち

此の日頃とりわきて見る  
眉の色眸のくばり  
たぐふ可きものなきまでに  
衣をだにその着こなしの  
かはりきてなまめきたてる  
ふるまひの人目ひけるよ。

鶯々云ふ御身はわがために母君の前を宜きにつくりろへよ。紅娘云  
ふ、妾かならず責められん。

「紅娘唱」八六

つき副ひ見守る汝なに故

第十四齣 堂前巧辯

みだらなる方へわがひめ君  
さそひゆきしぞと責められなば  
いひとかすすべのなきものから  
たゞちに姫より答へ上げてよ。

姫君が責めらるゝは當然なり、妾は何も望まざりしを。

「紅娘唱」六四

繡のとばり蔽ひて  
うれしき夢さまく

このとき妾外の方  
苔の露のつめたく

鞋に透り滲むまで  
咳嗽だにせで立ちしが

けふ妾がこのやは肌  
手荒き鞭受けなん

あ、姫君よ。

戀のつかひ辛しな。

紅娘夫人の前に出でけるに、夫人はいたく怒り、夜毎に姫を誘ふは汝  
ならんとて問ひ詰むるに、紅娘まことを吐かんとせざりければ、杖を  
あけて紅娘をうちたゝきぬ。

「紅娘唱」六四

ぬひわざせる或る夜よ

針の手たきわれらは

しめやかに語りぬ

病やまひおもき兄君

人にかくれ訪はむと

夫人云ふ病を訪ひしとき彼の男何と云ひつるぞ。

かれはうらむ讐もて

恩に換ふる夫人おのがた

のぞみ消えし悲かなしみ

誰と共にかたらん

まづ去れよ紅娘

姫はしばし留めて。

夫人云ふ處女一人のこして如何にしたる。

「紅娘唱」四四

いかなる傳家の

祕方といへども

癒えざる病を

癒やすは一すぢ

二人がしたしみ

久しきむつごと



今さらあなぐり

問はでもきかでも。

〔同〕七五

二人が心うちとけて

深き憂の晴れたるを

夫人むげに水な注し

世の言ぐさにいはずやは

女長じて家にゐすと。

夫人大いに紅娘の罪を責め問ひけるに、紅娘にはかに容をあらため、二人が假のちぎりを結びしは、これ全く夫人の罪とこそ云ふべけれど、とて孫飛虎が兵を催して攻め來し時より夫人が張生に信を失ひし

縁由を委しく述べ、むしろ早く兩所をば眞の夫婦としたまへと、心をこめてぞ諫めける。

〔紅娘唱〕七七

文士の魁首女子のかゞみ

一人はひろし學問のみち

一人はふかし女紅の手藝

〔同〕七四

世に事なきをたよりに

ひかふるためしあるもの

白馬將軍たのみて

叛賊飛虎を討ちたる

恩ある人を仇とや。

「同」七五

一つかくれて一つ出る

あしたゆふべの二つ星

かくも二人を別ちなば

やがては家の恥となり

骨肉の名もけがれなん

これしも如何に夫人よ。

夫人紅娘の云ふ言をき、て熟々と考へしが、すでにかくなれる上は是非なし、わが家むかしより再び嫁ける女をいださず、家門のほまれを保たんには、むしろ鶯々を張生に許さんと心を決め、紅娘をして鶯

々を呼び來らしめぬ。鶯々羞がましきよと云ふ。

「紅娘唱」七七

柳のこすゑ月上るとき

しのぶ夜頃を云ひかはしたる

かの時妾ははづかしうして

かしらをそむけ袖をかみつゝ

ぬすみ見すればこはそもいかに

小さき鞋の底のみ見えて

しづごゝろなくよれつもつれつ

あゝ、

かの時いかで愧しからで。

西廂歌劇

夫人は鶯々にむかひて云ふやう、おん身まことに賤しきことしてけりな、さはいへ此を公の沙汰とせば、いよ／＼家門のけがれなるべし、もとこれ妾が罪より出でたることなれば、今さらなげか人も詮なし、已にかくなりし上はおん身を張生にめあはせん。紅娘よ張生を呼び來れといひければ、紅娘はかしこまりぬとて書齋にいたり、張生を伴ひ來らんとす。張生は此の事誰がもらしつるぞ、夫人に合せん面目なしといふ。

「紅娘唱」六五

漏れしからはすておかし  
名のりいでよされば君  
まげて夫婦と酒さかな  
とりならべて待つばかり

媒人なかだちひとなきもよし

見まもりすらうちすてし

われあるもの君はしも

早苗さなへにして秀でずか

あゝ、

見かけたふしの錫すずの錐きり

夫人張生に云ひけるは、御身おこなひが行まことに忌むべしと雖、今となりては已むことを得ず、鶯々は御身が妻と定むべし、たゞわが家世々無官の女壻ありしこと無ければ、御身また速に都に上り、試験に應じて官を得て歸り來よかし、御身が妻はその時までわが家にあづかり養はん。

「紅娘唱」六五

思遂げていちはやく

ひそみし眉のびやかに

わきたちくる<sup>よろこび</sup>歡に

はれてふたり立ち並ぶ

先生見られよ。

玉の<sup>おちて</sup>面花のかほ

君よりそひ愛<sup>め</sup>でよかし。

夫人云ふ明日行李を整へ酒肴を携へて長老と共に張生が首途を十里の長亭に送らん。寄語す西河堤畔の柳青眼を安排して行人を送れ。

(夫人下場す)

「紅娘唱」七六

歸り來ん日の晝堂の中

簫鼓のどかに春永き日

鸞鳳つばさならぶるとき

はじめてうけんこゝろ盡し

はじめて<sup>く</sup>酔まんめでたき酒。

第十五齣 長亭送別

時すでに秋の末つかた、今日はこれ張生が京に上る首途なれば、夫人長老たち早く十里の長亭にいたり、送別の筵をと、のへて待つ間程なく、張生鶯々紅娘たちまた後より来りぬ。―悲歡聚散一杯の酒南北東西萬里の程。

(夫人鶯々長老張生紅娘登場す)

鶯々唱「七五」

碧雲の天黃花の地

野分<sup>のひき</sup>すさびて雁<sup>かり</sup>わたる

曉かけて見わたせば

山のもみぢば誰<sup>た</sup>が染めし

離人の涙なかくに  
しぐれとこそは降り<sup>ふ</sup>にけめ。

同「五七五」

遅くあひはやく別る、

このうらみ

青柳の糸も行く駒

つなぎかね

落つる日を行く<sup>て</sup>の林

さへぎれよ

馬あゆみ車はいそぐ

あぢきなや

西廂歌劇

しのぶ戀のがれ得たりと  
思ふまに

かれぐの別離のなげき  
せまるはや

いざ、らば行かんの聲に  
胸をどる

ながめ入る十里の長亭

はるぐと

肌やせて金銀ゆるむ

あ、かなし

このうらみ誰か知るらん

あ、かなし。

紅娘は鶯々が今日は常の日に似ず粧せざるをいぶかしみ問ふ。鶯々云ふ御身いかでかわが心を知らん。

「鶯々唱」四五

車よ馬よとて

さわげる聲音こゝろには

心もいらだちて

おちるぬわれいかで

しづかに顔つくり

した、る嬌艶の

すがたを爲し得むや

夜のものと、のへて  
ひねもすうつくくと  
ねむらばよからんを

今日よりわが袖は  
涙にひま無けん

もだえにもだえつ、  
わが夫が書信をのみ  
せめてのたのみなる。

夫人は張生をはけまし、京に上りなば必ず狀元に及第して歸れかし  
と云ひ、張生またこれを誓ふ。長老は傍より先生が及第は疑なしと  
云ふ。鶯々はたゞ深き息をもらすのみ。

「鶯々唱」〔六六〕

野分吹きて木の葉を捲き  
烟なびく枯草の野  
しき設くる酒席の上  
かげさびしくかたぶき坐し  
死の迫ると眉ひそむる。

「同」〔七五〕

君や涙もあるべきを

西廂歌劇

人に恥ぢてや押しかくす  
はしなく出會ふ二人が眼  
あわて、顔をうつむけつ  
悲しき息をのみこみて  
襟もとかろくかき合はす。

「同」七四

永久とほの別れにあらねど  
この悲かなしみのえ耐へず  
酔ひしれしごとなりゆき  
身はいや細るこのごろ。

夫人は鶯々に命じて張生に酒を斟がしむ。

「鶯々唱」四六

合歡つきせせずして  
離愁はあとにつゞく  
さきつ日ひそめし戀  
よべよりはれて夫婦めをと  
今日はや別離に泣く  
いく日の戀のなやみ  
離別の苦き味に  
たぐへん方もなしや。

「同」七四

遠離をえりのかなしみ知らずて



西廂歌劇

たやすく戀人棄てゆく

かの抱擁の頬すり

手に手牽きあふたのしさ

君や今みな忘れし

崔家の婿となれ、ば

おのづと位はそなはる

二人したしみくらさば

かたきをしのび都に

折らん桂も物かは。

鶯々は未だ朝食さへとらずありければ、紅娘はせめてもと一碗の汁をす、めしに鶯々はこれをも卻けぬ。

「鶯々唱」七五

いそがす餉あぢきなし

しばし相見て別れんを

いま此の筵母のまへ

へだて心の要らざらば

思ある身は君がため

女房ぶりにかしづかん。

同「七四」

しばしとはいへわれ等は  
かれいひとともにまゐらん

いにしちぎりのまぼろし  
とめてそれぞとおひゆく  
こゝろはせめて石とも  
化るらんわが夫せしたひて。

紅娘は夫人の命によりてまた酒を斟ぎぬ。

「鶯々唱」「三三」

酒や飯いひや

土つちと泥どろを  
かむに似たり

土は土の  
泥は泥の  
味もあるを

同「四八」

玉杯あた、かき酒も  
冷えたる水にさも似たり  
おほかた相思の涙よ  
目さきにならべるくひもの  
ふさがるむねに入らんやは

微ちひさき名利追はんため

雙つがひの鴛鴦をしは分たれて

かなたところなたのふたみち

かはすはくるしき長たの息い

別離の杯事も濟みたれば、夫人は座をたち車にのり、鶯々紅娘たち後より來れよと云ひのこして先づ歸りゆきぬ。長老また張生が前途を祝ひ、且つ目出度結婚の日を期待してわかれ去りぬ。

(夫人法本下場す)

「鶯々唱」七七

しばしがうちに杯盤みだれ

車はひがし馬は西へと

わかれてもなほ意こころさまよふ

夕日かたぶき山はくすぶる

今宵の君がやどりはいづこ

夢にも難し君たづねんは

鶯々張生に向ひ、此の度都に上らばよしや不幸にして官を得ざればとて、必ず歸り來給へと云へば、張生は必ず狀元を得て歸らんと答ふ。鶯々一首の詩を贈りて曰ふ

棄擲今何在 當時且自親

還將舊來意 憐取眼前人

張生云ふ、疑ふ勿れ、われ更に誰をか戀せむや、わが心かくの如しとて

西廂歌劇

又一首をかへす。

人生長遠別 孰與最關親  
木遇知音者 誰憐長嘆人

鶯々唱「四七」

紅涙襟をつたひて  
兩袖しほりもあへず  
わかるゝ西とひんがし  
旅程に踏み入らぬ先き  
はや問ふ歸來は何日と  
わが眼のとゝかぬあなた

千里のみちゆく人よ  
生前一杯つくせ

飲まぬに心は忍ひて

眼は血涙しきり

膽はたくづをれつぶる。

同「五五」

都地の水がはり

旅路にて食がはり

時をりにふさはしく

身大切にまもりませ

西廂歌劇

露しげき村旅籠はたご

早うこそ寝ぬべけれ

霜ふかき里の宿

遅くこそ起つべけれ

秋風は旅ごろも

ひや、かにふきかへす

ひたぶるに氣つけませ。

同六七

あ、憂愁たれにかたらん

うき思はわれ知れるのみ

やせおとろへ神かへりみず

黄河の水涙にあふれ

華岳のみね恨にひくし

日くる、頃西樓に倚り

眺めやらん古道のほとり

ながき堤つみかれたる柳。

同七六

笑みて來し道泣きて歸る

歸らば閨の羅幃のうちべ

繡ひらのふすまに香たきこめ

春をとゞめしよべしのばん

西廂歌劇

翠被こよひのうら寒きは  
君がかりねの夢に知らん  
ひきとゞむべきよすがもなく  
馬上の人と見つ見られつ  
おさへかねたる涙の雨。

張生云ふ御身尙云ふべきことありや。

「鶯々唱」四六

文運つたなしとて  
さのみは悲まざれ  
新にめとらんこと

今わが心が、り  
たまづさ忘るな君  
われまたたよりせんに  
金榜名は懸けずも  
ちかひて歸れや君  
この言ゆめ忘るな  
異郷の花よしとも  
こゝにて君せしごと  
かしこになあこがれそ。

張生云ふ世に御身の如き女はあらじをわれいかで邪念を起さむや。

「鶯々唱」七三

山ゆく人をへだて  
 こゝろなき哉疎林  
 淡烟暮靄こめて  
 夕陽古道さびし  
 風に黍の葉さやぎ  
 いなゝく馬の秋か  
 車に乗るもつらし  
 來るときはやき轍わだち  
 歸り路何ぞ遅き。

紅娘云ふ、夫人去り給ひてすでに久し、姫君にも夙く歸りませ。

「鶯々唱」六五

四方よもの山べうすれゆき  
 夕日の中鞭ひゞく  
 胸にひしと満つなやみ  
 積みきれんや此の車。

(鶯々紅娘下場す)

張生は琴童をしたがへて寂しき旅路につきぬ。涙は流水に随ひて  
 急に、愁は野雲を逐ひて飛ぶ。

第十六齣 草橋驚夢

張生は琴童を伴ひ、馬の歩みもにぶりがちなるを急がせつゝ、早くも蒲東より六里ばかりの道をたどりぬ、行くての方なる驛は草橋と呼べるところなり。

「張生唱」五七

ながむれば夕の雲の  
たれこむる蒲東の御寺  
落葉する森うらがなし  
馬遅く人はものうく  
わたる雁な、めにとびて  
風さむく離恨のなみだ

せきあへぬ首途かどの夜かも。

張生は過ぎし日の歡樂に比べて今日の淒涼を詫びぬ。

「張生唱」六七

翠被のうち薫する蘭麝  
身をすべらし枕そばだて  
つくぐ見しうれしの姿  
雲にまがふ黒髪しきて  
玉の小梳斜めにさせる  
中空なる三日月かもと  
見惚れたりし昨日戀しや。

主従やうやく一つの旅宿にたどりつき、今夜はこゝに宿らんとて、よ



き室ひとつ擇びて入りしが、張生は胸ふたがれる心地して飲食もせず、直ちに夜具を展べて身を横たへぬ。琴童もまた疲れたればとて張生が床前に眠りけり。

「張生唱」七五

枕ひとつの旅のやど  
愁にしづむ人あるを  
なほしもすだく蟲のこゑ

うなるや風に窗の紙  
聽いて睡眠に落ちつゝも  
夜具の薄さにまた醒むる

いつ暖まるわが衾。

張生つひに深き睡眠に入りぬ。

かゝるとき鶯々は張生がことを忘れかね、ひそかに後を慕ひ來ぬ。

「鶯々唱」四六

さびしき荒野たどり  
怯えに胸ときめき  
急げば呼吸せまりく  
ありかをさぐらんまで  
後追ひ追ひすがらん。

「同」五七

わが胸のはりさく思ひ

むづかしき母が眼を避け  
そば去らぬ侍女を賺して  
はる／＼と遠みちはしる

馬ひきてためらひつゝも  
哀別のしほれ姿を  
思ひ出でわが心まで  
くら闇にまろぶが如し

君は西われは東と

別れきて日の傾けば  
うきおもひ潮とわきて  
うつせみの身の瘦しるし  
人を送りまだいく時も  
過ぎざるにもすその褶の  
三四條ひろく覚えぬ  
かゝること誰かあり經し。

「同」  
「五七」

妹よ春と語らふ間なく  
功名は二人をへだつ  
耐へがたき戀のなやみを

西麻歌劇

のがれてもまた換りくる  
くるしみを拂ひもあへず。

「同」〔六六〕

霜きよらに碧波は澄み  
落葉の上白露むすぶ

おりて上りのぼりて下り  
まがりくねる野路ゆけば  
みぎひだりに風ふきまく  
われひたすら急ぎはしる  
きみ何處に眠り在す。

鶯々立ちとゞまり耳そばだつ。

「張生唱」〔六七〕

旅のやどりひとりさびしく  
ものも云はで思にふける  
夜の長さは年の如くに  
暮の雨に蟲鳴きしきり  
曉の風に月かげさびし

わかれの酒さめんはいづこ。

鶯々店前に至り、ひそかに門を敲けば。張生女の聲するをいぶかし  
み如何なる者の来りけんと、みづから立ち出で門をひらけば、鶯々す

らりと室内に入りぬ。

「張生唱」五五

人ならばとくかたれ

鬼ならば夙く失せよ

鶯々云ふ、妾なり、あまりに君の戀しさに、母ぎみの寢いきをうかゞひ  
逃れ來ぬ。

かく聽きて香になづむ

衣の袖とりすがり

さては人いとし妻。

かたじけなき御身が心勞。

「張生唱」六五

汝がたもひの一徹に

衣のやぶれものとせず

繡なひの鞋くつは泥まみれ

足のうらも傷いためけん。

鶯々云ふ、君がためには遠き路も物かは。

「鶯々唱」七七

眠らず食はずうつらくに

おもひにやつれ過ぎし思へば

散るとも咲ける花こそまされ

ひるはひねもす夜はよもすがら

西廂歌劇

われこひす驕わこりや何ぞ

たゞ君と

生けるとき同じふすまに

たゞ君と

死なるときひとつの穴に。

此の時一人の兵卒松明を燃しつ、店前に來りて、今ひとりの處女河を渡りて此の店に入りたるを見たり、とくその處女を出せよと叫びぬ。張生この聲をき、驚きしが鶯々少しもさわがず、自ら立ちて門を開きぬ。

「鶯々唱」七七

憎くや普救寺かこみ騒がし

劍つるぎぬきつれ人おびやかす

心きたなきたはけ痴しれもの者

張生われ出で、應對せんと云ふ。

物のたまふな後にすさりて

兵卒云ふ、夜半に河を越え來れる汝は誰が家の女むすめぞや。鶯々云ふ、汝なに言ふか。

杜將軍の名汝も知らん

かのすぐれ人目むき手あげば

鹽にとろくる蛭ひるの如けむ

今ぞ白馬にまたがり來ます。

兵卒たちまち鶯々を奪ひ去る。張生おどろき鶯々が名を呼びつ、

寄りそひなれし君たびに遣り  
ひとりぬる夜の冷きふすま  
雲はさへぎるまどかなる月  
いづれ悲傷の種ならざらん。

「同」五、五七

人の世は

離別こそいとくるしけれ

いとほしや

獨りゆく千里關山

かくばかり

斷腸の思せんより

恩愛の

ちぎりとくたゝんに如かじ

月の缺け

花の散るたゞ一時よ

かざし折れ

瓶おちて永久にかへらす

かならずよ

このわかれ月花にして

すぐれ人

西廂歌劇

われこひす驕おごりや何ぞ

たゞ君と

生けるとき同じふすまに

たゞ君と

死なるときひとつの穴に。

此の時一人の兵卒松明を燃しつ、店前に來りて、今ひとりの處女河を渡りて此の店に入りたるを見たり、とくその處女を出せよと叫びぬ。張生この聲をき、驚きしが、鶯々少しもさわがず、自ら立ちて門を開きぬ。

「鶯々唱」七七

憎くや普救寺かこみ騒がし

劔つるぎぬきつれ人おびやかす

心きたなきたはけ痴しんもの者

張生われ出で、應對せんと云ふ。

物のたまふな後にすさりて

兵卒云ふ、夜半に河を越え來れる汝は誰が家の女むすめぞや。鶯々云ふ、汝なに言ふか。

杜將軍の名汝も知らん

かのすぐれ人目むき手あげば

鹽にとろくる蛭ひるの如けむ

今ぞ白馬にまたがり來ます。

兵卒たちまち鶯々を奪ひ去る。張生おどろき鶯々が名を呼びつゝ、

琴童に抱きつきしが、琴童のことばにて始めて目さむれば、たゞ是れ一場の夢なりけり。扉を推して外の方をながむれば、曉の明星ひかりつゝ、残月明かに地上の霜を照らす。

張生唱「五七、五六」

なよ／＼とふりすてがたき

青やぎは牆のあなた

しん／＼とふけゆく夜半に

門とちて秋氣満てり

はらく／＼と風ふくたびに

落葉して梢さびし

さら／＼と雲間をもれて

まどに入る月すさまじ

同「五七」

めさむれば竹影ゆれて

龍蛇夙く走るに似たり

春やむかし胡蝶の夢の

飄々とあへなきおもひ

機織の間なきかこち

小夜砧かすかにひやく

むねを刺すわかれの傷

よき夢の醒めてくやしも



西廂歌劇

くさまくらさびしき宿に  
いとせめてまさる戀しさ  
あでやかなの姿はいづこ。

や、ありて夜もほのほのと明けそめければ、琴童の勸に従ひ、はやくも用意と、のへて、旅宿を後にたち出でぬ。

「張生唱」七五

やなぎの枝の細ながに  
垂れてからまるわが情こころ  
誰がむせぶらんいさ、川  
下ゆく音のかすかなる  
消えなんばかり消えもせぬ

斜月殘燈ほのかにて

舊ふるき恨の盡たきすして  
あらたに愁うれひこりむすぶ  
離苦のなやみに塞がれる  
肺腑ひらかん由も無し  
紙と筆とを舌に代へ  
か、ばかきなんわが思  
たれに語らんわが思。

第十七齣 泥金報捷

張生京に到りつき、日夜學問をはけみし効ありて、此の頃遂に探花郎に及第し、今は皇上の賜官を待つのみとなりしが、鶯々に別れてより已に半歳を経にければ、わが近況と共に及第の喜を傳へんものと、琴童に書信一封を托して、急ぎ河中府に向はしめんとす。

「張生唱」〔五七〕

見ぞめし日緑の苔に  
はら／＼と花は散りしを  
別れし日落葉の音を  
さら／＼と鶯もつにこめしを  
梅の花けふ咲く見れば

ゆくりなく半載は經ぬ

張生云ふ、わが言傳必ず忘るな。

ことさらに遣る書信ふみなりと。

（張生琴童下場し鶯々紅娘登場す）

鶯々張生を送りてより、日毎に京の消息を待ちけるが、已に半載を経れども未だ何の音信も無ければ、身も心もいよいよ細り、深き憂にしつみ居り。

「鶯々唱」〔四六〕

眼の前離れ去りし  
悶もたえは心になほ  
心にあるがまゝに

眉にもあらはれ出づ

忘れて忘れあへず

はてなき思するよ

みじかき眉のあひだ

多くの顰ひそみの皺

などてか容れ得べけん

舊愁とゞまれるに

新愁またせめきて

いづれかそれと分かぬ

ふるきは太行山

隠々ふかく閉し

新しきは天塹の水

悠々きはまりなし。

紅娘云ふ、姫ぎみ此の頃の御なやみ、前つ日とはいたく異なるかな。

「鶯々唱」五五

前つ日の瘦せほそり

いつもまだよかりしを

このたびのはげしさや

紅娘云ふ、姫君よ、遠近の景色ながめて憂をはらし給へ。

西廂歌劇

何處いづこかもわが憂うれひ

晴らさんは忘れんは

妝樓むらさきに獨り居て

珠簾たますだれたかく巻き

玉鈎たまかぎにかけとめて

見わたすもあだなりや

山水さんすいのたゞすまひ

蒼烟そうえんは樹じゆに迷ひ

かれ草くさは目めにあまる

田舎路いなかぢの渡し舟

人ひとなくて横よこたはる。

鶯々云ふ、この頃妾が衣のいよく、裕きを覺え初めぬ。紅娘云ふ、それこそ細腰衣に勝へずといふなれ。

「紅娘唱」七五

もすそは紅く花もえて

まくらの痕の頬ほにのこる

むねにむすべるかけ香かぢは

芙蓉はすの扣かけひもおほひけり

つらぬく珠たまの糸いとぬけて

しめりがちなる香羅あやの袖

楊柳やなぎの眉まゆひそみては

秋の花あきのはなより人ひと瘦すくせぬ。

西廂歌劇

琴童は都の音信をたづさへて、一月あまりの日を閲し、漸く河中府にいたり着き、夫人に見えければ、夫人もいと悦び、はやく鶯々にも知らせよと云へば、琴童みづから鶯々の室にいたり、鶯々紅娘に會ひて張生が言傳をのべ、携へたる書信をわたしぬ。

「鶯々唱」五六

きみがため瘦するわが身  
わりなくも書信おこして  
わがなげき増さんとする

身は來ずて書信のみ來る

言なくかしらを垂れ

書信を手に涙熱し。

鶯々書信を開きぬ。

「鶯々唱」七七四

われ開くとき

涙にひらく此のふみ

君書きしとき

涙に書きし此のふみ

或は筆を

おろさぬ先の涙か

紙に、じめる

涙のあとのありく

君が涙の

にじめる痕につけんよ

わが新しき

涙のあとをかさねて

一重の愁

かくて二重となりなん。

書信に曰く、

拜啓暮秋拜別して己に半載を經候ところ、今度幸にして甲第に中  
り申候、これひとへに祖宗の蔭賢妻の徳に因ること、深く感佩仕  
候、目下招賢館内に在り謹みて任官の御沙汰を待てる所、夫人  
賢妻の憂念せむことを恐れ、特に琴童を遣はして急報せしめ候、小

生身遙かにして心邇く、常に同棲を得ず、功名を重んじて恩愛に薄  
く、淺見貪饕の罪は他日面會の上萬謝致す可く候、偶成の一絶御清  
覽に供し候。

玉京仙府探花郎 寄語蒲東窈窕娘

指日拜恩衣畫錦 定須休作倚門妝

鶯々云ふはづかしや探花郎は第三番なり。

「鶯々唱」五六

西廂の月のかげに

ひそみたる人は今や

瓊林の宴にぞゆく

西廂歌劇

思はんや東の墻

こえたりし其の足もて

鰲頭を占めなんとは

花惜む心つひに

桂折る手ならんとは

脂粉にも錦かくる

この後は晩妝樓

改めん至公樓と。

琴童まさに京に歸らんとして鶯々の返書を請ひければ鶯々すなはち一封の書信をした、め、且つ汗衫はだぎ一領裏肚はらまき一條絹襪たび一雙瑤琴こと一張玉簪かんざし一枚斑竹ふで一枝を添へ贈り、別に琴童に銀十兩を旅費として與へぬ。紅娘問ひて曰く張先生都に在りて此等の物は自ら有ち備へ給

はん、さるに遙々と贈らんとは如何なる理わけにや。鶯々云ふわれ其の故を云はん。

「鶯々唱」〔六八〕

此の汗衫はだぎは人まろびねの夜

われと共にぬるところしほ偲しのべ

肌につけてわする、時なく

紅娘云ふ、此の裏肚はらまきは何のためぞや。

身をはなれず常に君まもる

胸のもとにかたくつきあれば

紅娘云ふ、此の襪たびは何のためぞや。

よからぬみちゆくをとめんとて。

西廂歌劇

かしこにも琴は有り、この琴を贈るは何のためぞ。

「鶯々唱」四八六

はじめは五言のからうた

おもひをひき

その、ち七絃の琴に

妹脊ちぎる

かの詩人はおほろかに

いかでかせん

この琴弾く手のうときを

われは怕る

紅娘云ふ玉簪は何のためぞ。

かんざしこれこそ由あれ

いましめごと

功成り名遂げてそがひに

われおくなと

紅娘云ふ斑竹は何のためぞ。

いにしへ湘水の秋

つがひはなれ

なげきし妻の涙にて

斑をなしつ、

九嶷の山におふといふ

その竹これ



いまわが袂のにじみも  
おなじくして。

「同」九四

おなじ涙の痕

にじみて

斑かとしもなりにける

あ、これ

むかしいまかはらぬ

うれひぞ

やるせなくこひしく

したはし

みやこの人によく

つけてよ

いにしへなわすれそ

ゆめにも。

琴童は贈物の品々を調べ收めぬ。

「鶯々唱」七五

夜ごとのやどり注意こころして

枕まくらとしくな此こゝの包つみ袱み

油あぶらのけがれ術わざなけん

雨あめにぬるともしぼらざれ

乾かわかば皺しわとなりなんに

とりをさめてよ心して  
ひとつくをあやまるな。

「同唱」四七

やる文今成りぬれど  
ひかる、情はてなし  
長安くもはるかにて  
西樓ながめやる方  
人無く水たゞ流る。

鶯々琴童に云ふ御身主人のもとにいたらば斯く告げよ。

「鶯々唱」七三

きみわが爲めに愁へ  
われ君がため瘦せぬ  
別れし時の言ことば  
たくみに妾をすかし  
菊の節には來んと  
かくて小春は過ぎつ

今こそ悔ゆれ夫を  
つかさもとめに遣れる

琴童は鶯々に別をつけてまた京の方に上りぬ。

第十八齣 尺素緘愁

張生は早く官を得て京を去らんことを希ひしに、はからずも翰林院の編修官を授けられければ、已むことを得ず京にとゞまり、もはや二個月を経たれども、琴童いまだ歸り來ず、憂鬱して病を發しければ、暇を乞ひて、京に程近き驛の客舎に病を養ひをり。大醫院の醫師病を診て藥を下したれど、この病もとよりいかなる名醫も癒やし得べくも思はれず。

「張生唱」七七

京みやこに來ては焦る、おもひ  
あさな夕なにいやまさるのみ  
胸に横ほる我鶯々よ

醫師くすし脈みてつばらに云はく  
この病こそしかぐなれと  
もどかんことのすべなきまで。

「同」八六

おほむね病は藥あれど  
戀病まよひむ人には術も無しと  
こひにいたづくを妹の知らば  
甘んじて死なん死なんよわれ

四海に家無くさすらひの身

指かゝなふればまた半年。

琴童は驛の客舎なる張生のもとに歸り來ぬ。

「張生唱」「六六」

花の木の間かささぎ啼き

垂れしみ簾にうれしき蜘蛛

短檠の火何事をか

知らせがほに爆くる時

歌にやある詞にやある

張生琴童より鶯々が書信を受取れり。

涙にくれかきしふみか

おほひがみのにじみて見ゆ。

書信に曰く

なつかしきわが春の君の御ふみ拜誦いたし候、したはしさの心にてはこの半年も三秋の長きにまさり、日近く長安遠しと古人の云ひけんも、身にしめて偽ならずとおほえ候。このたび琴童御ふみをつたへ、始めて及第の喜を知り、離別のかなしみ少しく和ぎ申候。かつうれしき御言をたまはり、今はた何をか申しさふらはん。

琴童歸りを急ぎ、委しく申上ぐる暇なきまゝ、こゝに瑤琴一張、玉簪一枚、斑管一枝、裏肚一條、汗衫一領、絹襪一雙を具し御前に進めさふらふ。ねがはくは微志を諒し御笑納くだされ度候、尙くれぐれも御身御珍重祈上り。左に御來韻に次したる一絶はづかしながら御清照に供し候。

関千倚遍盼才郎 莫戀宸京王四娘

病裡得書知中甲 窗前覽鏡試新妝

張生云ふ、あゝ我妹子が心かくありせば、われ死すとも恨あらず。餘事はさておき。

「張生唱」〔七六〕

書家にふさはし銘かきつけ  
世にきこえたる顔柳王  
張家の人も今ふりたり

よき人よき字よき才學  
わが鶯々は世に二あらず。

「同」〔六七〕

呪經のごとつ、しみ持せん  
符籙のごとつ、しみ受けん  
高く重くたふとき文よ  
この文の上花押だにせば  
つかさ人の除目とも見め

これぞやがて印押しあへぬ  
時かぎれる赴任の辭令。

張生は汗衫に目をうつし其の針のあとに感じぬ。

「張生唱」〔四七〕

汝をし愛まざらめや

針もつわざに氣を吐く  
さま／＼こゝろづくしは  
一針一針ごとに  
いよ／＼思ひ知らる

その丈はかるかたなく  
ひろさもさだめかぬるを  
ひたすら心にとひて  
腰肢に似つかしめたり  
よしあしためし得ざりしも

おもふに小さき胸の  
このためいかに傷みし。

張生云ふ、姫が贈り來れる品々の意はわれよく知りぬ。

「張生唱」五五

琴や何門とちて  
樂の音にしたしみて  
聖賢の徳をつみ  
耳洗ふ巢由の  
如あれの意かも。

「同」七四

笄なせる玉簪

西廂歌劇

ましろき色は葱なぎの根  
温潤にしてきよらに  
いさぎよくして瑕きず無し。

同「五六」

斑管は霜を経たり  
鳳凰の棲めりし枝  
點々と何のまだら  
舜帝をなげきし人  
のこしたるなみだのあと  
わぎも子の今のこゝろ。

同「七五」

この裏肚よ綿もちて  
燈下いくたびいとくりし  
秘ひめし愁をあらはして  
おのづと知らる胸の底。

同「六四」

この襪はよはこべる  
針のいともこまかに  
絹のきれもつやあり  
禮知らばいかでか  
まがれる道ゆくべき  
妹がねがひかくのみ。

第十八齣 尺素緘愁

西廂歌劇

張生琴童に鶯々が言傳を問ふ。琴童云ふ舊き情を忘れて新しき戀したまふなかれと言傳給へり。張生云ふあゝわが心を知らざるよ。

「張生唱」〔六六〕

しんくたる客舎のうち

風さやく雨しとく

さそふおとにしたゝるこゑ

夢さめては傷む心

「同」〔五四〕

身の力ゆるみぬ

いとせめてこひしき

蒲東なるみてらよ

なつかしやゆかしや

わぎ妹子が言傳

このほかに何ぞや

琴童云ふこのほかには何の言もなかりき。

つかさびとのさかしき

みやびをのそれがし

舊き花とらじよ

舊き枝折らじよ

われこゝに來てより

遊里の灯に遊ばず。



同「六七」

宰相の家婿えらみして  
花のすがた汝に似たる女の  
あるはあれどこゝろかしこく  
しとやかなるわが鶯々は  
くらべんものたえてなくよし  
かりそめにも忘れぬやも。

張生は琴童をして贈物をとりにかたづけさせぬ。

張生唱「四九」

書齋の

藤の箱かたむけて

中には

紙二三枚敷き

置くとき

その刺に氣をつけ

絲をば

ひきかけ破らざれ

衣桁に

かけなば風吹きて

色澤

やがて褪せもやせん

包袱に

西廂歌劇

おきなば皺よらん

まもりて

ゆめなほざりにすな。

「同」七五

新婚の夢つかの間に

功名を追ひはるくくと

こ、長安の都地に

蒲東の御寺思ひ出る

その秋の夜もうれしくて

桃李花さく春風や

今日春ながらうれひあれば

桐の葉おとすさよしぐれ

心は近く身は遠し

たちゐひまなき物思。

「同」六六

天と高く地と厚き

わがまごゝろ海は枯れて

石たゞるとも止むべきかは

燃ゆる蠟は灰となりて

墮つる涙はじめて止む

老いし蠶死にのぞみて

西廂歌劇

糸吐くことやうやく止む  
わがこひはも世のたはれ男  
めをのちぎりかろんじつ、  
なかたえんに似るべくなし。

同「七五」

犬のおとづれ遠ざかり  
御溝の紅葉ながれこず  
一枝の梅花南より  
贈る使もあらずに  
孤身はなる、三千里  
歸心一日十二時

江聲かよふ欄に  
凭りてながむる四方の山  
色さまざまに暮れてゆく。

同「七八」

かなしと云へばわが病悲し  
うれしと云へば汝が來しは嬉し  
こゝろ引きたつ佳き書信もちきて  
あやふくもわれこひに死なん時

第十九齣 鄭恒求配

先に鶯々に許嫁せる従兄鄭恒は、河中府より早く来て共に柩を扶け送れよとの音信を受けたれども、折から家事にとらはれて身を起すに由なく、空しく數月を経て、はじめて都を後に旅路に就き、河中府に至りて一軒の旅宿に行李を卸しぬ。こゝにて前つ頃孫飛虎が鶯々を擄りて妻にせんとしたる時、張君瑞と呼べる秀才此の賊を退け、遂にまた鶯々を君瑞に許嫁したりと聞きしが、張生今亦都にて甲第に中りたる噂をき、心おだやかならず、兎に角叔母上に見ゆる前、先づ紅娘を此の宿に呼び寄せて、形勢をうかがひ思案を定めばやと、人を遣はして紅娘をまねきけるに、程なくして紅娘夫人の許を得て鄭恒を訪ね來ぬ。さて紅娘は何故に直ちに夫人に見えぬやと問ひける

に。鄭恒答ふるやう、われ直ちに叔母君に見えざるは聊かはづかしき事のありてなり、いまわが叔父上の喪期も過ぎたれば、早く吉日を擇みて祝言の杯をかはさんことを願ふ、さもなくば共に柩を奉じて旅せんはをかしからむ、御身わがために宜き計らひを爲せよ。紅娘云ふ、姫君はすでに張君瑞と云へる人の夫人なり。鄭恒云ふ、そは道理無きことなり、一馬何ぞ雙鞍を置かんや、わが父母は已に在さざれど、いかでか叔母君たやすく前約を食むことを得ん。紅娘云ふ、さな云ひ給ひそ、孫飛虎が攻め寄せたる時、若し張先生在らざりせば、姫君今は賊人の手に落ちたらん、さらば君何處に姫君をたづぬべき。鄭恒また云ふ、彼が如き貧書生の妻とせんよりは、某の如き仁慈にして且つ財産ある者に與ふるこそ當然なれ、まして婚約さへあるに非ずや。紅娘云ふ、なに、張生君の如くならずとか、おだまりよ。

「紅娘唱」四七

君よく仁慈をてらひ  
またよく富めるをたのむ  
よし君これよりいよ、  
官位の進みたりとも  
重ねて縁は結ばじ  
ましてや媒なかつちも無く  
結納むすなはた送らずに  
旅衣とくくやがて  
入婿とはあつかまし  
よごれん姫が金屋

けがれん姫が綉襦。

「同」七五

月を掠むる雲の鬢  
色香ゆかしき花のかほ  
雲となりはた雨となる  
風情もすべてつぶれなん

三才おこり二儀分れ  
清すめるは上に天となり  
濁れるは下に地となりて  
人其間にまじるなり

君瑞清き君子にて

鄭恒濁る小人か。

鄭恒云ふ彼一人していかで賊を退け得んや。

「紅娘唱」七四

河橋まもれる孫飛虎

蒲東の民を掠めて

兵五千寺門に

氷の刃横たへ

鶯々出だせゐてゆき

妻とせんにと呼ばゝる。

鄭恒半萬の賊は張生一人にて如何に退けたると問ひければ、紅娘は

張生が夫人の頼に依り、白馬將軍を請ひ來りて賊をやぶりしより、鶯々張生が婚約せしに至るまで具に語りきかせぬ。

「紅娘唱」七六

洛陽才子筆つたなく

急ぎて書信を遣らざりせば

白馬將軍來しころほひ

すでに烟ときえつらん

夫人姫も心ゆるす

威ありてしかも猛くあらず

言いで、また信あれば

西廂歌劇

このためあへてあなどられず。

鄭恒云ふ、われかつて其名だに聞かず、汝ことさらに彼が才能を誇張して云ふならん。紅娘云ふ、悪口いはずにまづわが言をき、給へ。

「紅娘唱」〔六五〕

性理の學詞賦の才

尙古人と比ぶべく

道を識りて人柄よし

わが家の人信あり

受けし恩は報ゆべし。

鄭恒云ふ、汝如何に云ふとも、彼は我に比べもならじ。

「紅娘唱」〔七五〕

一人のねうち君あらば

彼はかならず百あまり

十にあたらん螢火を

いかでくらべん月の影

高き低きはいはずして

文字析きわけて君がため

そのすみにごりさだめせむ

此の小婢何の字謎ぞ、よしまづ語れ。

彼や肖字に人立てり

君や寸木馬戸巾

〔肖字に立人は即ち肖にて男女を論せず、すべて其美貌をいふ〕

鄭恒云ふ、寸木馬戸巾は即ち村野屈ならずや、我は相國の家柄にして無官の彼とは比べものならず、窮士は窮士、役人は役人、一つにせられて堪るものかは。

「紅娘唱」三六

彼は師友に憑り

君子本を務む

君は父兄に倚り

きつね虎の威借る

貧は妨なし

徳に民なづけば。

「同」五八

云ふ言理に似て理ならず

官の家只官人と

ほざきたり口の動くま、

窮民は永く窮民か

知らざるか將相多くは

寒門に出でたるためしを。

鄭恒云ふ、この度のこと、みなかの法本賣主及弟子坊主等の計らひなるべし、われ明日彼等に談判せん。



「紅娘唱」七六

かの世すて人慈悲を本に  
方便はたゞみちびく門

くされ眼まなこに人見わかす

わざはひのかどひらくか君。

これ叔父上の云遣しおかれしことなれば、近き日に多くの禮物をと  
ゝのへるゆきて、叔母君のせんやうを見ん。

「紅娘唱」四六

あらくれいやしくして  
わからじ妻めかけのいとしさ

入婿しひてのぞみ  
ひたすら婚事いそぐ  
ちぎりはいかで成らん。

鄭恒云ふ、若し叔母が背ぜざらば二三十人の若者に吩咐けて轎をか  
、せわが宿につれ來り、衣服ぬがしめ追ひもて來て、一人の婆として  
還し呉れん。

「紅娘唱」七五

鄭家の公子ふるまひは  
飛虎が手下に劣らずや  
ことば行おこなひ下りはて  
家にもかへりがたくこそ。

西廂歌劇

鄭恒云ふ、汝思ひのまゝの言ぬかせ、われ明日必ず娶らん。紅娘云ふ、めとられず。

「紅娘唱」四四

佳人は美男に  
心を寄せたり

君こそ可笑しや

言はじとすまへど

咽喉までいでくる。

鄭恒云ふ、われ聽かん。紅娘云ふ、その醜き顔は。

韓壽が風下

餘香を偷むか

何郎があまりの

粉塗るこそ

汝には應はめ。

(鄭恒紅娘下場す)

鄭恒は速かに鶯々と婚姻を結ばんものと思案をめぐらしけるが、翌朝にいたりて崔家を訪ね、夫人に見え、わが思ふ所を申し出でたりける。夫人は張生のことを以て鄭恒に告げ、るに、鄭恒はかの張生すでに都にて衛尙書が姫の今年十八歳になれるもの、婿となりぬ。彼初めは崔家の婿なりとて婚姻を拒みたれど、そは正しき道によれる夫婦にあらざれば、第二の妻とすべしとて、權勢類なき衛尙書は、聖旨

を請ひて強ひて其の婿に定めたりと、まことしやかに陳べければ、夫人もこれをき、て、わが家の女は人の妾とは爲し難し、今はたゞ前約に依りて吉日を撰び、鶯々を御身に娶すべしと告げぬ。法本和尚は昨日登科録を購ひ見て張生が河中府尹を授けられたるを知り、夫人の心變りやすく、又もや鄭恒と婚姻を結ばんとし、張生を迎ふる意なきを憤りつ、明日は十里の長亭に新任の張生を迎へんものと、鎬鏢をと、のへ待ち居けり。  
杜將軍は、此の度張君瑞が河中府尹に任ぜられしと聞き、これより崔家にいたり君瑞を迎へ、かつは彼が登第を賀ぎ、かつは彼が祝言をつかさどらんとて、禮物をたづさへて蒲關を出で立ちぬ。

第二十齣 衣錦還郷

張生は河中府尹を授けられ、今日錦衣をつけ、姫に送るべき金冠霞帔をと、のへて、いそいそ歸り來りぬ。文章舊乾坤の内に冠たり、姓字新に日月の邊に聞ゆ。

張生唱「七七」

いさめる駒に玉鞭あげて  
都門を出づるわれ大みや人  
今日は三品昨日の寒儒  
たふとき勅みことかしこみ受けて  
名は翰林につらねられける。

「同」八九

思にふけりしわれいまのぞみとげ  
鶯々幸あり官誥夫人たり

忘れ難きは寺の假すまひよ

思出多きは詩詠みかはし、地

都に在りても夢は蒲東の路

張生夫人に見え、恭しく久潤の言をのべて禮すれば、夫人云ふ、聖旨を奉じて他人の婿となりし御身より禮を受くる因縁無し。

「張生唱」五五

つ、しみて禮するを

夫人は誰がために

かくばかり氣色ばむ

はした女としもべらの

しげ／＼と見入れるは

何かわれあるやらん。

張生夫人の氣色おだやかならざる故を問ふ。夫人云ふ、御身いまわが鶯々を捨て、世にときめく衛尙書が贅婿となりしならずや。張生驚き云ふ、さる根も無きこと誰が云ひ侍りし、われ天地の神に誓ひて此の事無しと申さん。

「張生唱」八六

京の女に心あらば

西廂歌劇

ちまたさりあへず澤さばにあれど  
かねてのちぎりを懐おもひ居る身  
よそなる新人しんじん何たづねん。

「同」八八

君聞きまさすやよき人よく見る  
わがうけし恩なさけいかで忘る可き  
いづこの奴やつこか心に妬ねたみて  
御前みまへを斯くまで阻はげまんとはする  
たをやめ得がてに偽りかまふる  
無頼しむきはのしれものいつかは刑場。

夫人云ふ、これ鄭恒が告けたる所にして、紅娘もまた之を知れり。 紅

娘登場して云ふ、あ、先生は官を得て歸り來給へり、われ會ふだに羞  
しや。張生云ふ、姫は健かになるませるか。紅娘云ふ、姫君は君が他に  
入贅したるため、鄭恒に嫁したまへり。張生云ふ、何ばかな。

「張生唱」五六

いづこにか糞土の岡  
相生あひまの樹生きひ出でん  
泥水ひらめに比目魚ひらめ棲まじ

いかにして結縁帳  
ゆ、しくも汚したらん

鶯々は、

西廂歌劇

あか面のさる男に  
とつぎして新妻ぶり

紅娘は、

くすぶれる猫男を  
主としかしづかんか

それがしは、

どぶ出でし泥鼠を  
弟聲と見るべしとや

このやつこ俗を敗り  
人の道そこなふもの。

「紅娘唱」四五

す、みてゐやまをす  
み怒とき給へ

分れてこのかたは  
如何にか暮されし

新の嫁御寮

いづこにましますか  
こ、なる姫君と

くらべて何れぞや。

張生云ふ、汝何を云ふぞ、姫のために受けしわが苦は、他人は知らず、汝のみは知れる筈なるを。

「張生唱」五五

われ他に妻求めば  
目の前に命盡さん

廻廊の月のかげ

いかでわれ忘れんや  
ひたすらに姫愛し  
愛しめばぞ活地獄  
かすくの苦にも耐へ  
さまくに思ひしり  
やうやくの妹よ脊よ

夫人の名みかど賜び

縣君のよび名もち

限りなき歡に

兩手にてわたさんと

來しを今因故無く

正しきを誣ひたりな

紅娘夫人に向ひて、兎にもあれ姫君に對面を許したまへと云へば、夫人もこれを肯ひぬ。鶯々出で來り張生と挨拶をかはす。紅娘云ふ、姫君思ふことあらば言ひ放ち給へ。鶯々云ふ、あ、何をか語らん。

「鶯々唱」四七六

相見ば

いはんと思ひし百千の言

會ひては

ためいきとのみ變り果つる

急ぎて

かへり來ませる君が御前

ひそかに

顔見るだにも最とはづかし

秘めたる

うれひ陳べんと待ちしものを

さて今

一言だにも口に出でず

めでたく

うるはしうこそとばかりなり。

鶯々は張生が衛尙書の婿となりし由鄭恒より聽きたりとして怨めば。  
張生、そは全くつくり言なりと云ふ。

「張生唱」五七

こ、去りて京の住居

佳き人の道行ぶりも

ふりかへり見しことも無し

誣言の衛家の婿と



西廂歌劇

聞くだにも恐しき哉

かの姫の影をし見ても

軽からぬ罪得んものを。

張生はこの度のこと必ず紅娘が計らひならんと考へ、試みに紅娘に向ひ、汝が鶯々のために書信をもて鄭恒を呼びたりとは真なるかと問へば。紅娘云ふ、何とのたまふぞ、われ君がために盡せるを以て他人にも然りと思すか。

「紅娘唱」〔六五〕

君瑞ぬしまどはざれ

憂ふべきはつゆなきに

かの奴は愚なり

この家門の清き名と

世々のほまれあだにして

いかでかわれ書信寄せん。

「紅娘唱」〔八五〕

ものねち知らざるめくらへび

烏を指さし鶯と云ふ

朱をば奪はん紫や

姫が御心のやさしとも

いやしき猫脊の醜の男に

いかでなびかんやゆめにだに

鶯の主は君なるを

した、る縁の嫩枝を

山かつの腕にとらせんや

いつはり企めるかの奴

陥しいれんとすいとし君

あ、口あれどもいひがたし

にくさ胸にみち血潮湧く。

紅娘夫人にむかひて、偽せし鄭恒をこゝに呼び出し給へと云ふ。夫人もこれと同じ考なりければ、紅娘を鄭恒が許に遣はしぬ。

法本登場し、昨日張生を迎へしも遇はざりきとて、夫人に向ひ云ひけるは、張秀才が德行正しきは今ぞ曉り給ひつらん。秀才は決して崔家を忘れず。況して此の婚約は杜將軍の證人たるあるをや。と云へば、鶯々も、張先生がことは杜將軍の來り給はゞ直ちに定まりなん

と云ふ。

「鶯々唱」七五

かれが機略は凡ならず

孫龐賈馬の上在り

されば征西元帥府

陝右河中の主將なる。

「同」八五

それよ前つ日の護の符

今また軍略めぐらして

賊なぞ伏せなば友活きん

かのたはれをとこ人と我  
したしきうときもしらすして  
善人の婦をたぶらかす  
このわる者しも看破かすば  
無能の人とぞ云はれなん。

かゝる處に杜將軍きたり、張生に及第任官の喜をのべ、且つ夫人に向  
ひ、鄭恒が言ふことを眞として、前約を棄てんとするを難じたりしか  
ば、夫人も答ふるに言なく、途方に暮る、折こそよけれ。鄭恒は夫人  
の召せりと聽き、直に婿になる事ならんとて、身様整へ急ぎ來りぬ。  
内に入れば思はざりき張生杜將軍席に在り、忽ち杜將軍の一喝に  
會ひて其の場にひれふしたり。

「張生唱」五七

桃源のみちあながちに  
ふみ入るもかひやなからん

花園の主は誰ぞと

名のらねど蜜おふ蜂は

阻まれん綠色こき

やなぎ蔭聽けほと、ぎす

かへれよと鳴きしきるぞよ。

鄭恒が偽遂に露れければ、杜將軍いよく、其の罪許しがたしとて氣  
息巻きしが、夫人傍より、直ちに鄭恒を追ひ放つべければ、暫く許させ  
たまへと杜將軍をなだめ、鄭恒に此場を立ち去れよと命じぬ。  
あはれ鄭恒は恨めしげに人々を打ち見やりつ、われ頭を大樹の幹  
に打ちつけて死すべきのみと云ひすて、出で去りけり。夫人は己

西廂歌劇

が甥の憐れなる様を見やり、我より死ねとはいはざりしをとて、葬のこと何かと差圖しぬ。

さて夫人はこれより目出度き祝言の式を行はんとて、一度室に退きたる鶯々を呼び出だし、張生とならべて、夫婦の杯を交さしめけり。

「張生唱」〔四六〕

門には駟馬の車

とびらに八椒の圖

大臣のかしこき姫

思ひのとゞきたるも

みなこれ人のちから。

「衆合唱」〔六六〕

大恩人力きはめ

助けざらばかくのごとく

水もらさぬ妹脊成らじ

青雲道すでに通じ

夫婦めをとちぎり今や固し

古よりよきをとめは

よきをとこにあふべきもの

新狀元さいさきよく

花開かんみちせきまで。

「張生唱」七五

浪しづかなる四方のうみ  
臣庶ひとしくひれふせば  
外つ國人もまつろひて  
萬歳の聲山どよむ

伏羲軒轅及ばんや  
舜帝禹王豈しかん  
聖策神機あやまたず  
仁文義武の徳たかく  
賢相上につらなりて

民のかまどは賑ふよ  
萬里の黄河水清く  
五穀はみのる時つ風  
壤たたき腹つゞみ  
唱ふもたのしこ、かしこ  
麒麟鳳凰世に出で、  
治まる御代は八千代まで。

張生鶯々合唱「七七」

今のみかどの勅かしこみ  
かたじけなくもいもせのちぎり  
千代よろづよも永久に離れじ

西廂歌劇

思ひになやむ世の中の人  
はれてちぎりをはやむすばなん。

「衆合唱」五九

月かげに

詠みかはしたるうた

戀に泣く

二人をむすびけり

君瑞が

たかき志とこころざし

鄭恒が

愚なる性おろかさとを

ひとつにて

あゝ今こそ見たれ。

西廂歌劇 大尾

第二十齣 衣錦還郷

西廂記

元曲源流

### 西廂歌劇附錄

- 一、元曲源流
  - 聲律の由來附南北曲
  - 體製の沿革
  - 附元劇の要素
- 二、元劇に於ける西廂の地位
- 三、西廂の文辭と語法
- 四、西廂の諸本

## 西廂歌劇附録

櫻楓齋主人述

### 一、元曲源流

元曲は一朝一夕にして其體例を成せるものにあらず、其源蓋し遠し。今之を聲調と體製との二方面に分ちて、其由來せるところを探究すべし。

### 聲律の由來

周より戰國に至るや、詩一變して辭となり、戰國より漢初に及び、辭一變して樂府となりぬ。漢の武帝樂府を設け、李延年を以て協律都尉となし、司馬相如等文學の士をして詞賦を作らしむるにあたり、塞外との交渉繁く、胡曲の悲壯よく漢人の聽覺を動かすものあるを以て、

元曲源流



聲律の由來

李延年は即ち此を採りて以て律を協へ、司馬は騷體を以て歌を製したりといへり。惟ふに張騫西域に入り、胡人が馬上奏する所の横吹の曲法を西京に傳ふるや、唯摩訶兜勒一曲を得たるのみなりしが、李延年此に因りて更に新聲二十八解を作りたりといへば、胡樂に據りたるは只所謂鼓吹樂のみにして、宗廟郊祀等には尙叔孫通等の採りたりといへる秦樂、即ち周代よりの遺音に據りたるもの多かりしなるべし。然も一面に河間獻王雅樂を奏して用ゐられずといひ、又一面に哀帝其聲を惡みて之を罷めたりとあれば、李延年の聲律が宗廟郊祀の樂にも及びたるものあるは疑ふべからず。後漢の明帝に至り遂に樂を分ちて四品となし、郊廟上陵には大予樂を用ゐ、辟雍享射には雅頌樂を用ゐ、天子羣臣を宴するには黃門鼓吹樂を用ゐ、軍中には短簫饒歌樂を用ゐたりといへど、樂章の傳れるは饒歌樂のみ。然

も蔡邕の如き漢人にして、尙且つ鼓吹と饒歌とを同一に見做したりといふを見れば、明帝が四品の別も恐くは嚴重なる吟嘯はあらざりしならん。而して當時周代の遺聲を傳ふるもの平調、清調、瑟調及清樂あり。六朝の初司馬氏南渡の際、其音亡散し、宋武關中を定むるに及び、其聲伎を收めて南朝の文物最盛と稱せられぬ。後魏の孝文、宣武相繼ぎて南伐し、江左傳ふる所の舊曲、及江南の吳歌、荆楚の西聲を得て、すべて之を清商といひ、殿庭の饗宴にも之を兼奏せり。隨の文帝其節奏を善くして曰く、これ華夏の正聲なりと。即ち更に微しく之を損益し、新に律呂を定め、太常に清商署を置き以て之を管せしめ、清樂といひけり(吳訥文章辯體)。此に由りて之を觀れば、所謂華夏の正聲も種々に彩られ、種々に變遷し來りたる光景瞭々たり。五胡の中原に據るや、種々の聲律亦侵入し來りぬ。梁宋の新聲をこ

聲律の由來

めたる清商樂五十曲に對し、隋の煬帝が大業中に定めたる夷曲一西涼五曲、龜茲二十曲、天竺二曲、康國四曲、疏勒三曲、安國三曲、高麗二曲、禮畢二曲一四十一曲あるを見ても如何に其盛なりしかを知るに足らん。唐の明皇音律を嗜むこと遙に隋の二帝に越え、加ふるに、李龜年兄弟、黃幡綽等の名樂工、名倡優の下に在るあり。是に於てか、隋代の曲律を整頓すると同時に、新聲浸々として進みぬ。婆羅門の曲は、西涼州の都督より獻ぜられ、明皇の潤色を経て、霓裳羽衣曲といふ神秘的のものとなりぬ。煬帝の水調歌頭も新聲を蒙らしめられぬ。胡樂の進めるものには尙甘州、梁州、伊州等あり、皆鼓吹樂にして、石州、渭州、氐州と共に後世之を六州歌頭と稱す。此他錄要即ち六么あり、荔枝香あり、念奴嬌あり、菩薩蠻あり、各種の新聲紛然雜然として起りぬ。當時梨園の子弟が靜心なき様、以て想見するに堪へたり。此の如

くして唐代の聲律は殆ど從來のものを一新したるを見る。  
宋の王灼が碧雞漫志に曰く、

古人初め聲律を定めず、感發する所に因りて歌を爲り、而して聲律之に従ひぬ。唐虞禪代以來是なり。餘波西漢の末に至りて始めて絶えき。西漢には特に今の所謂古樂府といふ者漸く起り、魏晉に盛なりしが、隋氏漢以來の樂器歌章古調を取りて、併せて清樂に入れければ、餘波李唐に至りて始めて絶えぬ。唐の中葉古樂府ありと雖、而も播きて聲律に在るは則ち尠し。士大夫作者たゞ詩の一體を以て自ら名づくるのみ。蓋し隋以來今の所謂曲子といふもの漸く興り、唐に至りて稍盛に、今は則ち繁聲淫奏數ふべからず。故に歌變じて古樂府となり、古樂府變じて今の曲子となれるも、其本は一なり。後世風俗蓋し古に及はず。故に相懸隔するのみ。

聲律の由來

而して世の士大夫も亦多く歌詞の變を知らずと。此言以て漢土傳來の聲律と西域地方より漸次輸入し來れる聲律との歸趨を定むる斷案と爲すべし。

却說前に述べたる如く、唐の玄宗は隋樂を整理し、且つ新聲を發展せしむること頻々たりしが、其整理したる隋樂は所謂法曲にして、坐伎三百を選び、梨園に教へしめ、宮女數百亦梨園の弟子となりぬと傳へらる。而して霓裳羽衣曲は採用せられたる新聲中、最も人の興味を惹くに足りしものにて、碧溪漫志に曰く、

白樂天の元微之が霓裳羽衣曲に和する歌にいふ、磬簫箏笛遞相橫、擊擊吹彈聲迤邐注にいふ、凡法曲の初衆樂齊しからず、惟金石絲竹次第に發聲するのみなるが、霓裳の序初亦また此の如しと。又いふ、散序六奏未動衣、陽臺宿雲慵不飛、中序璧豔初入拍、秋竹吹裂春冰

拆の注にいふ、散序六遍拍なし、故に舞はず、中序始めて拍あり、亦拍序と名づく。又いふ、繁音急節十二遍、跳珠撼玉何鏗錚、翔鸞舞了却收翅、喉鶴曲終長引聲、の注にいふ、霓裳は十二遍にして曲終る。凡そ曲のまさに終らんとする、皆聲拍促速するものなるに、惟霓裳の末のみは長く一聲を引く

と。此に據れば、玄宗の法曲も霓裳も皆大曲たること明なり。大曲は早く已に唐以前に起り、豔、趨、亂を具備す。王僧虔云ふ、豔は曲の前にあり、趨と亂とは曲の後に在り、亦猶吳聲の前に和あり、後に透あるが如しと。凡そ大曲は數散序、鞞排遍、正攔入破、虛催、實催、滾拍、遍歌、殺滾ありて始めて一曲をなす、此を大遍と謂ふとあれば、法曲も霓裳も皆同軌なりしならん。要するに唐代の文物は大宮人を中心として、上流に接近せる方面にのみ發達し、下層社會には普及せざりしも

聲律の由來

の、如し。これ劇の要素備はりながら、未だ其發展を見ざりし所以なり。後其社稷の傾覆にあひて、其樂工倡優が民間に流離を餘儀なくせらるゝに及び、紛々たる五代亂離の間に、已に劇の曙光は見えぬ。後唐の莊宗朔野に起り、樂を嗜むこと甚しく、自ら俳名を附し、俗人と共に粉墨を傳けて其庭に雜戲し、遂に身死して其樂器を以て歛葬せらるゝに至りぬ。宋代に至るまで、汾晉の間尙其聲調を傳ふる者ありき。趙宋の天下を定むるに及び、諸文豪輩出して詞曲大に起り、天子自ら雜劇の詞を作れるものありたるが、太平年久しきを経て、民間の文物亦燦然として起りぬ。これ一に上下樂を同うせんとの見地より禁中の遊戯を公開したるに因るなり。南渡の後紹興の間に、教坊を廢して散居せしむるに及び、各種の聲調は躍然進歩し來りぬ。即ち都城記勝及夢梁錄等の記するところによれば、

小唱を唱叫するは執板唱といひ、慢曲の曲破は大率重起輕殺なるを以て、之を淺斟低唱といひ、四十大曲の舞旋と一體たり。嘌唱は上鼓面唱といひ、令曲小詞虛聲を驅駕し、宮調を縱弄し、叫果子唱要曲兒と一體たり。叫聲は京師より起り、市井諸色の歌吟、賣物の聲に因りて、宮調を採合して而して成れるもの、もし加ふるに嘌唱を引子とし、次に四句を用ゐてなせる時は、之を下影帶といひ、影帶なき者は散叫と名づく。唱賺は京師に在りては只纏令と纏達とあるのみなりしが、引子尾聲あるは纏令にて、引子の後只兩腔を互に循環間用するものを纏達となす。中興後張五牛大夫、人の聽を動かす鼓板中に、又四片太平令、或は賺鼓板とて、拍板の大に節揚する處あるに因りて、遂に賺を撰びたり。賺は悞賺の義にて、人をして正に美聽に堪へしむる間に、覺えず已に尾聲に至るものなり。又

聲律の由來

覆賺あり、花前月下の情を變じて、鏡騎に及ぶの類なり。凡そ賺は、其慢曲、曲破、大曲、嘌唱、耍令、番曲、叫聲等諸家の腔譜を兼ねるを以て最難し。汴京にある時教坊大使孟角球雜劇本を作り、葛守誠四十大曲を撰びたり

とあり。元劇の聲律は此の如くして、其基礎を作られたるなり。

中原音韻に曰く、

大凡聲音各律呂に應じて六宮十一調に分つ、共に十七宮調。而して仙呂調は清新綿邈に、南呂宮は感嘆傷悲に、中呂宮は高下閃賺に、黃鍾宮は富貴纏綿に、正宮は惆悵雄壯に、道宮は飄逸清幽に、大石は風流醞藉に、小石は旖旎嫵媚に、高平は條暢滉漾に、般涉は拾掇坑塹に、歇指は急併虛歇に、商角は悲傷宛轉に、雙調は健捷激裊に、商調は悽愴怨慕に、角調は嗚咽悠揚に、宮調は典雅沈重に、越調は陶寫冷笑

に用う。

と。然も前記傍圈を附したる宮調は當時已に其傳を失ひたるものか、元劇に採用せられたるは、すべて其餘の十二宮調のみなり。

余今此章を終るに臨み、南北曲に就きての所見を附加しおくべし。

樂郊私語は元末の人、桐江の姚桐壽が記するところ、其中に曰く

州の少年多くは善く樂府を歌ふ。其傳皆澈川の楊氏に出づ。康惠公存時にあたり、節俠風流音律を善くし、武林の阿里海涯の子雲石と交よし。雲石は翩翩たる公子、製する所の樂府散套みな駿逸にして、其社會の冠たり。即ち歌聲高引雲漢に徹すべし。而して康惠獨其傳を得たり。今雜劇中豫讓吞炭、霍光鬼諫、敬德不伏老は皆康惠が自製にして、以て祖父の意を寓せるなり。たゞ其著作の姓名を去りたるのみ。其後長公國材、次公少中また鮮于去矜と交

元代の南北曲

よし。去矜も亦樂府の擅場なりしかからに、楊氏の家僮千指南北歌調を善くせざるものなし。これより州人往々其家法を得、能歌を以て浙右に名ありといふ

と。王漁洋の香祖筆記は之を抄録したる上、更に附加して曰く、

今世俗の所謂海鹽腔は實に貫酸齊に發す、源流遠し

と。案ずるに、貫酸齊は至元廿三年より泰定元年まで生存せし人、行年三十九歳にして、中原音韻の著者、周德清に比し、晩生早死の人なり。されど當時已に貫酸齊學士とて、名聲を馳せたるもの、其海鹽腔が果して後世の南曲の如きものなりせば、彼の樂昌分鏡と、もに、德清豈一撃を加へざらんや。知るべし。元代南北二曲の別は明代の南北二曲の別に比し、大に徑庭ありしことを。換言すれば、元初四海混一に際し、海鹽地方の方音は、明時代のごとく、北音と相容れざるものはな

かりしなり。まして録鬼簿に據れば、杭州の人沈和甫はじめて南北二調を合腔し、同州の蕭德祥は古文を皆隱括して南曲となしたりといふにあらすや。南北調の後世の如く別種の看あるものなりせば、いかでか此を一曲中に合腔するを得ん。南北曲の別は、中原音韻に、北音は曲となり、南音は歌となるとありて、古來和聲(即ち母音の引聲)あるものを曲とすといへれば、北曲は樂府のごとく、其母音を引き、南曲は隱括體を始としたる如くなれば、文辭もと自ら修飾に富めるを以て、歌ふこと、即ち言を永うするを主と爲したる點に在るべし。此の如く北は聲律を尊ぶを以て、絃によるしく、南は文辭の妙を玩味せんとするが故に、絃索に合せずして拍板に宜しきは、理の當に然るべき所なりとす。後世崑腔の興起は、即ち此消息を語るものにあらずして何ぞ。之を我俗曲に喩ふれば、北曲は蓋し古浮瑠璃にして、南曲

はそれ近松劇か。

體製の沿革

長短句は唐に昉まり宋に盛なりとは劉克莊等の稱道するところにして、詞を研究するもの一般に此説に傾けるは、蓋し花間尊前の二集などを標準としてのことならんか。故森槐南博士も亦此説を執れる一人にして、其作詩法講話に説きて曰く、漢魏以來の唱歌譜が悉く滅亡したるに關らず、獨り絶句の唱法のみは唐代に傳はり居りて、當時其單調を恐るゝ爲に和聲、散聲、偷聲などいへるものが節廻の上に工夫せられ、つひに之に言辭を當符むる至りて詞となれるなりと。圖書集成詞曲部は楊柳枝鑑戒録を引きて曰く、柳枝歌は亡隋の曲なり。……劉夢得いふ、請君莫奏前朝曲、聽唱新翻楊柳枝と、蓋し後來始めて新聲に變じて、而して所謂樂天楊柳枝を作るとは、其別に詞を創め

しをいふなり。今黃鍾商楊柳枝曲あり、仍これ七字四句詩にして、劉白及五代諸子の製せるところと皆同じ。たゞ毎句の下各三字を増せるは、此乃ち唐時の和聲にして、竹枝、漁父の如き今も皆和聲ありと。此説に據れば、槐南博士の所謂散聲が此處には却て和聲と解せられあるもの、如し。余は暫く之を其專書に譲りて、此處に絮説することを避くべけれども、其和聲の説には抱腹すべきものありて、徹底せざるを憾となすものなり。要するに槐南博士は詞を詩餘といへるより想起して、其起原を唐代流行の絶句に歸せんとしたる爲か、る附會に陥りたるならんか。余思へらく、人の情思を述ぶるに、急促緩慢節に中つて、詩賦となり、歌曲となるもの、其體製のいかでか時代によりて劃定し得べきものならん。長短句の起原を唐代に置かんとするは、決して正鵠を得たる

ものにあらずと。詞統源流に葑園間話をひきて、詞は詩三百篇の餘なりと解して曰く、殷雷の詩に曰く、殷其雷在南山之陽とは三五言調なり、魚麗の詩に曰く、魚麗于罾鱸鯨とは二四言調なり、還之詩に曰く、遭我乎猶之間兮竝驅從兩肩兮とは七六言調なり、江汜の詩に曰く、我以不我以とは疊句調なり、東山の詩に曰く、我來自東零雨其濛鶴鳴于埳婦嘆于室とは換韻調なり、行露の詩に曰く、厭浥行露と、而して其二章に誰謂雀無角とはこれ換韻調なり、凡そ此煩促相宣べ、短長互用して、以て後人協律の原を啓けるは、豈三百篇實に祖禰にあらざらんやと、而して堯山堂外記は又六朝の梁の王筠が楚妃の吟をあけて、句法極めて異なりと稱せり。其辭に云ふ、

牕中曙花早飛林  
中明鳥早歸  
庭中日暖春闈  
香氣亦霏々  
香氣漂當軒  
清唱調獨顧  
慕含怨復含嬌  
蝶飛蘭復薰  
泉々輕風入翠裙  
春可遊歌聲

梁上浮春遊方有樂沈々下羅幕

看來り看去れば、長短句の起原は決して唐に昉れるにあらざること分明なり。其起原や極めて遠し。唐時代に入りては、只其文辭の豊富なりし爲、原曲によりて換へ歌を作り、倚聲填詞といふ技巧を弄すること盛になりたるのみ。而して詞藻鮮麗才思横溢せる詞人に取りては、倚聲の圈内にのみ踟躕する能はざりしと見え、遂に平を仄に、此の宮調を彼の宮調に轉じ或は混する等、所謂某曲の慢とか近とか犯とかいふ類の技巧、漸次發達し來りしが、北宋に及びては、其製作益盛に、其體制益放膽的に傾きて、縦横自在に其富贍の詞藻を發揮し、以て古今獨歩の宋詞を成しぬ。詞統源流は又此につきて語りて曰く、唐人の長短句は皆小令のみ。後演じて中調となり、長調となり、一名にして小令あり、また中調あり、長調あり、或は之に係くるに犯を



以てし、近を以てし、慢を以てして之を別つ。南北劇の犯と名づけ、賺と名づけ、破と名づくるの類の如し。又字數の多寡同じくして、入る所の宮調異なり、名も亦之に因りて異なるものあり。玉樓春と木蘭花とは同じくして、木蘭花を以て之を歌へば、即ち大石調に入る類の如し。又名異にして字數の多寡は則ち同じきあり。蝶戀花一名鳳棲梧、鷓鴣枝といひ、念奴嬌一名百字令、醉江月、大江東去といふ類の如き彈述する能はず

と。されば樂府より出でたる金元の曲が詞即ち詩餘と畦畛を生じたるは、亦當然の歸趨といひて可なり。まして劇曲には襯字といふものありて、普通の填詞のみにては、前後意義の連絡明瞭ならざることあるを補足する爲に、挿入せられたるものが、歲月を経るに従ひて、漸々唐代流行唄の和聲の如く、一曲の一成分と見做さる、様なり來

りて、其體製をして、詞の體製と懸隔せしむること愈甚しくなりたるに於てをや。只茲に考ふべきは、北劇の曲體は詞曲の體と一致するもの極めて少きに、南劇に至りては、其曲體の詞の體製に一致するもの割合に多きことなり。これ南北曲の分離點を考究するもの、思を致さざるべからざる所なりとす。或はいふ、南北曲の分離點は掛りて靖康の變にありと。此説は祝允明が猥談に、南戲は宣和の後に出づ。南渡の際、之を温州雜劇といふとあるより來りたるものならんが、余は單にこれのみにては佩服すること能はざるものなり。周德清が地方的一部の音韻によりたるものとして排撃せる樂昌分鏡の如きを指して、南戲といへるならんも、元代の初期に在りては四海同音を稱へ、貫酸齊學士の海鹽腔すら、別種のものとしては取扱れざりき。且つ又錄鬼簿の記す所に依れば、當時已に南北合腔を創起し

體製の沿革

たるものありといひ、又古文を隠括して南戲を作れるものあり、杭州に盛行したりとも見えれば、元代の南戲は明代の中葉以後に稱せられたる所謂南戲に比して、方音の採用上に關し、大なる懸隔ありしならんと思はる。只南曲の體製は其方音と關連して、古文を隠括して曲を成すもの多き風ありし爲、南曲を以て詩餘に近きものなりとは言ひ得べきなり。庸言報曲海一勾の記者が、南北曲の分離點を以て、一は樂府よりし、一は詩餘よりしたるに歸するは、その如何なる見解に本づくか知る能はざる所なれども、余が研究の結果によれば、此言蓋し大過なきに似たり。尙此につきて明の萬曆以後の詞人が北曲は中原音韻に據り、南曲は洪武正韻に據るべきものと聲言したることの、謬見なることは、余かつて中原音韻の研究を公にせる際、詳述しおきたるを以て、今之を贅せず。

更に茲に附加せんと欲するは、西廂に於ける絡絲娘の曲が、多くは後人のさかしらとして排斥せらるゝことなり。毛西河は之につきて其詞話に論じて曰く

往先に司馬審庶人の處より連廂の詞例を得たり。謂ふ、司唱一人、勾欄の舞人に代りて執唱す。其代唱といふは、即ち己に勾欄に上り居る舞人自唱の意なり。たゞ唱者二人だけにて、末泥は男唱を主り、且兒は女唱を主る。若し雜色の人入場する時は、たゞ白ありて唱なし、之を賓白といふ。賓が主に對して説くに、白は賓に在り、唱者は自ら主あればなり。元末明初に至りて、北曲を改めて南曲となすや、雜色の人も皆唱ひて、賓主を分たず。少時西廂記を觀しに、一劇の末ごとに必絡絲娘煞尾一曲ありて、扮演の手下場の後に於て復唱ひ、且つまた正名四句を念するを見たり。こはこれ誰が唱

元劇の要素

ひ誰が念ずるなるか。末劇に至り、扮演の人、清江引曲を唱ひて下場したる後、また隨然一曲、正名四句、總目四句あり。皆唱者念者の何人なるかを解する能はざりしが、連廂の詞例を得るに及び、則ち司唱者は、坐間に在りて場上にあらず。故に雜劇に變すと雖、猶坐間代唱の意を存す。此種の移蹤換跡漸を以て轉變することは、詞曲の小數といへども、然も亦考古家の當に識るべき所の者なり。と。蓋し其曲の拙劣なるより見れば、王實甫は自ら絡絲娘の曲を附加せざりしならん。然も劇として勾欄に搬演するにあたりては、其當時已に金人連廂の遺習に據りたるものなりとの説は、亦他の元劇の體製上より見るも、理ありといふべし。

附 元劇の要素

唱科白及打諢は元劇の要素なり。此四者もし其一を缺かんか、決して

て元劇にあらず。唱とは五宮七調の各種曲子を登場の主人公自ら坐間の樂に合せて唱ふことにて、王伯良は其校註西廂に何元朗の言を引きていふ、曲緊板に至れば即ち古樂府の所謂趨なり。趨は促なり。絃索中大和絃はこれ慢板なるが、花和絃に至れば則ち緊板なり。北曲中呂の如き、快活三の臨了の一句に至るまでは放慢し來り、ついで朝天子を唱ひ、正宮は呆骨都に至るまで、雙調は甜水令に至るまで、仙呂は後庭花に至るまで、越調は小桃紅に至るまで、商調は梧葉兒に至るまで皆大和絃にして又慢板なりと。此に據れば曲の排列に従つて、其唱法に一定不變の例規あること明なり。科とは、しぐさの事にて、登場の人唱詞につれて舉止をなすものなり。參了菩薩と唱ふ時はたゞ、揖し、只將花笑燃と唱ふ時は花をひねくる類をいふ。白とは「せりふ」のことにて、獨白あり、對話あり。打諢とは筋斗を打つとか、

元劇の要素

啖呵を切るとか滑稽を演ずる類をいふ。史記の滑稽列傳によれば古の倡優は専ら人の意表に出で、以て鑑戒諷刺の意を寓せんと務めたるに似たり。唐の梨園樂宋の華林戲に至りては古を追ひ今に感じて以て太平を飾らんと欲せるもののみ。元劇豈ひとり其圏外に出づる者ならんや。只宋代の雜劇は參軍色の致語口號ありたる後に搬演したるものにて唱科打諢はありしも白はいまだあらざりしなり。元劇に至りて始めて白を加へ劇としての體裁を具備するに至りぬ。或はいふ白は作者自ら作れるもの少く多くは登場俳優の機轉に任せたるものなりと。後世は或は然らん而も元劇草創の際にありては白といへどもまた作者自身の按排結構に待たざるべからざりしは西廂諸本の白が其要點に於て大差なきを見て知るべきなり。

二、元劇に於ける西廂の地位

王實甫の西廂が元槓の會真記に本づきたるは絮説を要せざるところなるが、只會真記は唐代の傳奇小説にして劇にあらず、即ち王實甫が譜せる事實の典據のみ。北宋の趙令時之を蝶戀花の曲となし、會真の文を説くと同時に、更に曲子を作り、唱歌するところ、當時民間に發達したる説唱傳奇なり。當時一奇聞を探りて是を歌曲にしたるものには、馮燕の事を水調歌頭にのせ、西子のことを薄媚に歌ひたるもの、今も猶流傳せるが、かゝることは其他にも尙多くありしならん。先に事實を敘し、後に之を歌曲に唱ふもの、即ち説唱なり。此説唱傳

元劇に於ける西廂の地位

奇にて、現存する最有名なるものを董解元の西廂となす。董解元は金の章宗時代の人にして、その西廂は、會真記の事實を説述すると共に、其當時に發達したる前述各宮調の腔子を以て、巧に人心を鼓動せしむべく唱ひ成せるものなるが、王實甫は實に全然其結構文辭を採用したるものなり。唯彼は説唱傳奇なるからに、其記述終始客觀的にして、説唱者自己の意を以て傳奇を説唱するものなるに、此は劇としてなれば、其唱曲科白悉く主觀的にして、登場者自ら自己の意を表現するの差違あるのみ。然も王西廂は全然董西廂を襲蹈せるのなれば、自己の曲中自己を語るところ、却て三人稱若くは二人稱の語を用ゐたるもの一例へば張君瑞が自ら張解元と唱ふが如き一あるは、當時いまだ説唱家の範疇を脱却し了らざる左券と爲すべし。王西廂は、此の如く董の結構文辭を襲蹈したるに關らず、其當時にありて

是をいへるものなく、中原音韻の著者周德清すら、王西廂の文辭を云々したるのみにて、一語も董解元に及びたることのなきは、故なくはあらず。陶南村の輟耕錄に曰く、

稗官すたれて傳奇作り、傳奇作りて戯曲繼ぐ。金季國初樂府は猶宋詞の流のごとく、傳奇はなほ宋の戯曲の變のごとくなりき。世傳へて之を雜劇といふ。金の章宗の時、董解元が編する所の西廂記は、世代いまだ遠からざるも、尙人の能く之を解する者罕なり。況や今の雜劇中曲調の冗なるをや

と。これ其意義の解し難かりしにあらで、只其語りもの、即ち説唱傳奇として採用したる曲調の、元初早く己に傳を失ひたるを指せるものなるべし。曲調既に解し難く、而も人耳に舊りたる説唱體なり。好奇の人心、いかでか當時新興の雜劇四折體に向つて専ら傾注せざ

元劇に於ける西廂の地位

るを得んや。況や徳清が中原音韻は、其意を専ら雜劇の規矩の上に置きたるものなるに於てをや。只王西廂の妙處、多半は董西廂より來れるものなるに、此に一顧を與へざりし徳清は、彼は金にして此は元なりとの國家的觀念に拘はりたるにあらざるなきを保せざるなり。アメリカの國號が、其の發見者たるコロンバスに據らずして、アメリカによりたると同じく、西廂の月董に對して照らさず、却て王を顯はせるは、時運とはいひがら、悵悵の情禁じあへざるものなくんばあらず。

却說王實甫の西廂は、新興の雜劇四折體を採りて、崔張が艶事を譜したるものなれども、其體たる、草創不固の際なりしを以て、決して後世に稱道せらるゝが如き純然たる北曲體にはあらざるなり。即ち他の元曲に見るが如く、必一場一人專唱といふことなく、一人若く

は二人の參唱あり。西廂傳本中の佳良なるものと見做さるゝ、王伯良本によるも、第四齣雙調第十一章中に紅娘の參唱あり、第十六齣雙調十六章中に旦の參唱あり、末劇第二十齣雙調二十章中に旦紅二人の參唱あり。西廂原本の面影、比較的に饒多なる王伯良本にして既に然り。此歌劇の底本として採用したる陳眉公本の參唱更に多きは人をして、一層怪訝に堪へざらしむる所なり。後世自ら規矩を設けて、北曲は一場一人專唱とし、此に合致せざるものある時は、則ち以て後人の攙入改易となす。西廂のごときは、後人の攙入改易固よりあり。されど往々また、後人のさかしらとのみ見做すこと能はざるものあるを知らざるべからず。此外場頭場末に於て亦他の唱曲あり。場頭にあるは楔子引曲にして、場末にあるは絡絲娘なり。第一齣第九齣第十三齣第十七齣は、皆其初に楔子引曲を有す。此例によ

元劇に於ける西廂の地位

れば第五齣にも引曲ありて可なるに似たれど、必要なかりしと見え、之を缺けり。而して第一齣の引曲も、陸采の説によれば明初周憲王が添加したるものなりとの事なり。此等は皆主唱者以外の唱ふところ、場末の絡絲娘亦然り。絡絲娘は已に體製の沿革を叙したる條に記したれば、茲に贅せず。

要するに、元劇の體例を論ずる上よりは、此等の諸件皆大に考量を費さざるべからず。

そもそも元劇の體例を考へんには、必先づ其前代の雜劇體例を観察するを要す。然るに後唐の莊宗が物せるは、歐陽修の生存せる頃まで尙汾晋の間に傳はれりと其五代史に見えたれど、今之を知るに由なし。これ或は朱竹垞查初白陸次雲等が感興したる倒刺劇の類にはあらざるか。查初白が詩に、

双燕身輕拂地迴、歌頭舞遍一回々。問渠從小誰傳得、似按西涼坐部來。

又陸次雲が滿庭芳詞に

左抱琵琶、右持琥珀胡琴、中倚秦箏、冰絃忽奏、玉指一時鳴唱、到繁音入破、絃曲盡作邊聲、傾可際、忽悲忽喜、忽又恨難平、舞人矜舞態、雙甌分頂、頂上然鐙、更口吟湘竹、擊節堪聽、旋復迴風、滾雪搖絳蠟、故使人驚、哀艷極色、飛心駭、四座不勝情。

とあるにて其大體を想見すべし。次に宋の眞宗鄭聲を喜ばず。而も或は雜劇の詞を爲りしが、未曾て外に宣布せずと、宋史の樂志に見えられたれば、これまた知るべからず。東京夢華錄は孟元老が崇寧より靖康出京までの間の追憶録なり。其中に七月七夕より十五日まで、目蓮救母の雜劇を演ずるを例としたることを記せり。又其駕寶津

元劇に於ける西廂の地位

元劇に於ける西廂の地位

樓に登り、諸軍百戯を呈する條下に、「部樂作り諸軍繳隊雜劇一段あり、繼いで露臺弟子雜劇一段あり。是時弟子某々の輩後來者數ふるに足らず、曲に合せて舞旋訖る」と見え、又宰執親王宗室百官入内上壽の條に、「又破子を唱ひ畢れば、小兒班入り進みて致語し、雜劇を勾きて入場す、一場兩段」とあり。又女童進みて致語し、雜戲を勾きて入場す、亦一場兩段、訖りて參軍色語を作し、女童隊を放てば、又曲子を羣唱し、舞步して出場す」とあり。都城紀勝、夢梁錄亦宋末のものなり。其中に曰く「雜劇中末泥を長となし、毎四人或は五人にて一場をなす。先づ尋常熟事一段を做すを名つけて豔段といふ。次に正雜劇をなす、通じて兩段と名づく。末泥色主張し、引戲色分付し、副淨色嬌態をなし、副末色道化して打諢す。或は一人裝孤を添ふることあり。其曲破斷送を吹くもの、之を把色といふ。大抵みな故事世務を以て滑稽をな

す。本これ鑿戒或は隱に諷諷を爲すなり。又雜班あり、又之を拔和といふ、即ち雜劇の後散段なり」と。此外武林舊事に理宗朝の禁中壽筵樂の次第を列記したる中に、雜劇吳師賢以下「君聖臣賢變」をなす、斷送萬歲聲。又雜劇周朝清以下、三京下書を做す、斷送遶池遊。又雜劇何晏善以下、「楊飯」を做す、斷送四時歡となり。又同書賜筵樂次のところに、「第四蓋致語口號を念じ、雜劇時和を勾きて、堯舜禹湯を演ぜしめ、斷送萬歲聲。意に合せて副末の念せるは、兩露思濃金穴貴、風光遠勝馬候家。第七蓋雜劇吳國寶等年々好を做し、斷送四時歡。意に合せて副末の念せるは、香生花富貴、綠嫩草精神とあり。以上の諸記に據れば、宋代の雜劇は、最初に豔段あり、終に後散段あるも、皆正雜劇兩段とは關係なく、時に正雜劇のみを演じたる様に見ゆ。舊唐書音樂志に、高宗の時の太常の上言をのせていふ「古樂府は、奏



曲の後皆別に送聲あり」と。此に據りて考ふるに、前記斷送萬歲聲、繞池遊、四時歡等は皆曲終りて後のものにて、古樂府の面影を留むるものなること著し。かく觀じ來れば、雜劇の樂府の變なること最早疑ふべからず。而して元代雜劇の楔子は豔段にあたり、絡絲娘煞尾は後散段にあたるものにて、只宋代に在りて、正雜劇兩段と、余り連絡なかりし豔段及後散段をば、元代の雜劇に於て其正雜劇兩段の事實と結び付けたるに過ぎず。かくてその豔段及後散段を擴充して各一齣とし、以て元劇四折の基を作りたるものと見るは、強ち牽強附會の説にもあらざるべし。而して董西廂が樂府によりて、其才思に任せ、縱横自在に各種宮調に倚聲したること、王關西廂も亦金の章宗以後の發達に係る各種の聲律までも採用したることは、前記聲律の由來を述べたるところを現存の王關西廂に照し合せなば、蓋し思半に

過ぎん。たゞ元代の樂府は、六宮十一調のうち、五宮七調を用ゐたるに過ぎず。然るに董西廂は、十二宮調の外、尙道宮及高平調を用ゐたるところあり。尙一个處羽調を用ゐたるところあるが、此羽調は元代に稱せる十七宮調中にあるもの、別名か、はた全然別種のものか、余未だ之を詳にせず。

余が見る所によれば、王關の西廂は董西廂より脱胎し來りて、新興不固の雜劇體を應用したるものなるを以て、其聲律こそ純然たる北曲なれ、體製は後世の所謂南北曲孰れにも該當せざるものなりと思ふ。其の參唱あるものは、後世のさかしらなりと強ひていはば、いはるべきも、第五齣の白馬解圍のみは、之を分ちて二齣となすに非んば、到底一場一人專唱の規例にはまらざるなり。楔子に於ても亦然り。余は重ねていはん。王關の西廂は、樂府の遺聲を傳へて、其聲律極め

て嚴重なる點は、他の元代雜劇と同等なりと雖、體製は聊か異なる所あり、説唱傳奇の範疇を脱せず。これ後世に於て或は傳奇といはれ、或は雜劇と稱せられて、一致せざる所以なり。而して王伯良は、此書事實の浩繁なるを以ての故に新體を創めたるにて、實に南戲の祖なりとさへいへりと。

### 三、西廂の文辭と語法

西廂を研究せんと欲するものは、須らく、先づ其文辭と語法との特種なる點を知らざべからず。何をか特種なる點といふ。曰く方言あり、調侃語(洒落)あり、當時の俚諺あり、縁語あり。而して語法に於ては破格のものあり、元代特有のものあり。看來り看去れば此點に於て

も亦大なる興味無んばあらざるなり。

方語には、

顛不刺的見了萬千　の顛不刺は北人の方言美麗の意。

鶻伶　も亦北語伶俐の意

哩也波哩也哩　北人の方言しかじか云々の意

丑生　當時の北語牛の意

關落　屋角の意。今もまゝ、之を用ゐるものあり

調侃詞には

淥老　眼の義　「鶻伶淥老不尋常」

演撒　有の義

潔郎　僧の義

「莫不演撒上老潔郎」

淥赴　看の義　「淥赴顯毫光」

西廂の文辭と語法

西廂の文辭と語法

酩子裡、暗地即ちそつと人知れず又はくらまぎれに「酩子裡各歸家」

酸丁措大 皆秀才をいふ

俚諺には

惺々惜惺々 同情相憐の意

女大不中留 年頃の女は家に置かぬの意

詩對會家吟 詩は分る人に向つて吟ずの意

噪花技靈鵲兒、垂簾幙喜蛛兒、鵲噪ぎ蜘蛛下るは、待人來るとか

又は善き音信ある兆瑞として今も猶いふところなり。

一事精百事精、一無成百無成 此も今猶いふことばなり

縁語には

柳絲長といひ、後に舊恨連綿とうけ、牽惹水聲、幽、彷徨人嗚咽といひ、後

に肺腑難洵<sup>○</sup>と承けたる。池塘夢曉蘭檻辭春等は皆縁語にして、一見何の奇もなき様ながら、玩味すればする程人をして感に堪へざらしむるものあり。

語法の破格なるものには

當時舜帝慟娥皇 は普通の語法よりすれば、舜帝自ら慟哭したる様なれども、此處は、娥皇に慟哭せられたるをいふなり。

元代特有の語法には接頭語に

則要厮打爲何、把我來厮葬送、等の厮は相打つ、相葬送すといふに同じく「相」の義なり。

接尾語には

毎日價情思睡昏昏々、一個價糊突了胸中錦繡、の價は前の言葉につく接尾語にて意義なし。

副詞には、

誰承望一緘書到爲了媒證 先前見責誰承望今宵歡愛。の誰承望は今、誰知道といふところなり。

師父敢待回來也。畫眉的敢是謊。の敢は今敢自とか敢則とかいふところにて「實に全く」などの義なり。

這的是兜率宮 甚的是渾俗和光。の的是は「ほんにまあ」などの意なり。

兀的不引了人魂靈 兀的般可喜娘龐兒要人消受。の兀的是「豈」又は「あつと」の義なり。

名詞代名詞等の下につく語には、

一壁寫書附京師去。他在那壁。他在那壁。又在巫山那廂。耳邊廂金鼓連天振。の壁も廂も皆「邊」の義なり此は元以前よりありて用

法極めて古し。

貧僧一句話夫人行敢道麼。備在我行口強硬。の行は「ところ」方などの意なり。

句の下につけて其意に制限を與ふる助詞

我則在這裡等待問他咱 小姐休說謊咱。の咱は今の「罷」にあたるものなり

將香棹出來者。將軍是必疾來者。の「者」は命令請求若くはたしかめをあらはす助詞なり

却是誰問他來 去來去來老夫人睡了也。の來は今「了」にあたるものなり

是必休誤了也麼哥 兀的不悶殺人也麼哥。の也麼哥は懇切なるたしかめの助詞なり。

西廂の文辭と語法

此外あぐれば幾らもあれども、さばかりはとてさし置くことにせり。余かつて元朝秘史漢譯年代考をものせる時、淺人あり、余が列記したる元代特有の語法及言語を明代にもありとて、其特有點を非定せんと試みたりしが、爾來歲月を閱みする事既に若干、余が研究は益々自説に確信確證を與ふるのみなり。要するに西廂を讀まんと欲する者は豫め上記の件々を心得居らば、其利益蓋し尠少ならざるべし。而して西廂は實に此等の文辭と此等の語法とを以て、行るに左の結構格調を以てせり。

- 第一齣楔子引曲二章 用東鍾韻 仙呂宮曲十五章 用先天韻 夫人 旦
- 第二齣中呂宮曲二十章 用江陽韻 生
- 第三齣越調曲十五章 用庚清韻 生
- 第四齣雙調曲十一章 用蕭豪韻 生 紅參

- 第五齣仙呂宮曲十四章 用眞文韻 紅
- 正宮曲十一章 用監咸韻 惠明
- 第六齣中呂宮曲十六章 用庚青韻 紅
- 第七齣雙調曲十六章 用歌戈韻 旦
- 第八齣越調曲十五章 用東鍾韻 旦
- 第九齣楔子引曲一章 用廉纖韻 仙呂宮曲十四章 用支思韻 紅
- 第十齣中呂宮曲十九章 用寒山韻 紅
- 第十一齣雙調曲十三章 用家麻韻 紅
- 第十二齣越調曲十三章 用侵尋韻 紅
- 第十三齣楔子引曲一章 用江陽韻 仙呂宮曲十八章 用皆來韻 紅 生
- 第十四齣越調曲十四章 用尤侯韻 紅
- 第十五齣正宮曲十九章 用齊微韻 旦

西廂の文辭と語法

西廂の文辭と語法

第十六齣雙調曲十六章用車遮韻

第十七齣楔子引曲一章用皆來韻商調曲十二章用尤侯韻

第十八齣中呂宮曲十九章用支思韻

第十九齣越調曲十六章用真文韻

第二十齣雙調曲二十章用魚模韻

而して其修辭上より見たる妙處に至りては、諸家の詞話曲話已に之を悉せり。其最著明なるは、第十五齣の頭曲端正好の鶯々の唱となす。即ち

碧雲天、黃花地、西風緊、北雁南飛、曉來誰染霜林醉、總是離人淚、

の句なりとす。されど董詞を視れば、此等は平凡の句なり。余はむしろ

小子多愁多病身、怎當他傾國傾城貌、第四齣

他做了個影兒的情郎、我做了個畫兒裡的愛寵、第八齣

等の平平淡淡々の中いふべからざる情味を含有するものを採らんと欲す。

右の外に、裏詞も數ヶ所に散見したり。此等は皆相當の語句を以て蔽はれれば、専門家の外には、理解しがたかるべし。董西廂に見えたる「不合道、渾如那話初出產門來」の如き、露骨なる惡諺は、王關西廂は採用せざりしなり。

四、西廂の諸本

今普通に西廂を讀むものは、皆金聖歎本に據らざるはなし。これその評語の極めて斬新離奇の言辭より成りて、一時を風靡したるものあればなり。金聖歎は西廂を以て己が才思文藻を銜燿すべき一の道具と爲したり。故に其書は割合に善本を底本としたるらしけれど、又其意に随つて自由に原曲を割裂し、或は其排列を前後更置し、或は削除したるところあれば、畢竟聖歎一家の西廂となり了りて、王實甫關漢卿の西廂にはあらざるなり。此を以て眞の西廂を研究せんと欲するものは、多く聖歎本にあらざるものを獲んとはするなり。明清を通じて西廂の研究者凡數十家、其書の傳はれる者洵に尠し。余が見たるは、僅に左の九種に過ぎず。

新校註古本西廂記 王伯良(署して方諸生といふ)

関刻本西廂記 卽空觀主人

度曲須絃索辯訛 沈寵綬

知本 雍熙樂府

西廂記原本 陳眉公批

余瀟東西廂記

吳山三西廂記 金聖歎

婦合評 西廂記 金聖歎

雲林別 西廂記 金聖歎

聖本 西廂記 金聖歎

右の内雍熙樂府より以上の四種は古本に屬し、陳眉公余瀟東二種は半古半新本に屬し、聖歎本は新本に係る。茲に所謂半古半新本とは、明代南戲の習氣を受けて、其體製を變じたるものをいふ。陳眉公本に、齋壇鬧會の條下皆張生の唱なるに、折桂令の曲と碧玉簫の曲との

西廂の諸本

西廂の諸本

間に錦上花及么の二曲ありて、前のは鶯々の唱とし、後のは紅娘の唱となしたり。此は王伯良本にもあれど、たゞ么を前につゞけて一曲となしあり。請宴の條下快活三に張生の唱を交へ、其の一句だけを紅娘の唱としたり。停婚の條下、慶宣和より得勝令までの三曲を張生の唱としたり。此處王伯良本及三婦本皆鶯々ならざるべからざる論あり。但し王伯良は、古本皆張生の唱とすといふに拘らず、三婦本は古本且唱に作るといへり。同條下江兒水の一曲紅唱とあり。驚夢の條絡絲娘煞を加へて十七章中、生唱十章且唱七章となせり。王伯良本亦然り。末劇衣錦還郷に至りては、生且紅の互唱も他も同じなれども、生且同唱、衆合唱の二つは全く南曲の體製にて、此處王伯良本は極めてあやしき記載法を用ゐるありて、陳眉公本の明瞭なるに如かざるなり。要するに參唱合唱につきては古本と稱する王本も

原本と稱する陳本も殆ど其の差なきなり。

次に閔刻本を見るに、該書は全然周憲王の元本に従ひたるものにて一字も易置増損せずといへば、古本の面影は此に依りて最善く窺ひ知らる、善なり。されど詳細に看もて行けば、また首傾けらる、節なきにあらず。或は恐る前にもいへるごとく、第一齣の引曲二章は、該王の添加に係るとの説ある位なれば、聖歎の西廂のごとく、これ亦周憲王の西廂にして、王關の西廂にはあらざるべきことを。しかしさすがに明初のものだけに、王伯良が古本と稱しながら、末劇に於て齊唱乃ちつれぶしの同唱を許容して恬然たるがごときことはなし。參唱に至りては差違なれど、此につきての説は既に述べたり。雍熙樂府と絃索辨訛とは、共に古本に屬するものなれども、曲章のみをあけて、全斑ならざるを以て、閔刻本や王伯良本に比して、其長短

西廂の諸本



西廂の諸本

をいひがたし。

余瀟東本は南戲の體製に變化したる點最多きものにて、六十種曲所收のものとひとしく陳眉公本と同系統のものに屬す。

聖歎本は一時を風靡したるものから、諸家の手入本も亦從つて多し、爲に同一聖歎本にして字句の差異をさへ生ずるに至れり。其内三婦本が古來諸家の説を摘載したる點に於て、尤利便を與ふ。此書によれば毛西河の西廂古本、曲白多くは聖歎本と符せずとあり。余今に至るも尙未だ西河本を見る能はざるを以て遺憾となす。

余が管見に上れる以上各本、其説明解義に於ては、王伯良本を最とし、白に於ては周憲王本最信すべし。もし夫曲章に至りては、或は襯字を曲章中の語辭と見做したり、或は摺彈家が演曲の都合上適宜に重疊したるところを、却て原曲のまゝと誤解したりする弊は、各本とも

にありて、何れを兄、何れを弟と定め難かり。しかし此等は曲譜を按じ、且つ元人雜劇百種及京都文科大學新印の元曲三十種本に照して、其實例を究めんには、元々本々の曲章に近づかんこと蓋し難事にあらざらん。因にいふ、閔刻本即ち周憲王の元本といふものは、兩三年前、上海に於て覆刻したるを以て、今は極めて得易し。

次に西廂を研究せんと欲する者に勧めたきは、董西廂なり。董西廂は詞藻富贍、遒麗豪宕、奔放、行くとして、佳ならざるなく、讀者をして覺えず血湧き肉躍るの思あらしむ。實に鼓吹曲の上乗なるものなり。

王關西廂、文辭の妙處多くは董より來りたること、一目して知るべし。只王關は此を都冶纖麗に變じたるにすぎず。されば王關の價值は劇としての上にて、在りて、他は董の燒直しなり。董書亦以前は甚得難きもの、一にて、余等東瀛の客は、諸家の摘抄せる斷片によりて、

西廂の諸本

西廂の諸本

心を慰むるのみなりしが、數年前上海に覆印せられて以來、自由に得らるゝこと、なれるは誠に文明の餘澤といふべし。

大正三年大暑病を犯して此稿を了ふ。

西廂歌劇附録終

西廂歌劇おくがき

我國の能狂言が支那の雜劇より來りしものか、或は我國固有の發達に係るものか、といふことは、久しき間の懸案なり。漢學家は強ひて其起原を支那に置かんとし、國學家は強ひて是を固有のものとして爲さんとして、未だ正當の解決を得ず。而して支那雜劇の如何なるものなるかに就きては、兩者ともに門外漢たるなり。近來往々支那雜劇に心を寄する者あれども、眞の研究者と目すべきものは、尙十指に満たず。然も多くは、從來我國に行はれ來りたる漢文學研究法より入らんとするものから、微妙なる言語音韻の勻は味ひ得ざ

おくがき

るに似たり。古今東西何れの地何れの國の歌曲なりとも、此が要素たる言語に通せずしては、其真髓は解し難し。言語には尋常の意義の外に、尙品位と香氣と、滋味とを有す。此すべてを味はずして、尋常の意義のみに満足するは、猶肉汁の殘核を食ふの類なり。吾友宮原天樵君、能く漢土現代の語言に通じ、又文學を嗜む。余曾て其手に成れる西廂記譯文の一片を看て、竊に其才學を認めしが、去年の秋の初つ方一夕談たまたま天囚西村氏が大阪朝日に連載したる南曲琵琶記の事より、詞曲研究の事に及びたる際、余は君に勸むるに、西廂譯文の前稿を續けんことを以てしたり。君謙遜して余が幫助あらばとの事に、余は何も研究の爲なり、然

らば解釋の扞格は談合の上に譲り、語法假名遣等は余之を引受くべく、且つ元劇及西廂に關して、從來の研究家が漏らしたる方面のことを綴り成して附録とすべし、支那劇の趣味を邦人の間に流布せんも亦善からずやとて談は決定したり。稿成りぬとて持ち來られしは今年二月の初余が病と俗務とに惱まされ居る時なりき。當時思へらく十日乃至半月の餘暇あらば、閱了すべしと。則ち暫時手を下さりしが、俗務はいよ／＼繁く、病はますます／＼こぢれて果しなければ、遂に意を決して閲讀を始めたるは三月の初なりき。さて着手し見れば、此處は此にもあらず、彼にても不可なり、兎やせん角やと案じ煩ふことのみ續出する故、即ち架藏の

あらゆる西廂に對照すれば、天樵君が原譯の最適切なるを覺えて、改めんと苦悶したるをこがましさを悔むことも數次なりき。此の如くして晝は病を推して終日俗務に奔走し、夜家に歸れば、直に發汗劑を服して蓐中に入り、惡寒を驅り、疲勞を休め、夜半より筆とりて校訂刪潤に従ひ、天明に至るを常とせしが、精神爽快なる時は、一夜にても一齣、不快の時は、尤頼とせる日曜にすら、僅に半齣を終ふるに過ぎず、甚しきは坐臥進退の間苦吟三日にして漸く一語の譯を成したることありき。かくて少時バイロン集やレデイオフレークに指を染めんとして果さざりしを想起しては、又小生多病多愁身、怎當傾國傾城貌を口吟みつ、筆を採ること凡

そ四十餘日、天樵君に交還したるは五月の初なりきと覺ゆ。即ち文求堂主人に出版の事を謀りしに、主人快諾して、六月末より印刷を始め、七月下旬を以て本文の校正は終りしに、附録とすべきものは未成らず。かくてはならじと身神の疲勞を省みず、十幾日を費して漸く書き成したるが此書の附録なり。校正に臨みて見れば、南北曲の如き一題目の下に纏むべきものを二ヶ所に散在せしめたる如き不體裁を生じあり。これ其材に非ずして輕視したる報か、我ながら赧然たらざるを得ず。さはれ此書果して能く門外漢を堂に上らしむる階梯となるべきか、天囚居士の南曲琵琶記が與へたる如き感興を再び與ふべきか如何に。これ余が徐

おくがき  
 に今後に徴せんと欲する所なり。余今病癒えて元氣日に  
 加る、此方面の貢獻に就きては鐵硯幾回の磨穿も亦辭する  
 ところにあらざるなり。

大正三年八月

南總の海濱最明寺入道に由縁ある處にて

櫻楓齋主人識す


大正三年九月十日印刷  
 大正三年九月十五日發行

定價金貳圓

著譯者 金井保三  
 著譯者 宮原民平  
 發行者 田中慶太郎  
 印刷者 野村宗十郎  
 印刷所 株式會社東京築地活版製造所  
 東京市京橋區築地三丁目十七番地

發行所 東京市本郷區本郷一丁目六番地  
 文求堂書店  
 電話下谷八百二十番  
 郵便東京二百十八番

不許複製



3/2-1  
150  
+

附錄正誤表

三四	二六	一六	二三	三二	一	頁
四	八	五	末	初末	二	行

誤  
聲調  
饒歌  
古浮瑠璃  
壘句  
襲踏せるの  
楔子は豔段  
にあたり絡  
絲娘煞尾は

正  
聲律  
饒歌  
古淨瑠璃  
壘句  
襲踏せる者  
序幕はその  
豔段にあたり  
り大きりは

終

